

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 267

尾崎遺跡

一般国道 429 号改築工事に伴う発掘調査

2024

岡山県教育委員会

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 267

尾崎遺跡

一般国道 429 号改築工事に伴う発掘調査

2024

岡山県教育委員会



1 尾崎遺跡遠景（南西から）

2 炉1検出状況（南東から）



3 土坑19検出状況（北東から）





尾崎遺跡周辺赤色立体地形図 (1/4,000)

序

尾崎遺跡の所在する美作市古町は、岡山県の北東端部に位置し、当遺跡は吉野川を中心として形成された小盆地上に広がっています。周りは後山山地と作東山地からなる山々を取り巻き、北東には県下最高峰の後山がそびえる風光明媚な山間の地です。またこの地域は、古くから山陰と山陽を結ぶ交通の要衝でもありました。

このたび、一般国道 429 号改築工事が計画され、岡山県教育委員会は、この工事の影響を受ける尾崎遺跡の取り扱いについて、関係部局と協議を重ねてまいりましたが、現状のまま保存することが困難な部分について、やむを得ず記録保存の措置を講じることとし、令和 4 年度に発掘調査を実施いたしました。

その結果、縄文時代から室町時代までの遺構・遺物が見つかり、尾崎遺跡の東西方向の広がりが約 250 m に及ぶことが明らかとなりました。また、これまでの成果に加え、新たに古代の鍛冶に関連する炉や鉄滓が見つかりました。

これらの成果を収めた本書が地域の歴史を研究する一助となり、埋蔵文化財の保護・保存のために活用されるならば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書作成に当たりましては、美作県民局や美作市をはじめとする関係機関や地元住民の皆様から御理解と御協力を賜りました。ここに記して厚く御礼申し上げます。

令和 6 年 3 月




岡山県古代吉備文化財センター
所 長 奥 山 修 司

例 言

- 1 本書は、一般国道429号改築工事に伴い、岡山県教育委員会が岡山県美作県民局建設部の依頼を受け、岡山県古代吉備文化財センターが発掘調査を実施した、尾崎遺跡の調査報告書である。
- 2 尾崎遺跡は、岡山県美作市古町1869-1ほかに所在する。
- 3 発掘調査は、令和4年度に物部茂樹・西村 奏・北門幸二郎が担当して実施した。調査面積は1,000㎡である。
- 4 発掘調査に当たっては、令和4年度岡山県埋蔵文化財専門委員の亀田修一氏と山本悦世氏から有益な御指導と御助言を賜った。記して深く感謝の意を表す次第である。
- 5 報告書の作成は、令和4年度に物部・西村、令和5年度に西村が担当した。
- 6 本書の執筆は物部・西村・河合忍が行い、文責をそれぞれの文末に記した。
- 7 本書の編集は物部・西村が分担して行い、全体の編集は西村が行った。
- 8 遺物等の鑑定・同定・分析について、次の方々に依頼し、有益な御教示を賜った。記して厚く御礼申し上げる。
石材鑑定 鈴木茂之（岡山大学）
須恵器の胎土分析 白石 純（岡山理科大学）
- 9 遺物等の鑑定・同定・分析について、下記の機関に委託した。
鍛冶関連遺物の調査 日鉄テクノロジー株式会社
放射性炭素年代測定 株式会社パレオ・ラボ
- 10 遺物写真の撮影に当たっては江尻泰幸の協力と援助を得た。
- 11 本書に記載した出土遺物及び遺構・遺物の図面・写真等は、岡山県古代吉備文化財センター（岡山市北区西花尻1325-3）に保管している。

凡 例

- 1 高度値は標高である。
- 2 座標値・経緯度は世界測地系に準拠している。
- 3 北方位は、平面直角座標第V系（世界測地系）の座標北である。
- 4 遺構名を略す場合は以下のとおりとする。
 竪穴住居：住、掘立柱建物：建物、柱穴列：柱列、柱穴：P、土坑：土、被熱面：熱
- 5 遺構・遺物の縮尺は次のとおりであるが、例外については個々に明記する。
 遺構 竪穴住居・掘立柱建物・柱穴列：1/60、土坑：1/30
 遺物 土器：1/4、石製品・金属製品：1/3
- 6 遺構・遺物の番号は、種類ごとに通し番号を付した。
- 7 土器・陶磁器・瓦以外の遺物は番号の頭に以下の略号を付している。
 漆膜：**W** 土製品：**C** 石製品：**S** 金属製品（滓を含む）：**M**
- 8 ガラス質滓や半溶解石などの遺物番号は、鍛冶関連遺物として**M**を冠した。
- 9 土器実測図において、口縁部または底部を示す上端・下端の線が中軸線の左右で途切れているものは、復元径が不確実であることを示している。
- 10 図中の網掛けは次のとおりである。

	被熱赤化		被熱硬化		炭
---	------	---	------	---	---
- 11 土層と遺物の色調は、『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所色票監修）、『新版色の手帖』（永田泰弘監修 小学館 2002）に準拠している。
- 12 第2図は国土地理院発行の「電子地形図25000」を、第3図は美作市長の承認を得て、同市所管の測量成果美作市地形図（1/2,500）を使用して複製・加筆したものである（承認番号 令和5年3月13日 美作建設第811号）。
- 13 時期区分は一般的な政治史区分に準拠し、必要に応じて文化史区分・世紀などを併用している。

目 次

巻頭図版

序

例 言

凡 例

目 次

第1章 地理的・歴史的環境	1
第2章 発掘調査及び報告書作成の経緯と経過	
第1節 調査に至る経緯	5
第2節 発掘調査の経過	6
第3節 報告書作成の経過	6
第4節 日誌抄	7
第5節 発掘調査及び報告書作成の体制	7
第3章 調査の概要	
第1節 調査区と層序	9
第2節 遺構・遺物	
1 古墳時代以前の遺構・遺物	13
2 古代以降の遺構・遺物	17
第4章 自然科学的分析	
第1節 尾崎遺跡出土鍛冶関連遺物の調査	日鉄テクノロジー株式会社 鈴木 瑞穂 43
第2節 放射性炭素年代測定	株式会社バレオ・ラボ 52
第3節 尾崎遺跡出土土器の胎土分析	岡山理科大学 白石 純 56
第5章 総括	
第1節 尾崎遺跡の変遷	62
第2節 尾崎遺跡出土中世調理具・煮炊具について	66

遺物一覧表・新旧遺構対照表

図 版

報告書抄録

目次

第1章 地理的・歴史的環境	
第1図 遺跡位置図 (1/2,000,000)	1
第2図 周辺遺跡分布図 (1/50,000)	2
第2章 発掘調査及び報告書作成の経緯と経過	
第3図 調査区配置図 (1/3,000)	5
第3章 調査の概要	
第4図 調査区配置図 (1/1,500)	9
第5図 基本層序図 (1/40)	10
第6図 遺構全体図 (1/200)・断面図 (縦1/100・ 横1/200)	11・12
第7図 竪穴住居 (1/60)	13
第8図 竪穴住居出土遺物 (1/6・1/4・1/3) ...	14
第9図 溝1 (1/60・1/30)・出土遺物 (1/4) ...	14
第10図 遺構に伴わない遺物① [縄文時代] (1/4)	15
第11図 遺構に伴わない遺物② [弥生時代] (1/4)	16
第12図 遺構に伴わない遺物③ [古墳時代] (1/4)	16
第13図 遺構に伴わない遺物④ [石器①] (1/2)	16
第14図 遺構に伴わない遺物⑤ [石器②] (1/3)	17
第15図 掘立柱建物 (1/60)	18
第16図 柱穴列 (1/60)・出土遺物 (1/4)	18
第17図 柱穴列と平成17・18年度調査成果との 合成図 (1/400)	18
第18図 土坑1 (1/30)	19
第19図 土坑2・3・4 (1/60)	19
第20図 土坑2 (1/30)・出土遺物 (1/3)	19
第21図 土坑3 (1/30)・出土遺物 (1/4)	19
第22図 土坑4 (1/30)・出土遺物 (1/4)	19
第23図 土坑5 (1/30)	20
第24図 土坑6・7 (1/30)	20
第25図 土坑8 (1/30)	20
第26図 土坑9 (1/30)	21
第27図 土坑9出土遺物 (1/3)	21
第28図 土坑10 (1/30)・出土遺物 (1/4) ...	21
第29図 土坑11～16 (1/60)	22
第30図 土坑11・12 (1/30)・ 出土遺物 (1/4)	22
第31図 土坑13 (1/30)	22
第32図 土坑14 (1/30)・出土遺物 (1/4) ...	22
第33図 土坑15 (1/30)・出土遺物 (1/4) ...	23
第34図 土坑16 (1/30)・出土遺物 (1/4) ...	23
第35図 土坑17 (1/30)・ 出土遺物 (1/4・1/3)	23
第36図 土坑18 (1/30)・出土遺物 (1/4) ...	24
第37図 4区4部分平面図 (1/60)	24
第38図 土坑19 (1/30)・ 周辺出土遺物 (1/4・1/3)	24
第39図 炉1・2 (1/60)	25
第40図 炉1 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3) ..	25
第41図 炉2 (1/30)・出土遺物 (1/3)	25
第42図 被熱面 (1/30)・出土遺物 (1/4) ...	27
第43図 炭溜り (1/30)	27
第44図 4区2部分平面図 (1/60)	27
第45図 溝2・3・4 (1/30)	27
第46図 4区4部分平面図 (1/60)	28
第47図 溝5・6 (1/30)	28
第48図 窪み (1/100・1/80)	29
第49図 窪み出土遺物 (1/4・1/3)	29
第50図 鉄分沈着面 (1/30)・ 出土遺物 (1/4)	30
第51図 柱穴1 (1/30)・ 出土遺物 (1/4・1/3)	30
第52図 柱穴2～5 (1/30)・出土遺物 (1/3) ...	30
第53図 遺構に伴わない遺物⑥ [1区～2区4] (1/4)	31
第54図 遺構に伴わない遺物⑦	

	[1区~2区4] (1/4)	32	第69図	遺構に伴わない遺物②	[4区] (1/3・1/2)	41
第55図	遺構に伴わない遺物⑧ [1区~2区4]		第70図	遺構に伴わない遺物③	[4区] (1/3)	42
	(1/4・1/3・1/2)	32	第71図	遺構に伴わない遺物④	[4区] (1/4・1/3)	42
第56図	遺構に伴わない遺物⑨		第72図	遺構に伴わない遺物⑤	[立会調査範囲] (1/4)	42
	[1区~2区4] (1/3)	32	第4章 自然科学的分析			
第57図	遺構に伴わない遺物⑩		第73図	FeO-TiO ₂ 二元平衡状態図	47	
	[1区~2区4] (1/4)	33	第74図	暦年較正結果	53	
第58図	遺構に伴わない遺物⑪		第75図	各生産地の比較		
	[2区5~3区] (1/4)	34		(K ₂ O-CaO 散布図)	59	
第59図	遺構に伴わない遺物⑫		第76図	各生産地の比較		
	[2区5~3区] (1/4)	35		(Rb ₂ O-SrO 散布図)	59	
第60図	遺構に伴わない遺物⑬		第77図	尾崎遺跡内出土須恵器の比較		
	[2区5~3区] (1/4・1/3)	35		(K ₂ O-CaO 散布図)	60	
第61図	遺構に伴わない遺物⑭		第78図	尾崎遺跡内出土須恵器の比較		
	[2区5~3区] (1/4・1/3)	36		(Rb ₂ O-SrO 散布図)	60	
第62図	遺構に伴わない遺物⑮		第79図	尾崎遺跡内出土須恵器の産地推定		
	[4区] (1/4)	37		(K ₂ O-CaO 散布図)	61	
第63図	遺構に伴わない遺物⑯		第80図	尾崎遺跡内出土須恵器の産地推定		
	[4区] (1/4)	37		(Rb ₂ O-SrO 散布図)	61	
第64図	遺構に伴わない遺物⑰		第5章 総括			
	[4区] (1/4)	38	第81図	遺構分布の変遷	63	
第65図	遺構に伴わない遺物⑱		第82図	土器種別ごとの平均出土点数		
	[4区] (1/4)	39		(出土点数 / m ²)	65	
第66図	遺構に伴わない遺物⑲		第83図	出土調理具・煮炊具の変遷	67	
	[4区] (1/4)	40				
第67図	遺構に伴わない遺物⑳					
	[4区] (1/4)	40				
第68図	遺構に伴わない遺物㉑					
	[4区] (1/4・1/3)	41				

表 目 次

第2章 発掘調査及び報告書作成の経緯と経過			第4表	測定試料および処理	52
第1表	文化財保護法に基づく提出書類一覧 ..	8	第5表	放射性炭素年代測定および	
第4章 自然科学的分析				暦年較正の結果	53
第2表	供試材の履歴と調査項目	48	第6表	尾崎遺跡出土須恵器の	
第3表	供試材の化学組成	48		胎土分析結果 (%)	58

写真目次

第2章 発掘調査及び報告書作成の経緯と経過	写真6 ガラス質滓・椀形鍛冶滓の顕微鏡写真	49
写真1 作業風景1（北東から）	写真7 未製品（鍛造）の顕微鏡写真・EPMA調査	50
写真2 作業風景2（北東から）	写真8 椀形鍛冶滓の顕微鏡写真	51
写真3 現地説明会の様子（南西から）	写真9 試料No.1（PLD-48426）	53
第3章 調査の概要	写真10 試料No.2（PLD-48427）	53
写真4 炉1出土遺物（鍛造剥片・粒状滓・砂鉄）	写真11 試料No.3（PLD-48428）	53
26	写真12 試料No.4（PLD-48429）	53
写真5 炉2出土遺物（鍛造剥片・粒状滓・砂鉄）	写真13 試料No.5（PLD-48430）	53
26		
第4章 自然科学的分析		

図版目次

巻頭図版1-1 尾崎遺跡遠景（南西から）	図版4-1 溝2～4（北西から）
1-2 炉1 検出状況（南東から）	4-2 土坑11～16（北西から）
1-3 土坑19 検出状況（北東から）	4-3 窪み（北西から）
巻頭図版2 尾崎遺跡周辺赤色立体地形図 (1/4,000)	4-4 土坑17（北から）
図版1-1 柱穴列（南東から）	4-5 土坑18（北から）
1-2 1区1 基盤層砂層と調査区北壁（南から）	4-6 掘立柱建物・中世ビット群（北から）
1-3 被熱面（南から）	4-7 4区3・4（北東から）
1-4 被熱面断面（南東から）	図版5-1 縄文土器
図版2-1 炉1 掘り下げ状況（南東から）	5-2 土師質煮炊具
2-2 炉2 検出状況（南西から）	5-3 土師器皿
2-3 炭溜り（南東から）	5-4 須恵器
2-4 土坑1 検出状況（南から）	図版6-1 備前焼・陶磁器・瓦質土器・漆膜
2-5 溝1（南西から）	6-2 石製品①
図版3-1 2区5完掘状況（北東から）	図版7-1 石製品②
3-2 2区4中世土坑・ビット群（南西から）	7-2 土鍾
3-3 堅穴住居（北東から）	7-3 鉄製品①
3-4 土坑8（北東から）	図版8-1 鉄製品②
3-5 土坑9（北西から）	8-2 鍛冶関連遺物

第1章 地理的・歴史的環境

地理的環境

尾崎遺跡は、岡山県北東端部にあたる美作市古町に所在する。当地域は平成の合併前の行政区分では英田郡大原町であり、北上すると西栗倉村を抜けて鳥取県八頭郡智頭町に至り、東は兵庫県佐用郡佐用町に接する。大原地区では、津山盆地東縁からなだらかに続く作東山地と、県下最高峰の後山を含む後山山地が広がり、両山地の中を吉井川の支流である吉野川が南流している。古町付近には舞鶴帯に属する夜久野塩基性岩類が分布し、古生代の閃緑岩や斑レイ岩といった硬質な岩石が含まれる⁽¹⁾。吉野川沿いには谷底平野が続いており、後山川と吉野川の合流地点である古町地区と今岡地区周辺では、比較的まとまった小盆地を形成している。

歴史的環境

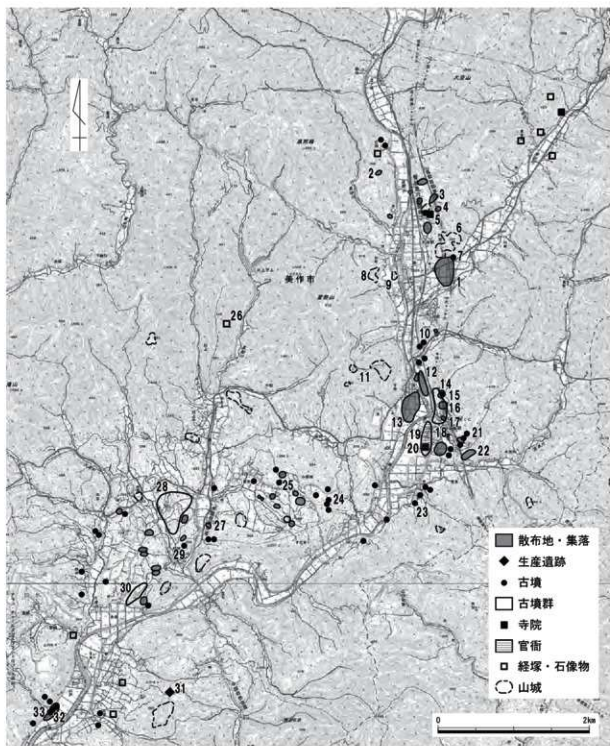
本遺跡周辺には川戸古墳群や今岡庵寺といった各時期の遺跡が存在する。その他、平成16～22年度に実施した中国横断自動車道姫路鳥取線（以下、鳥取自動車道）建設工事に伴う発掘調査では、吉野川流域に所在する多くの遺跡の内容が明らかになった（第2図）。

最古の遺物は、尾崎遺跡⁽²⁾で出土した縄文時代草創期の神子柴型石斧である。本遺跡と中町B遺跡⁽²⁾⁽³⁾では、爪形文や刺突文の施された縄文時代前期の羽島下層式や磯の森式の範疇の土器が出土した。縄文時代後期の土器としては、中町B遺跡で中津式や福田KⅡ式などの磨消縄文土器群や、後続する津雲A式のような縁帯土器群といった後期前葉の土器、また尾崎遺跡では津雲A式に後続する彦崎KⅠ・KⅡ式、凹線土器群に含まれる福田KⅢ式が出土し、八幡山遺跡⁽²⁾では縄文時代まで遡る可能性を含む落とし穴状の土坑3基を確認している。鳥取県智頭町では本州西部で最大級の集落遺跡と評価されている智頭枕田遺跡⁽⁴⁾が調査され、早期から晩期までの竪穴住居、掘立柱建物、集石土坑等が見つかっており、中国山地を挟む両地域での人々の生活がうかがえる。

弥生時代の遺構・遺物で、前期にまで遡るものは確認されていないが、中期から後期にかけては丘陵上で八幡山遺跡、八幡山南遺跡⁽²⁾、穴が澄遺跡⁽²⁾、今岡中山遺跡⁽²⁾、今岡D遺跡⁽²⁾、高岡遺跡⁽²⁾⁽⁵⁾、河岸段丘上で尾崎遺跡、中町B遺跡など多くの集落遺跡が確認された。これら集落では後期中葉以降、西播磨の特徴を有した高杯や器台、タタキ痕が見られる甕、山陰系の複合口縁を持つ甕、生駒西麓の胎土で製作された甕等が出土しており、津山地域の土器様相⁽⁶⁾と類似する。このような諸地域の影響が入り交じった状況から、当該期の山陰と山陽両地域間の交流が窺える。これら集落の多くは古墳時代前期まで継続する様子は認められない。また川戸遺跡⁽⁷⁾で弥生中期の土器に加え、銅鐸形土製品が出土している。近隣の兵庫県佐用郡では同型式の銅鐸が出土しており、関連が目される。



第1図 遺跡位置図 (1/2,000,000)



- | | | | | |
|-----------|-----------|-----------|-----------|-------------|
| 1 尾崎遺跡 | 8 会下城跡 | 15 穴が澄古墳 | 22 高岡遺跡 | 29 桂坪12号墳 |
| 2 池が平遺跡 | 9 縣の構 | 16 今岡D遺跡 | 23 小山2号墳 | 30 赤田古墳群 |
| 3 八幡山遺跡 | 10 山の後2号墳 | 17 今岡中山遺跡 | 24 オの嵐1号墳 | 31 壬生・ナイゲ竈跡 |
| 4 八幡山南遺跡 | 11 竹山城跡 | 18 今岡古墳群 | 25 野形2号墳 | 32 川戸2号墳 |
| 5 八幡山円明寺跡 | 12 中町B遺跡 | 19 今岡遺跡 | 26 真船遺跡 | 33 川戸遺跡 |
| 6 小原山王山城跡 | 13 龍道寺遺跡 | 20 今岡廃寺 | 27 美土路遺跡 | |
| 7 築出し古墳 | 14 穴が澄遺跡 | 21 釜の口1号墳 | 28 桂坪古墳群 | |

第2図 周辺遺跡分布図 (1/50,000)

旧大原町域内で確認されている古墳が約80基である一方、古墳時代の集落に関連する遺構は、今のところ尾崎遺跡の竪穴住居4軒程度である。古墳は吉野川流域を望む丘陵部に主な分布が見られる。箱式石棺を埋葬施設に持つ山の後2号墳⁽⁸⁾は前～中期の古墳とされる。赤田古墳群、桂坪古墳群は吉野川をやや南下し、川に近接する山頂に位置し、中でも桂坪12号墳⁽⁹⁾は全長32mの旧町内唯一の前方後円墳である。周辺地域の前方後円墳としては美作市平福の緑青塚古墳、兵庫県佐用郡佐用町の横坂古墳が挙げられ、これらの詳細な時期は明らかではないが、それぞれとの距離は約10kmと点的である⁽⁷⁾。高岡遺跡周辺には釜の口古墳群、山筋を遡って今岡古墳群⁽²⁾、穴が盗古墳⁽²⁾など中期後半から後期の古墳が集中して築かれている。後期古墳としては穴が盗古墳があり、片袖式横穴式石室内から銀装円頭大刀のほか、鉄製武器、馬具、埋木・ガラス製玉類などが出土した。12基の古墳で形成された今岡古墳群のうち、10号墳は割竹形木棺を埋葬施設にもつ5世紀の方墳である。今岡7・11・12号墳は横穴式石室を埋葬施設とする7世紀の古墳である。また下流には川戸古墳群⁽⁷⁾があり、中でも川戸2号墳は6世紀末～7世紀初頭に位置付けられる大形の方墳で、片袖式横穴式石室からは須恵器有蓋碗、金銅装馬具、銀象嵌鍔の大刀などの副葬品が出土した。

釜の口1号墳⁽⁷⁾、尾崎遺跡に近接する築出し古墳⁽¹⁰⁾は、埋葬主体である石室内に組合式箱式石棺が納められていた。この地域の後期古墳については、美作地域で盛行する陶棺が分布するとともに、播磨地域の影響を受けた小形石棺が存在することが特色として挙げられる⁽¹¹⁾。また、7世紀後半の播磨南部地域で産出する「竜山石」で作られた小形石棺の流行が指摘されており、釜の口1号墳と築出し古墳で見つかった組合式の小形石棺もその流行に関連した遺物である可能性がある。一方吉野川を挟んで向かいの山塊に築かれた野形2号墳⁽⁹⁾からは土師質亀甲形陶棺が出土しており、釜の口1号墳付近からも陶棺の破片が確認されている。

7世紀後半に英多郡(評)が成立し、今岡廃寺⁽¹²⁾をはじめ、大海廃寺⁽¹³⁾⁽¹⁴⁾、櫛原廃寺⁽¹⁵⁾、江見廃寺、竹田廃寺、土井廃寺の6寺が建立される。今岡廃寺は、岡山県内で唯一法隆寺式軒丸瓦を採用した白鳳寺院であり、当軒丸瓦は兵庫県揖保郡の寺院で多く採用されていることから、建立氏族間での結びつきが予想されている⁽¹²⁾。また、この時期の特筆すべき遺物として、骨蔵器が挙げられる⁽¹²⁾。鳥取自動車道建設工事に伴う発掘調査では、尾崎遺跡と八幡山遺跡で須恵器製骨蔵器を納めた火葬墓が確認されている。そのほか出土状況の詳細が不明なものも含めると、旧町内で計10点出土している状況である。

奈良時代には備前国から英田郡ほか6郡が割かれ、美作国となる。今岡廃寺に隣接する今岡遺跡では古代の大形柱穴列が検出され、それらの建築技術の高さや円面硯等の出土から、今岡廃寺の付属施設、有力者の居宅、郡衙の出先機関などの性格が想定されている⁽¹⁶⁾。尾崎遺跡でも規則的な配置の建物や円面硯、緑釉、焼塩土器といった出土遺物の様相から、同様に官衙的な性格が考えられる⁽²⁾。中町B遺跡では道路遺構が見つかり、古代官道「因幡道」であることが推定された。平安時代後期に書かれた日記『時範記』には、承徳2(1098)年に因幡守平時範がこの道を通って任国へ赴き、帰路では今岡廃寺が所在する「佐奈保」で一泊したことが記されている。

この地域では重要な経済的基盤として鉄生産が盛んに行われていたとされており、平城宮跡出土木簡からも旧川上村と比定される地域の鉄が都に流通していたことが明らかになっている⁽¹⁷⁾⁽¹⁸⁾。古代の製鉄遺構自体は確認されていないが、壬生・ナイグ窯跡⁽¹⁹⁾では横口付製炭窯が見つかっており、製鉄に関連する可能性がある。

平安時代末～鎌倉時代にかけて、前代の郷名を引き継ぐ形で大原保、讃甘荘、大野荘、吉野保が成立した。美土路遺跡⁽²⁰⁾では平安時代末期～鎌倉時代の溝や柱穴が見つかっており、溝には直線的で50m以上にわたるものがあることから、区画施設の可能性がある。こうした遺構や輸入陶磁器をはじめとする出土遺物の性格を踏まえ、大野荘に比定されている。

東部にそびえる後山は修験道の霊地とされてきた。東栗倉地域では経塚と伝わるものや石塔の優品が山中などで多く確認されている。また、真船遺跡⁽⁹⁾では室町時代初期と考えられる密教法具21点が1箇所ですべて出土している。これらは山岳信仰に基づいて埋納供養されたと考えられる。

南北朝動乱期の美作国では、播磨の赤松氏と伯耆の山名氏が覇権を争っており、旧町域は赤松氏が支配権を握っていた。戦国期には新免氏が台頭し、尼子氏や毛利氏と攻防を繰り返した。尾崎遺跡の北側に位置する小原山王山城⁽²¹⁾は赤松氏一門である宇野氏が拠点とした山城で、後に外戚である新免氏が城主を務め、その後竹山城⁽²²⁾に移っている。竹山城は新免氏の居城であったが、天正5年に羽柴秀吉に出頭し、織田方へ下っている。小原山王山城や竹山城に囲まれたこの平野には、文献や字名、現地形から城主や家臣の屋敷と推定される場所が複数存在する。

江戸時代には因幡街道が整備され、古町には小原宿が設けられた。現在本陣などを中心に伝統的町並みが保存されている。また、下町に所在する下町陣屋跡⁽²³⁾からは、石垣や石組の雨落ち溝、井戸の他、肥前陶磁器等の近世遺物が出土し、享保18(1733)年に古町から火災により移された代官所の様子が明らかになった。

(西村)

註

- (1) 岡山県史編纂委員会1983『岡山県史』第1巻 自然風土
- (2) 岡山県教育委員会2008『八幡山遺跡・八幡山南遺跡・八幡山円明寺遺跡・尾崎遺跡・中町B遺跡・穴が溜遺跡・穴が溜古墳・今岡D遺跡・今岡中山遺跡・今岡古墳群・高岡遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告213
- (3) 岡山県教育委員会2007『中町B遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書204
- (4) 智明町教育委員会2014『智明杖田遺跡』『智明町埋蔵文化財調査報告書』12
- (5) 岡山県教育委員会2011『高岡遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告232
- (6) 中山俊紀2000『津山の弥生土器4』『年報 津山弥生の里』第7号 津山市教育委員会
- (7) 大原町教育委員会1995『川戸古墳群発掘調査報告書』
- (8) 栗野克己・福田正継1978『山の後2号墳発掘調査報告書』岡山県埋蔵文化財報告』8 岡山県教育委員会
- (9) 佐藤寛介2005『大原町史』史料編(上)考古 大原町史編纂委員会
- (10) 岡田博1985『築出し古墳』岡山県埋蔵文化財報告』15 岡山県教育委員会
- (11) 間壁忠彦1990『播磨の小石棺をめぐって』『今里幾次先生古希記念播磨考古学論叢』今里幾次先生古希記念論集刊行会
- (12) 佐藤寛介2002『今岡廃寺』『大原町埋蔵文化財発掘調査報告』2 岡山県大原町教育委員会
- (13) 正岡陸夫・岡本寛久1978『大海庵寺緊急発掘調査報告書』岡山県埋蔵文化財報告』26 岡山県教育委員会
- (14) 岡本寛久1979『大海庵寺緊急発掘調査報告書Ⅱ』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』33 岡山県教育委員会
- (15) 栗野克己・伊藤晃1976『楡原廃寺跡緊急発掘調査概報』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』13 岡山県教育委員会
- (16) 福田正継2008『大原地区の古代』註2文献
- (17) 奈良国立文化財研究所1978『平城宮発掘調査出土木簡概報』12 奈良国立文化財研究所
- (18) 奈良国立文化財研究所1989『平城宮発掘調査出土木簡概報』21 奈良国立文化財研究所
- (19) 亀山行雄1994『壬生・ナイダ宮跡』岡山県埋蔵文化財報告』24 岡山県教育委員会
- (20) 岡山県教育委員会1987『美土路遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』64
- (21) 岡山県教育委員会2020『岡山県中世城郭跡総合調査報告書』第2冊一美作編一
- (22) 岡山県教育委員会2007b『下町陣屋跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告205

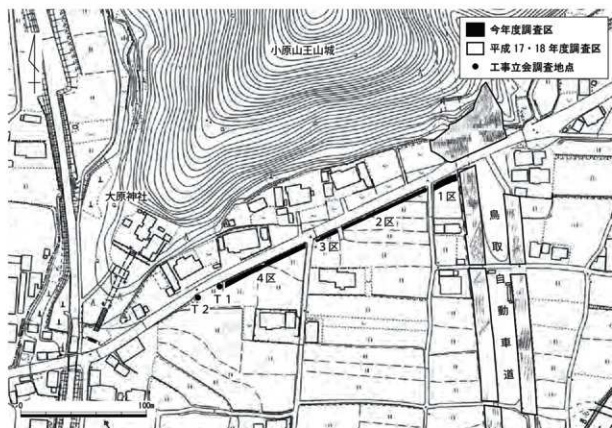
第2章 発掘調査及び報告書作成の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

一般国道429号は、倉敷市玉島から京都府福知山市までを結ぶ総延長約250kmの幹線道路である。美作市古町地区で、兵庫県赤穂市と鳥取県鳥取市を結ぶ一般国道373号と約1km重複するが、古町の交差点から北東の東栗倉総合支所方面に分岐している。この分岐点付近は道幅が狭くなっているが、通学路にも指定されていることから、その拡幅について地元からの強い要望が出されていた。

路線内の埋蔵文化財の取り扱いについては、令和3年6月に事業を担当する岡山県美作県民局勝英地域工務課から岡山県教育庁文化財課へ照会があり、その後、両者で協議を重ねてきた。

工区は東西に長いため、複数年による工事施工が計画されていた。令和3年度は、鳥取自動車道から北東側350m区間において工事が計画されていた。周知の埋蔵文化財の範囲外ではあるが、遺跡の隣接地に相当し、遺跡が広がる可能性があったため、県民局は令和3年6月14日付で文化財保護法第94条に基づく「埋蔵文化財発掘の通知」を提出し、県文化財課は工事立会の実施を勧告した。それを受けて、10月に区間内の2か所で工事立会を行い、遺跡が東に延びないことを確認し、以降慎重に工事することを伝達した。



第3図 調査区配置図 (1/3,000)

一方、鳥取自動車道から南西側の210m区間は周知の埋蔵文化財の包蔵地である尾崎遺跡にあたるため、発掘調査が必要と回答を行い、令和4年度の記録保存調査の実施を前提に協議を進めた。調査対象範囲の北東端については、平成17年度に県教育委員会が実施した鳥取自動車道建設に伴う発掘調査によって、縄文時代から中世にいたる遺構・遺物が確認されていること、それに加え、事業対象地全体は地形が連続していること、また土器の散布も対象地の広い範囲で認められることなどから、周知の埋蔵文化財包蔵地にかかる範囲全体の1,000㎡を調査対象とした。

令和4年2月1日付で県美作県民局は文化財保護法第94条に基づく「埋蔵文化財発掘の通知」を提出し、県文化財課は発掘調査の実施を勧告した。以上の経緯を経て、令和4年4月から尾崎遺跡の記録保存調査に着手した。(河合)

第2節 発掘調査の経過

調査環境の整備後、令和4年5月9日から現地の発掘調査を開始した。調査地は水田と水田休耕地であるため、調査区への漏水が少ない休耕地の1区と4区西半から調査を始めた。5月の終わりには近隣の田植えが完了し、4区東半部は常時水没状態となったので、この地区の調査は田の水が落ちる8月下旬以降にすることにした。また、2区に接する水田は管理者の厚意により畑作に変更され、このことが調査において非常に大きな助けとなった。調査区北側に接する水路からの漏水は思っていたより少なく、自動式の水中ポンプ、人力移動可能なノッチタンクを組み合わせて対応した。調査範囲外に排土置場を確保できなかった2区は、長さ約10mの8つの小区画に分け、3区画を1組と捉え、1区画を調査、2区画を排土置場とし、1区画の調査が済めば重機で排土を移動し次の1区画を調査した。夏期には暑さを防ぐため寒冷紗の形や設置方法を工夫し、作業地に日陰を作った。

調査の結果、遺構・遺物とも1～4区全域で確認された。

調査期間中に美作市立大原小学校と東栗倉小学校の6年生、大原中学校2年生の見学や職場体験に対応するとともに、地元向けの現地説明会を開催した。美作市大原支所や大原公民館、地元地区の皆さんの御理解と御協力を得て、10月に無事発掘調査を終了することができた。

その後、文化財課は本調査区の西側に続く事業区域の工事立会を令和5年4月17日に行った。4区の西隣に設定したT1では中世と思われる柱穴2基と細い溝状の遺構を、15m西に設定したT2では中世と思われる柱穴と弥生時代と思われる土坑状の遺構を検出した。両トレンチの遺物包含層からは古代から中世の遺物が出土した。この調査結果によって埋蔵文化財包蔵地の範囲を拡大させることとなった。(物部・西村)

第3節 報告書作成の経過

報告書作成は、発掘調査に引き続き、令和4年11月から調査員2名で、令和5年度は1名で行った。土器洗浄の過程で比較的多くの鉄滓が抽出された。土器片は概して小片であり、あまり接合せず、離れた距離での接合は認められなかった。出土した層位ごとに、土器の種別や器種、時期の同定に時間を割いた。また鍛造片や粒状滓、砂鉄などの微細な遺物の抽出に時間を要した。錆の多い鉄片や鉄製品についてCTスキャニング機器を用いて、形状や内部構造を把握した。遺構・遺物の浄書は作業

を効率的に進めるためデジタルトレースで行った。令和5年1月には、遺跡の立地や性格を考察するために調査地及びその周辺の三次元地形測量を実施した。

(物部)

第4節 日誌抄

令和4年度

4月1日(金)	発掘調査事業開始・調査準備
5月9日(月)	発掘調査開始・4区調査開始
5月10日(火)	資材搬入
	1・2区重機による掘削
5月16日(月)	1区調査開始
6月1日(水)	2区調査開始
8月30日(火)	埋蔵文化財専門委員調査指導
9月5日(月)	3区調査開始
9月12日(月)	2区重機による掘削
10月1日(土)	現地説明会開催
10月5日(水)	4区重機による掘削
10月14日(金)	1区調査終了
10月24日(月)	2区調査終了
10月25日(火)	3区調査終了

10月26日(水)	4区調査終了
	重機による埋め戻し
10月27日(木)	資材搬出・発掘調査終了
10月31日(月)	発掘調査事業終了
11月1日(火)	報告書作成事業開始
1月16日(月)	三次元地形測量実施
2月20日(月)	岡山大学鈴木茂之特命教授による 石材鑑定指導
3月31日(金)	報告書作成事業終了

令和5年度

4月3日(月)	報告書作成事業開始
4月12日(水)	岡山理科大学白石純教授による胎 土分析
9月29日(金)	報告書作成事業終了

第5節 発掘調査及び報告書作成の体制

令和4年度

岡山県教育委員会

教育長 鍵本 芳明

岡山県教育庁

教育次長 浮田信太郎

文化財課

課長 江草 大作

副課長 尾上 元規

総括副参事(埋蔵文化財班長) 河合 忍

副参事 松尾 佳子

主事 金田 涼

岡山県古代吉備文化財センター

所長 大橋 雅也

次長(総務課長事務取扱) 浅野 勝弘

参事(文化財保護担当) 柴田 英樹

<総務課>

総括副参事(総務班長) 福池 光修

主幹 井上 裕子

<調査第三課>

課長 澤山 孝之

総括副参事(第二班長) 物部 茂樹

(調査・報告書作成担当)

主事 西村 奏
(調査・報告書作成担当 5月～)

主事 北門幸二郎
(調査担当)

令和5年度

岡山県教育委員会

教育長 鍵本 芳明

岡山県教育庁

教育次長 國重 良樹

文化財課

課長 浜原 浩司

副課長 尾上 元規

総括副参事(埋蔵文化財班長) 河合 忍

主任 藤井 翔平

主事 金田 涼

岡山県古代吉備文化財センター

所長 奥山 修司

次長 柴田 英樹

総括参事 弘田 和司

<総務課>

課長 福池 光修

副参事 網輪 桂子

第2章 発掘調査及び報告書作成の経緯と経過

主任 中江 理恵
主任 西山祐太郎
〈調査第二課〉
課長事務取扱 弘田 和司

総括副参事（第二班長） 米田 克彦
主 事 西村 奏
(報告書作成担当)

調査・報告書作成協力者

稲本悠一（兵庫県まちづくり技術センター）
樋口英行（高梁市教育委員会）



写真1 作業風景1（北東から）



写真2 作業風景2（北東から）



写真3 現地説明会の様子（南西から）

第1表 文化財保護法に基づく提出書類一覧

埋蔵文化財発掘の通知（法第94条）

番号	文書番号 日付	種類 名称	所在地	目的	通知者	通知日	主な 勧告事項
1	教文埋 第654号 R3.7.30	栗原跡 尾崎遺跡	美作市古町1869-1 ほか	道路	岡山県美作県民局局長	R3.6.14	工事立会
2	教文埋 第1720号 R4.2.1	栗原跡 尾崎遺跡	美作市古町1869-1 ほか	道路	岡山県美作県民局局長	R4.2.1	発掘調査

埋蔵文化財発掘調査の報告（法第99条）

番号	文書番号 日付	種類 名称	所在地	面積（㎡）	原因	報告者	担当者	期間
1	岡古調 第15号 R4.5.9	栗原跡 尾崎遺跡	美作市古町1869-1 ほか	1,000	道路	岡山県古代古備文化財センター 所長	物部茂樹 西村奏 北門幸二郎	R4.5.9 ～ 10.31

埋蔵文化財発見の通知（法第100条第2頁）

番号	文書番号 日付	物件名	出土地	出土年月日	発見者	土地所有者	現保管場所
1	教文埋 第1310号 R4.11.4	土器・陶磁器（縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、勝間田焼、備前焼、青磁、白磁）、瓦、石製品、鉄洋ほか 計 整理箱 67箱	美作市古町 尾崎遺跡	R4.5.9 ～10.27	岡山県教育委員会教育長	岡山県	岡山県古代古備 文化財センター

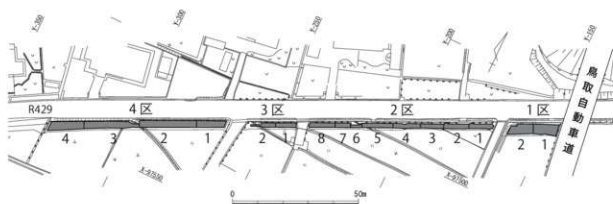
第3章 調査の概要

第1節 調査区と層序

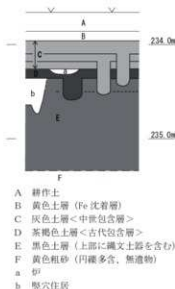
後山川が形成した谷底平野の幅は約300mと広く、南縁に後山川が、北縁に小原山王山城跡の立地する丘陵がある。尾崎遺跡はその平野幅いっぱいに広がっており、その北部を一般国道429号が北東-南西方向に走っている。調査区は道路の南側に沿って、鳥取自動車道のある東から道路等を境に1~4区とし、調査排土の移動計画に従って調査区の中をさらに小さく区分した。調査区の全長は約200m、幅は平均3mである。

耕作土上面の標高は1区が約237.0m、2区4が236.5m、3区が236.0m、4区4が234.8mを測り、1区から西に200mで2.2mほど下がり、そこから西約480m、約10m下がって南流する吉野川となる。南北方向は、1区から約320m南で5mほど下がって後山川となる。そのため、尾崎遺跡は北の丘陵山裾から南そして西に向けて緩やかに下がっていく緩斜面に立地しているといえる。

第5図に基本層序を模式的に示した。これは2区7の断面土層に主な遺構の検出層位を加筆したもので、土の特徴からA~F層に分別した。1~4の調査区東西約200mのなかで、各層は厚くなったり薄くなったり、ある地点では見当たらなくなるが再び現れる、などの変化はあっても基本的にはいづれの地点も一様の層序と認識された(第6図の遺構全体図・断面図参照)。A層は現代の水田耕作土で、その直下には水稲による鉄分(Fe)が沈着した黄色土層Bがある。これらの層には近世~現代の陶磁器などを包含しているが、中世以前の須恵器や土師器などの細片も比較的多く含んでいることから、本来下位にある中世包含層である灰色土層Cの一部であったと推定される。このC層は地形に合わせて傾斜して堆積していることから水田層とは考えられない。C層の厚さは1区で約10cm、西に行くにしたがって徐々に厚くなり2区8で約35cm、3区で再び10cm足らずとなり、また西に徐々に厚くなって4区4で約40cmとなる。これは緩やかに斜面堆積するC層の上部を上位のA・B層が耕作に伴い水平に削平したことによると考えられる。層の厚い4区4や2区6~8などでは3層程度



第4図 調査区配置図 (1/1,500)



第5図 基本層序図 (1/40)

に分層できるが概して明瞭ではない。しかし、C層の上層は備前焼挿鉢201(第63図)が出土したことから、15世紀後半以降の時期が考えられる。また、C層から出土する糸切り底の須恵器椀は勝間田焼や東播系あるいは西播系といわれる須恵器で、底部内面が段をもって窪むものから底部外面の周縁の屈曲が目立たないものまでであることから、C層の中層は13世紀以降と推定され、C層の下層の時期は遺構との切り合いなどから13世紀以前の可能性が高い。D層は茶褐色土で上面に鉄分・マンガンの沈着が見られ、1区及び2区東部ではガチガチに硬い。出土する須恵器蓋杯はほぼ高台が踏ん張る8世紀代のもので、D層の時期も8世紀を中心とすると考えられる。E層は黒色土層で、上部は遺物を含み、縄文土器以外にも弥生土器、石器が混在して出土することから弥生時代後期を中心とする時期に形成された包含層と考えられる。それより下部は無遺物となり、2区8付近ではF層まで深く、色味も黒色から漸的に黄色になる。F層は黄色の粗砂層で円礫を多く含んでおり、河原の状況を示す。1区ではその上面にE層の黒色土が充満した不整形な窪みが多数見られた。これらは、草木の根や株の痕跡と推定される。(物部)

1区

- 1 褐色土 10YR4/1<耕作土>
- 2 暗褐色土 10YR3/4 (小礫多含)<客土>
- 3 黄褐色土 10YR5/6 (上部にFe沈着)
- 4 褐色土 10YR5/1
- 5 明黄褐色土 10YR7/6 (Fe沈着)
- 13 褐色土 10YR5/1 (-16)
- 31 暗褐色土 10YR3/4 (Fe・Mn沈着、硬質)
- 32 黒褐色土 10YR3/1
- 50 黒色土 2.5Y2/1 (円礫含、軟質)
- 51 黒褐色土 10YR3/2 (円礫含、軟質)
- 52 黒褐色砂質土 10YR2/1 (円礫含)

2区

- 6 褐色土 10YR5/1
- 7 明黄褐色土 10YR6/6 (Fe沈着)
- 8 明黄褐色土~黄褐色土 10YR6/8 ~ 5/6
- 14 灰黄褐色土 10YR4/1 ~ 6/2 (上段)
- 15 灰黄褐色土~にぶい黄褐色土 10YR4/2 ~ 4/3 (黄土塊含) (灰色土上層) (下黄)
- 16 灰黄褐色土~褐色土~暗褐色土 10YR5/2 ~ 4/4 ~ 3/3 (Mn沈着) (下灰)
- 33 黄褐色土 10YR5/6 (Fe沈着)
- 34 黒褐色土 10YR3/1 ~ 3/2
- 35 灰褐色土 7.5YR4/2<上面に焼土面あり>
- 36 <焼土粒集中>
- 37 <砂1>
- 38 にぶい黄褐色土 10YR4/3
- 39 黒褐色土 10YR2/3
- 40 黒色土 7.5 ~ 10YR2/1
- 41 暗褐色土 7.5YR2/3 (Fe・Mn沈着、一部炭・焼土粒含)
- 42 黒褐色土 10YR3/2
- 43 明褐色土 7.5YR5/6 (Fe沈着、土層土塊混)
- 48 <溝1>
- 53 黒色土 10YR2/1 (円礫含) (-49)
- 54 暗褐色土 10YR3/3 (円礫含) (-50)

55 黒褐色土 10YR3/1 (円礫含) (-51)

- 56 黒褐色土 10YR3/1 (円礫多含)
- 57 暗褐色土 10YR3/4 (円礫含)
- 58 黒色土 10YR2/1
- 59 黒色土 10YR2/1 (砂質)
- 60 黒褐色土 10YR2/2
- 61 暗褐色土 10YR3/3
- 62 <木灰含>
- 63 黒色土 10YR2/1 (20m下円礫含)
- 64 褐色土小角礫層 10YR6/1
- 65 黒色土 10YR2/1 (円礫少含)
- 66 浅黄色弱粘質土 (きれいな土)

3区

- 9 褐色土 10YR5/1
- 10 黄褐色土 10YR5/6 (Fe沈着)
- 17 にぶい黄色土 10YR4/3 (Mn粒少含)
- 18 <土坑8>
- 49 <懸穴住居>
- 67 黒褐色土 7.5YR3/2
- 67 黒褐色土 7.5YR3/2
- 68 暗褐色土 10YR3/4
- 69 明黄褐色土 10YR7/6 (礫含) (-67)

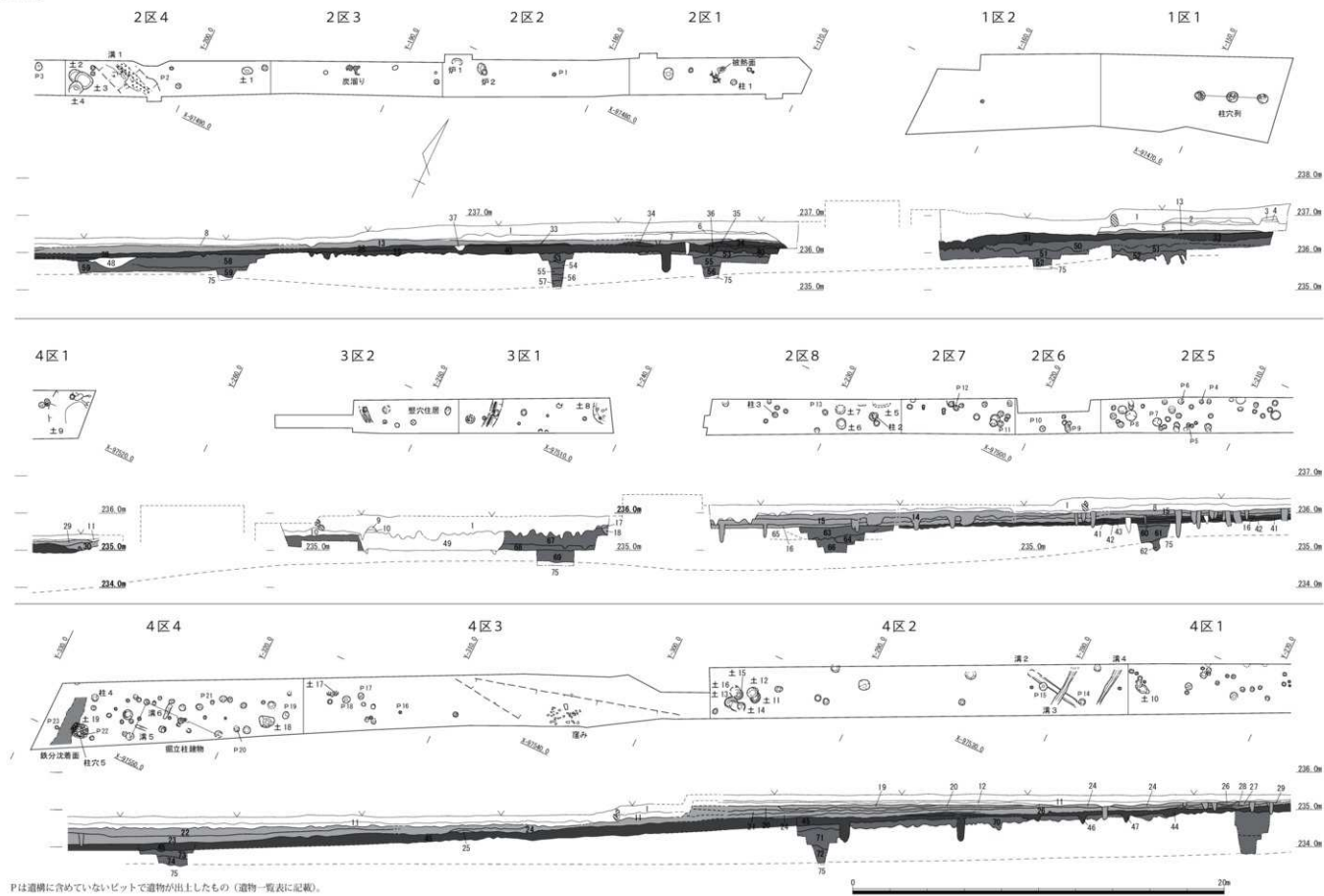
4区

- 11 黄褐色土 10YR5/6 (Fe含)
- 12 黄褐色土 10YR5/3 (下部にFe沈着)
- 19 にぶい黄褐色土 10YR5/3 (下部にFe沈着)
- 20 にぶい黄褐色土 10YR5/4
- 21 褐色土 10YR4/6 (粗砂混、炭少含)
- 22 褐色土 7.5YR6/8
- 23 灰黄褐色土 10YR5/2
- 24 灰黄褐色土 10YR5/2 (細砂混) ~暗褐色土 10YR3/3
- 25 粗砂?
- 26 黄褐色土 10YR5/8 (Fe含)
- 27 にぶい黄褐色土 10YR4/3

- 28 暗褐色土 7.5YR3/4
- 29 にぶい黄褐色土 10YR5/4
- 30 <土坑9>
- 44 黒褐色土 10YR3/1 (Fe沈着)
- 45 黒褐色土 10YR3/1 ~ 2/3
- 46 <溝3>
- 47 <溝4>
- 70 褐色土 10YR4/1
- 71 黒色土 10YR2/1 (円礫含)
- 72 黒色~暗褐色土 10YR2/1 ~ 3/3 (円礫、粗砂混)
- 73 黒褐色土 10YR2/2
- 74 暗褐色土 10YR3/3

75 にぶい黄褐色土~明黄褐色粗砂 10YR6/4 ~ 7/6 (円礫多含)

- 1 ~ 2 : A層
- 3 ~ 12 : B層
- 13 ~ 30 : C層
- 31 ~ 49 : D層
- 50 ~ 74 : E層
- 75 : F層



Pは遺構に含めていないピットで遺物が出したものを(遺物一覧表に記載)。

第6図 遺構全体図 (1/200)・断面図 (縦1/100・横1/200)

第2節 遺構・遺物

1 古墳時代以前の遺構・遺物

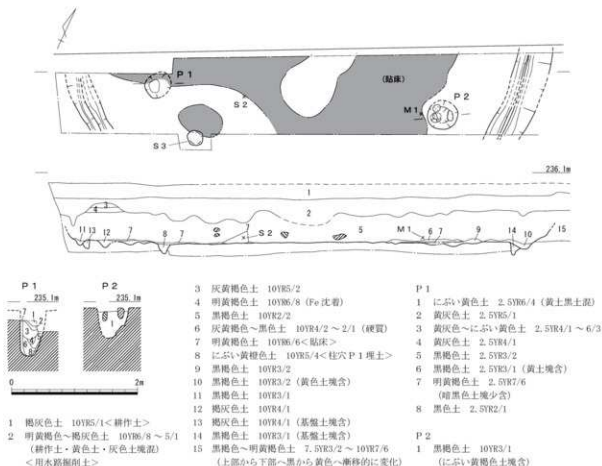
概要

古墳時代以前の遺構には、弥生時代の竪穴住居1軒と溝1条がある。出土遺物は、縄文土器（前期・後期・晩期）、弥生土器（前期・中期・後期）、古墳時代の須恵器や土師器など多時期にわたる。それらの多くは古代・中世など後世の包含層に混入したものである。（物部）

竪穴住居（第7・8図、図版3）

3区で検出した竪穴住居は、黒色の基盤層に黒色の埋土であるため、側溝の断面に厚さ5mm前後で水平に伸びる黄色の貼り床を確認し、住居と認識できた。輪郭が僅かであるが湾曲していることから円形の平面形と考えられ、直径は約8mと推定できる。壁体溝のすぐ内側にもう1条の壁体溝があり、断面土層から壁を一回り広げる改修が行われている。貼り床は部分的に施され硬質である。確認された柱穴は2個で、どちらも壁体溝から1m程度離れた位置にある。P1は直径約40cm、床面からの深さ48cm、P2は直径約50cm、床面からの深さ33cmを測る。

床面上の遺物には剥片S2と台石S3、鑿または鑿M1がある。S2は玄武岩の原石への最初の打

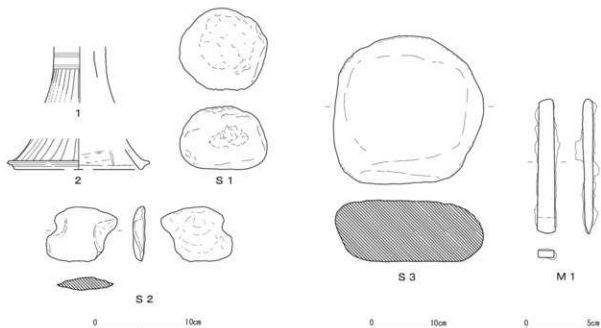


第7図 竪穴住居 (1/60)

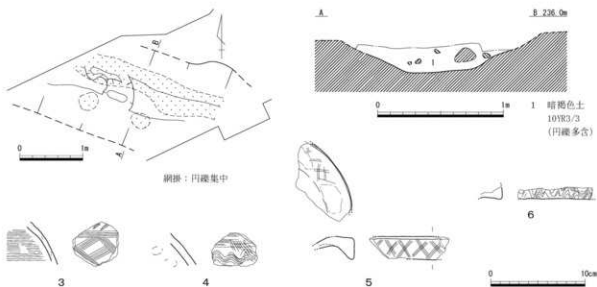
撃で生じたと推定される。原石の種類は違うが同様の剥片が八幡山遺跡の弥生時代中期後半の竪穴住居等で多く見つかり、注目される。S3に明確な使用痕跡は認められない。M1は完形品で片方の小口に刃をもつ。S1は敲き石と思われ埋土中から出土した。土器は少なく、その中で最も下位の埋土中層から出土したのが高杯脚部2で、埋土上層出土の1と同一個体と考えられる。透かしが線刻になっているなどの特徴から、時期は弥生時代後期初頭と推定する。（物部）

溝1（第9図、図版2）

2区4で検出された。幅は約1.6m、検出面からの深さは28cmを測る。両壁はなだらかな傾斜で、底面は黒色の基盤層に含まれる礫が顔を出し凸凹している。埋土中には溝が埋まる過程で堆積したと推定される円礫が帯状に認められた。土器は格子状や波形の櫛描き文様のある壺の破片3～6のみであり、溝の時期は弥生時代中期中葉と考えられる。（物部）



第8図 竪穴住居出土遺物 (1/6・1/4・1/3)



第9図 溝1 (1/60・1/30)・出土遺物 (1/4)

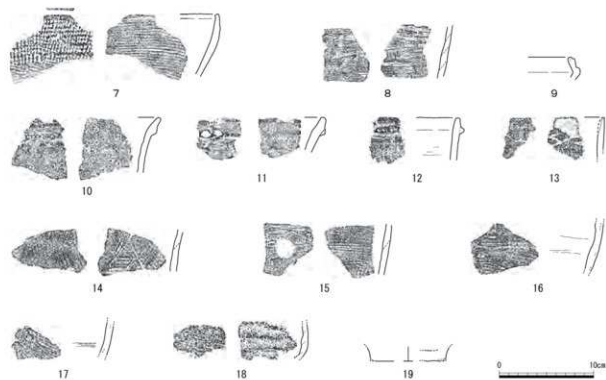
遺構に伴わない遺物（第10～13図）

第10図は縄文土器である。7は地文が内外面共に条痕文である。口縁部は4連一単位の刺突文で飾られ、口唇部には刻み目が廻る。前期前半、羽島下層式の深鉢と考えられる。8は内面が巻き貝で施されたような浅い横位の凹線によって表面調整されている、後期の鉢か。9は口縁部に凹線が施され、内側に屈曲した口縁形態となる、彦崎KⅡ式以降の後期の鉢か。10～12は刻み目を有する突帯文土器である。なお口唇部に刻み目は見られない。これらは晩期後葉、沢田式の範疇に入る深鉢であると考えられる。13は口縁部外面に縄文が施される、浅鉢か。14～18は地文に条痕文が施される破片である。

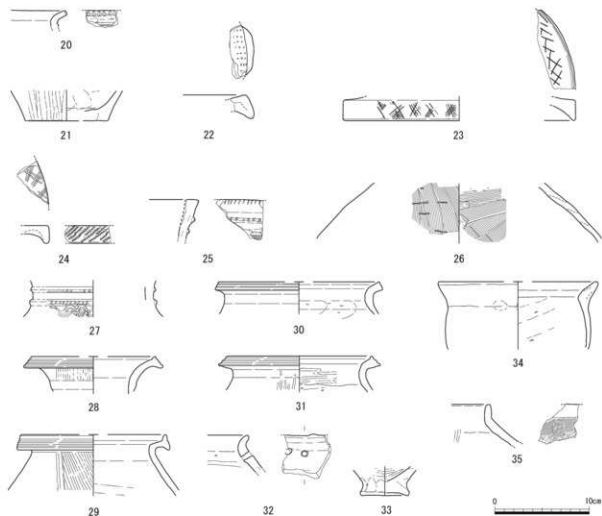
第11図は弥生土器である。甕の口縁20には刻み目、頸部には沈線が施される、前期後半と考えられる。22～28は中期中～後葉の壺である。22～24の口縁部は端部で下方に垂下し、列点文や斜格子文で飾られる。24の口縁端部は櫛状工具をやや押し引いて刻み目が施されている。27は頸部破片で、刻み目が施された2条の貼付突帯と波状文が見られる。29～31は後期前葉の甕で、口縁を屈曲させ、端部を上下に拡張させる。30内面は頸部までヘラケズリが及ぶ。

第12図は古墳時代の土器である。36～38は土師器の高杯、39は須恵器の高杯で、36は杯底部の充填部分である。38の内外面には赤色顔料が残る。40～43は須恵器の杯蓋と杯身で、6世紀後葉～7世紀中葉と考えられる。

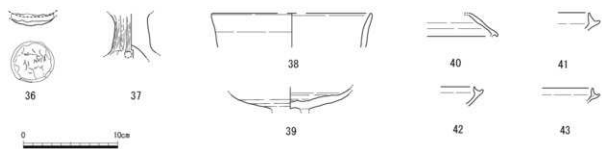
第13・14図は石器である。S4はサヌカイト製の剥片、S5・6は黒曜石製の剥片である。S7はサヌカイト製の調整剥片で楔形石器を指向したものと考えられる。S8・9は石包丁半成品で、表面や周縁部の一部が研磨されている。S10・11は緑色片岩製の石鏃で、使用により破損した可能性が考えられる。S12はスクレイパーで刃部先端が破損している。（西村）



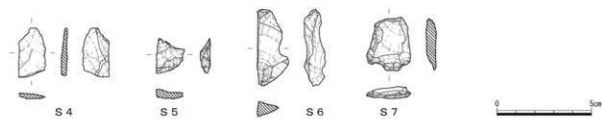
第10図 遺構に伴わない遺物①【縄文時代】(1/4)



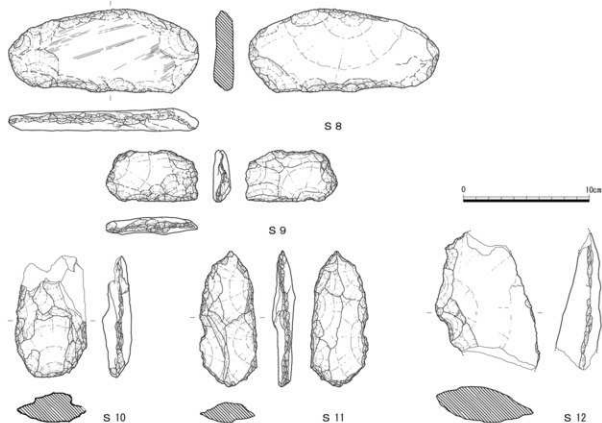
第11図 遺構に伴わない遺物② [弥生時代] (1/4)



第12図 遺構に伴わない遺物③ [古墳時代] (1/4)



第13図 遺構に伴わない遺物④ [石器①] (1/2)



第14図 遺構に伴わない遺物⑤ [石器②] (1/3)

2 古代以降の遺構・遺物

概要

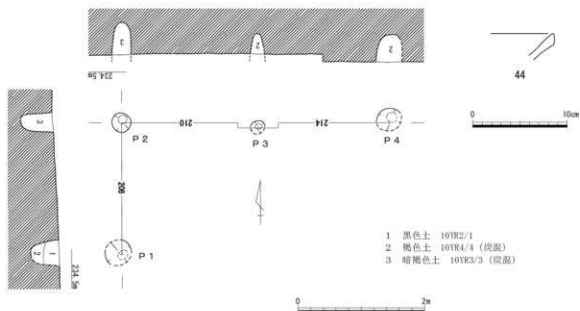
古代以降の遺構には、掘立柱建物1棟、柱穴列1列、土坑19基、炉2基、被熱面1面、炭溜り1基、溝5条、回み1基、鉄分沈着面1面がある。その他ピットが検出されたが、調査区幅の制約上セッ関係は明らかにし得なかった。遺構に伴う遺物は限られるが、包含層から破片状態の土器が多量に出土した。土師器・須恵器の皿、椀、備前焼、輸入陶磁器、瓦質土器の煮炊具、土錘、製鉄関連遺物等が挙げられる。(西村)

掘立柱建物 (第15図、図版4)

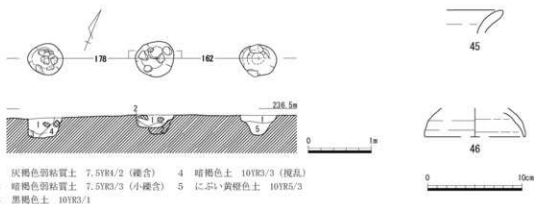
4区4で確認された。1×2間以上の建物であるが、側柱建物か総柱建物なのかは分からなかった。柱間距離は208～214cmである。主軸はN-90°-Eで東西に向く。P1埋土から出土した須恵器44は東播地域特有の捏ね鉢である。出土遺物や検出層位から中世前半の遺構と考える。(西村)

柱穴列 (第16・17図、図版1)

1区1で柱穴列を検出した。3個の柱穴が約1.7mの間隔を空け直線上(N-68°-E方向)に並ぶ。柱穴は直径50～60cmのほぼ円形を呈し、検出面からの深さ約30cmを測る。底面は柱の据わる部分がさらに窪む。埋土中には隙間に詰めたと思われる円礫が残る。この柱穴列は掘立柱建物の一部と考えられるが、調査区が狭いため、全容は不明。鳥取自動車道建設に伴う尾崎遺跡調査時の遺構配置を見ると、建物8・9と建物の主軸方向が近い。P2の埋土に土師器の甕45、須恵器杯蓋46が混入し、柱穴列が8世紀頃の包含層除去後に検出されたことから、時期は7～8世紀と推定される。(物部)



第15図 掘立柱建物 (1/60)



第16図 柱穴列 (1/60)・出土遺物 (1/4)



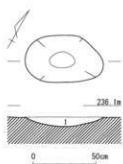
第17図 柱穴列と平成17・18年度調査成果との合成図 (1/400)

土坑1～5（第18～23図、図版2）

土坑1は2区4で検出した。平面形は62×37cmの楕円形で検出面からの深さは7cmを測る。埋土中に糸切り痕跡の残る土師器の細片が認められる。時期は検出層位から古代以降と考えられる。

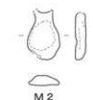
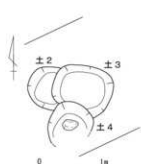
土坑2～4は2区4に位置し、土坑4が土坑3を、土坑3が土坑2を切る。形状や埋土、埋土に黄色土塊を含むことなどが似ており、近い時期に掘削された可能性がある。土坑2の平面形は一辺約70cmの隅丸方形で、検出面からの深さは約30cmを測る。埋土中から少量の須恵器や土師器の細片の他、厚さ7.9mmの鉄片が出土した。土坑3の平面形は93×82cmの隅丸方形で、検出面からの深さは28cmを測り、埋土中に糸切り調整の須恵器碗底部47など須恵器・土師器の細片を少量含む。土坑4の平面形は直径約67cmの不整形形、検出面からの深さは44cm。埋土上部から円礫が出土した。埋土中に糸切り調整の土師器小皿48など須恵器・土師器の細片を少量含む。土坑2～4の時期は埋土中に混入した土器片の特徴や古代包含層を基盤とし中世包含層直下で検出したことから古代～中世と考えられる。

土坑5は2区8北壁で検出された。形状などは不明である。中世包含層第3・4層のうち第4層が基盤となり、第3層と埋土が類似している。第3層からは15世紀後半頃と考えられる備前焼播鉢（第60図201）が出土しているため、土坑5の時期は15世紀後半以降と推定される。（物部）



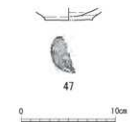
1 暗褐色土 10YR3/2
(炭多含)

第18図 土坑1 (1/30) 第19図 土坑2・3・4 (1/60)



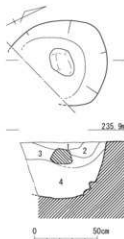
1 灰黄褐色土 10YR4/2
(明黄褐色土塊含)
2 灰黄褐色土 10YR4/2
(黄色土塊含)

第20図 土坑2 (1/30)・出土遺物 (1/3)



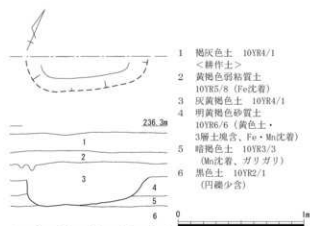
1 にぶい黄褐色土 10YR6/3
2 にぶい黄褐色土 10YR4/3
(黄色土・黒色土塊多含)
3 黒褐色土 10YR3/1
(黄色土塊含)

第21図 土坑3 (1/30)・出土遺物 (1/4)



1 にぶい黄褐色土
10YR4/3 (黄色土塊含)
2 にぶい黄褐色土
10YR4/3
3 灰黄褐色土 10YR4/2
4 暗褐色土 10YR3/3

第22図 土坑4 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第23図 土坑5 (1/30)

土坑8 (第25図、図版3)

3区1の北東隅で検出された。その大半が調査区外にあり、検出面からの深さは34cmで底面は平らである。埋土下半に拳大の礫が少量混じるほか、被熱赤化した焼土塊が混入する。時期は検出層位から中世と考えられる。

(物部)

土坑9 (第26・27図、図版3)

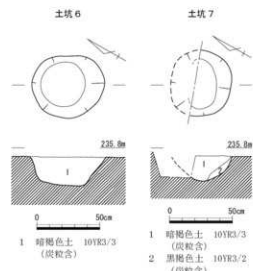
4区1の北東端部で検出された大形の土坑である。およそ350×300cmの楕円形を呈すると推定される。検出面からの深さは約30cmである。土坑北部には30～40cm大の川原石を並べているが面はそろえていない。全体像が不明なためその形状から土坑としたが、溝の端部である可能性は残る。釘M3・4と土器の細片が少量出土したが、時期の分かるものは無かった。埋土の特徴は中世包含層と似ているためこの土坑の時期は中世と考える。

(物部)

土坑10 (第28図)

4区1の南西部に位置する。平面形は82×44cmの不整形で、検出面からの深さは約15cmを測る。埋土中から須恵器小壺49が出土したが、埋土の特徴は中世包含層と似ているためこの土坑の時期は中世と考える。

(物部)



第24図 土坑6・7 (1/30)

土坑6 (第24図)

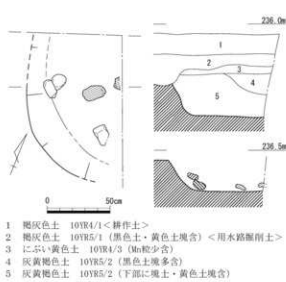
2区8に位置する。平面形は49×58cmの不整形形で、検出面からの深さは約20cmを測る。検出層位や埋土の特徴から土坑5と同様の時期が考えられる。

(物部)

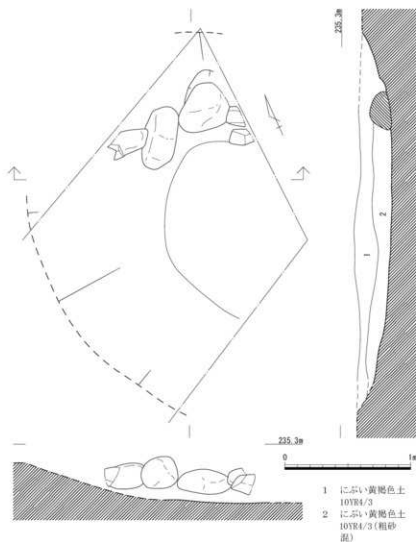
土坑7 (第24図)

2区8、土坑6の北西に位置する。平面形は長軸52cmの楕円形と推定され、検出面からの深さは約20cmを測る。検出層位や埋土の特徴から土坑5と同様の時期が考えられる。

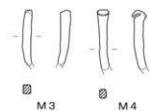
(物部)



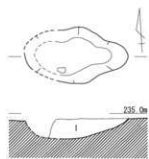
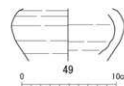
第25図 土坑8 (1/30)



第26図 土坑9 (1/30)



第27図 土坑9出土遺物 (1/3)

1 にぶい黄褐色土 10YR5/4
(黒色基盤土ブロック含)第28図 土坑10 (1/30)・
出土遺物 (1/4)

土坑11～16 (第29～34図、図版4)

土坑11～16は4区2南西端部で集中して検出された。土坑12が土坑11を、土坑14が土坑13を、土坑16が土坑15をそれぞれ切っている。いずれも直径60cm前後の円～不整形形で、底面が段をもって浅く窪むなどの形状や底面上に木炭片層が見られるなど類似している。壁面の一部に被熱赤化が見られるものがあるので、何か火を使う作業を行った痕跡と考えられるが詳細は不明である。また、土坑12と14では埋土中からほぼ完形の土師器小皿1枚が検出されており、土坑の廃棄に伴い簡単な祀りが行われたと考えられる。

土坑11の平面形は直径58cm程度の不整形形で、検出面からの深さは21cmを測る。段をもって浅く窪んだ底面上に薄く木炭片が散っている。北側の壁に被熱赤化が認められる。

土坑12の平面形は62×52cm程度の不整形形で、検出面からの深さは18cmを測る。壁は垂直気味に立ち上がり、底面上に木炭片層がある。土坑中央や北寄りの埋土下半から土師器小皿50が伏せた状態で検出された。底面はヘラ切り後にナデ調整したものとみられる。木炭片の放射性炭素年代測定(AMS)結果は11世紀中頃～13世紀前半の年代を示した。(第4章第2節参照)。

土坑13の平面形は67×58cm程度の不整形形を呈し、検出面からの深さは19cmを測る。南東側の

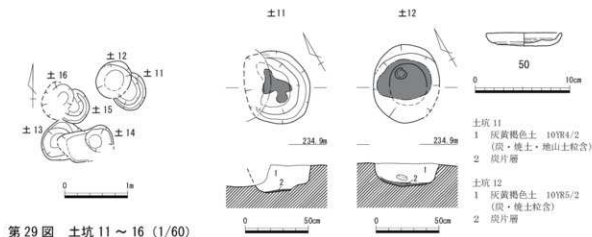
壁面に被熱赤化が認められる。底面は段をもって浅く窪み、底面全体に木炭片の層がある。

土坑 14 の平面形は 87×50 cm 程度の隅丸長方形で、東半部が直径約 40 cm の円形に浅く窪んでいる。検出面からの深さは最大 14 cm を測る。北側の壁の東半部に被熱赤化が認められる。底面の木炭片層は円形の窪みの部分にのみ認められる。土坑の中心やや北寄りの埋土上部から完形の土師器皿 51 が上向きで出土した。内面の調整はナデをまっすぐ外方に抜いて終わり、このような特徴は 13 世紀以降の京都産土師器にみられる(中井淳史 2011『規範』としての京都産土師器『日本中世土器の研究』)。

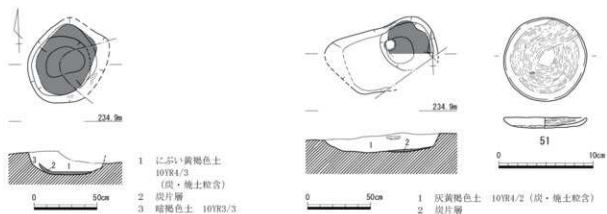
土坑 15 の平面形は直径 52 cm 程度の円形を呈し、検出面からの深さは 15 cm を測る。北側の壁面に被熱赤化が認められる。底面は段をもって浅く窪むが、木炭片の層はみられない。埋土中に糸切り底の土師器杯? 52 が混入していた。

土坑 16 の平面形は直径約 50 cm の円形を呈すと推定され、検出面からの深さは 7 cm を測る。北東側の壁面に被熱赤化が認められる。底面は段をもって浅く窪み、その底面上に木炭片の層がある。埋土中に勝間田焼とみられる甕片 53 が混入していた。

これら土坑群は中世包含層(第5図C層)除去後に検出し、古代包含層(第5図D層)を基盤とする。古代包含層は 8 世紀を中心としていることから、時期は平安時代から鎌倉時代のなかで考えられる。土師器皿 51 の特徴や土坑 12 の年代測定結果からすると 13 世紀頃か。(物部)



第30図 土坑 11・12 (1/30)・出土遺物(1/4)



土坑 17 (第35図、図版4)

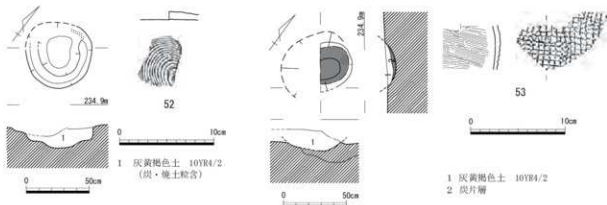
4区3西端で検出された。直径約25cmで不整形形を呈し、検出面からの深さは約16cmである。埋土からは土師器の杯と皿、土錘が出土した。C1～23土錘は6.3～7.7cmと規格の斉一性が比較的高い。土師器皿55は底部がへら切り調整されている。検出層位や埋土の特徴から中世と考えられる。

(西村)

土坑 18 (第36図、図版4)

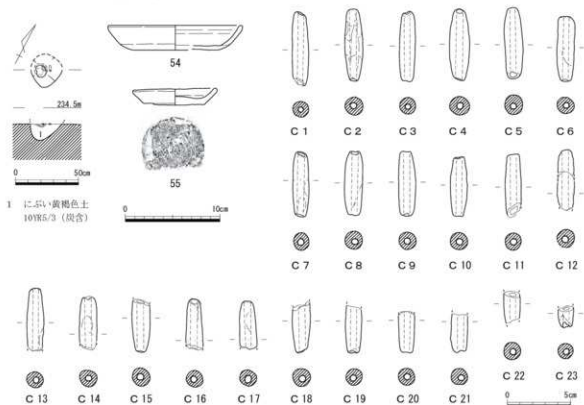
4区4東側で検出された。長径約85cm、短径約6.5cmの不整形形を呈する。立ち上りの傾斜が上部で緩やかになり、埋土もその深さを境として2層に分かれている。土師器小皿56と東播系須恵器の握ね鉢57が出土し、57は第2層直上で出土した。出土須恵器と検出層位から中世前葉と考えられる。

(西村)

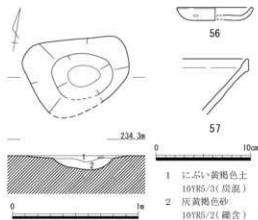


第33図 土坑 15 (1/30)・出土遺物 (1/4)

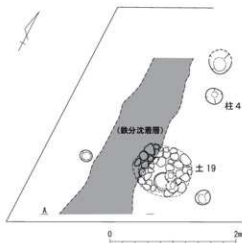
第34図 土坑 16 (1/30)・出土遺物 (1/4)



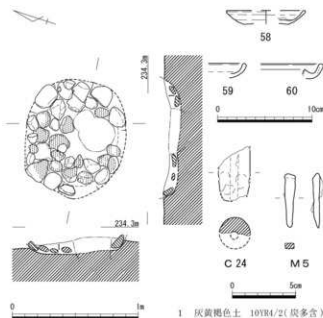
第35図 土坑 17 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3)



第36図 土坑18 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第37図 4区4部分平面図 (1/60)



第38図 土坑19 (1/30)・周辺出土遺物 (1/4・1/3)

土坑19 (第37・38図、巻頭図版1)

土坑19は4区4西端で検出された。長径95cm、短径79cmの楕円形を呈し、検出面からの深さは約13cmである。底部及び壁面に拳大～人頭大の扁平な円礫を敷いており、これらは周辺の後山川河床で採取することができる。石には一部被熱痕が認められ、被熱により割れた破片を敷き直しているものもあることから、土坑の複数回にわたる使用の可能性が考えられる。埋土中には炭化物が一定量含まれ、周辺の検出面上からは須恵器小皿58・59、瓦質土器の鍋60、土錘24、鉄釘M5が出土した。58は破片であるが底部糸切調整とみられる。また底部内面には漆が3mm程の厚みをもって付着している。出土した炭化物の放射性炭素年代測定(AMS)を行い、第4章第2節第74図に示された結果を得た。最も確立の高い最頻値を代表値とすると12世紀後半という年代が得られる。検出層位とも齟齬はない。(西村)

炉1・2 (第39～41図、写真4・5、巻頭図版1、図版2)

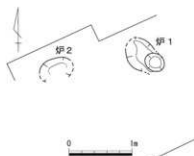
炉1・2は2区2に位置し、炉1の約1.5m西に炉2がある。中世包含層除去後に検出され古代包含層を切り込んでいる。

炉1は直径約30cmの円形で、検出面からの深さ約3cm。内部に炭由来と考えられる黒色土がある。底から側面の西半分は被熱赤化が認められた。この円形の炉の西側に茶色っぽく見える土(第40図第2層)があるが、鉄分や鉄錆が染みこんだものと考えられた。第3層の白色の砂混じり土を取り除くと底面の一部に被熱赤化が認められたことから、第3層部分は、70×45cmの不整楕円形で、検出面からの深さ約4cmを測る、第1層の炉とは別の火を使う作業を行った土坑と考えられる。これが炉であるのか、あるいは第1層の炉の下部構造なのか分からない。第1層から鍛冶滓M7、第3層から椀形鍛冶滓M6と須恵器甕片61が出土した。その他第1・2層から鍛造剥片、第

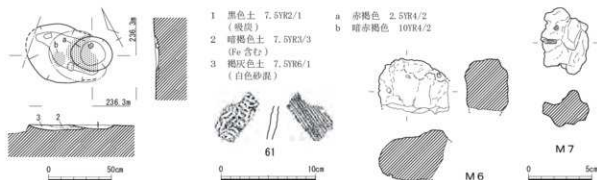
1～3層で粒状滓、砂鉄が検出された。

炉2は2区2の北壁で検出された。側溝掘削によって南半分を失ったが、平面形は長軸56cm程度の楕円形と推定され、深さは16cmで、底面は基盤層に含まれる礫が露出している。東端部以外の底面から側面がよく被熱しており、その一部に硬化が見られることから、羽口の口がこの辺りにあったと想定できる。炉の内部は炭由来の黒色土が充満しており、その中から椀形鍛冶滓M8・9、鍛冶滓M10～14、ガラス質滓M15～19、再結合滓M20・21、半溶解石M22の他に鍛造剥片や粒状滓、砂鉄が検出された（遺物一覧表に記載）。

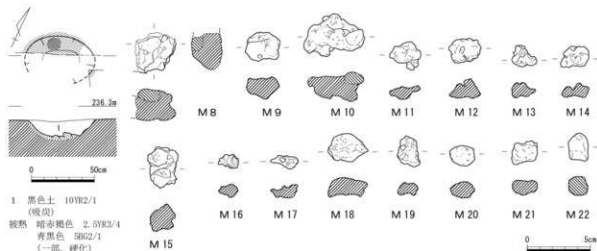
炉1・2を検出した2区2の古代包含層上面の土を水洗・選別した結果、鍛造剥片や粒状滓は見つからなかったが、砂鉄は一定程度を含んでいることが分かったので、土壌自体がもともと砂鉄を含んでいる可能性が高い。これが自然現象なのか、鍛冶あるいは製鉄作業の結果なのか定かではないが、この1～4区の調査区全体にわたって多少の差はあるが古代包含層上面に鉄分・マンガンの固着が見られることは、後世の水田の影響以外に、こうした砂鉄も関係している可能性がある。炉1・2の時期は検出層位などから平安～鎌倉時代と考えられる。炉1・2の炭化材で行った放射性炭素年代は10～11世紀であった。（第4章第2節参照）



第39図 炉1・2 (1/60)



第40図 炉1 (1/30)・出土遺物 (1/4・1/3)



第41図 炉2 (1/30)・出土遺物 (1/3)

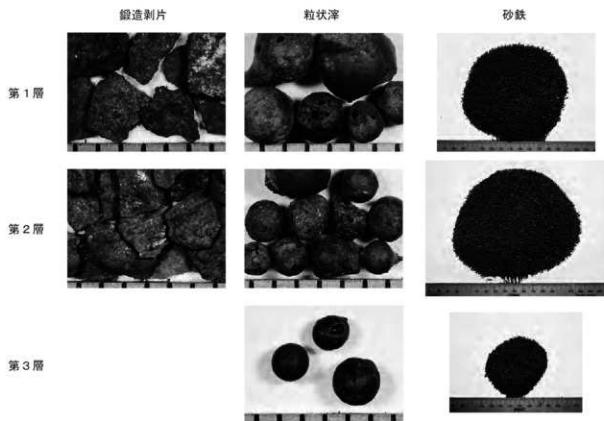


写真4 炉1出土遺物（鍛造剥片・粒状滓・砂鉄）



写真5 炉2出土遺物（鍛造剥片・粒状滓・砂鉄）

被熱面（第42図）

2区1に位置し、古代包含層中で検出された。約45×28cmの範囲に被熱赤化が見られ、その中央が硬化している。被熱面直上の土を調べたが鍛造剥片や粒状滓は確認されなかった。周辺で出土した須恵器蓋62の特徴や検出層位から、その時期は8世紀頃と考えられる。被熱面の下部には焼土粒や炭粒を含む土で埋まった不整形な溝状の窪みが確認されたが、その性格は不明である。（物部）

炭溜り（第43図、図版2）

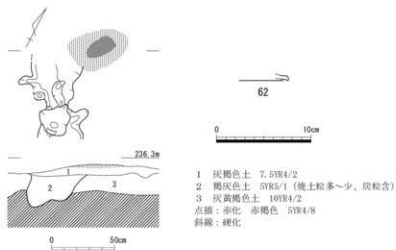
2区3にも炉1・2と同様な炉がないか精査した。約70×50cmの範囲に炭粒の集中が面的にみられた。被熱の痕跡は見られず、形状も不整形である。炭溜りから鍛造剥片・粒状滓は検出されなかった。時期は検出層位から炉1・2と同じ平安～鎌倉時代と考えられる。（物部）

溝2 (第44・45図、図版4)

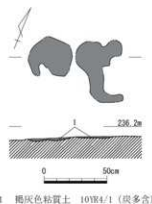
4区2北東部に位置し、溝3に切られている。幅約35cmでN-80°-W方向に直線的に伸びる。検出面からの深さは27cm前後、側面はほぼ垂直に立ち上がる。この溝は調査区断面に確認されないことから、西端部が途切れている。時期は古代包含層に似た暗褐色土で埋まっていることから8世紀頃と推定される。(物部)

溝3・4 (第44・45図、図版4)

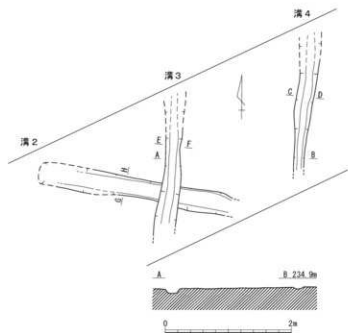
検出面からの深さは27cm前後、側面はほぼ垂直に立ち上がる。この溝は調査区断面に確認されないことから、西端部が途切れている。時期は古代包含層に似た暗褐色土で埋まっていることから8世紀頃と推定される。(物部)



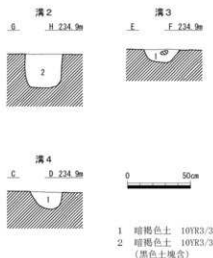
第42図 被熱面 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第43図 炭溜り (1/30)



第44図 4区2部分平面図 (1/60)



第45図 溝2・3・4 (1/30)

溝5・6 (第46・47図)

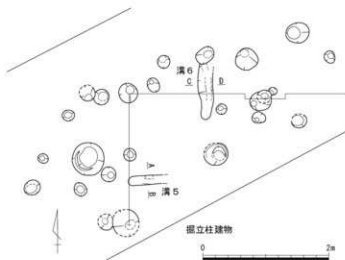
4区4で確認された。溝5は東西方向に、溝6は南北方向に延びる。溝5東端、溝6北端は埋土と基盤層との差が不明瞭で輪郭を明らかにすることができなかった。掘立柱建物の軸に直交するが、相関性は不明である。溝6の深さは最深部で約21cmと溝5よりも深い。両遺構とも検出層位や埋土の特徴から中世と考えられる。(西村)

窪み (第48・49図、図版4)

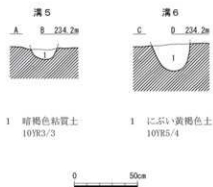
4区3に位置し、平面的には粗砂の広がりとして認識され、断面土層を検討した結果、幅約3m、長さ12m以上、深さ約50cmの東西に長い窪みと推定される。埋土は粗砂と細砂が互層になっており、粗砂層が3層認められることから、少なくとも3回の流水があつて徐々に埋没したと考えられる。断面図の第7層細砂中に円礫がまばらに散らばり、それに土師器小皿71・72が混じっていた。これらが人為的に投げ込まれた可能性もあるが定かではない。埋土中から他に須恵器碗63、土師器皿68～70、73～76、土師質の鍋77・78、瓦質の鍋81と羽釜82、土錘C25、鉄釘M23などがあり、瓦質土器の特徴から、窪みの時期はおよそ13世紀と考えられる。この窪みは底面に起伏があることから人為的に掘削されたというよりも水の流れによる洗掘の可能性が高いように思われる。その場合、洗掘の原因となる東西方向の土手や段、溝のようなものが窪みに接して、または窪みの位置に存在していたのかもしれない。(物部)

鉄分沈着面 (第50図)

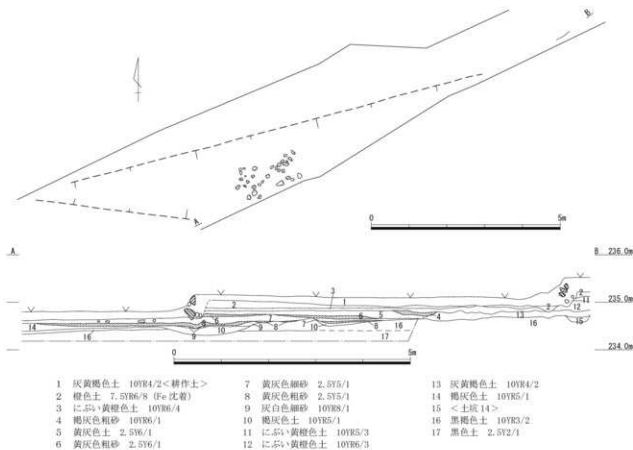
4区4西側で確認された。第50図第5層上面から鉄分及びマンガン質が著しく浸透しており、やや硬質である。南北方向に帯状に広がっており、幅60～100cm、長さ270cm以上で南北端は調査区外に続く。図示した範囲から出土した土師質土器の小皿83はやや粗製で大きめの砂粒を含む。遺構として掘り込まれたような痕跡は確認できないが、かつてこれより上層にあった遺構等からの二次的な作用によるものと考えられ、中世以降か。(西村)



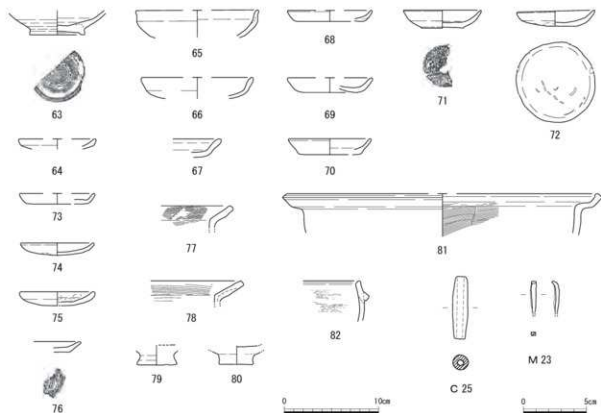
第46図 4区4部分平面図 (1/60)



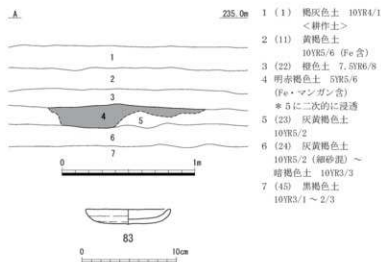
第47図 溝5・6 (1/30)



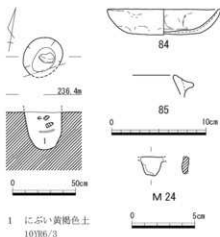
第48図 窪み (1/100・1/80)



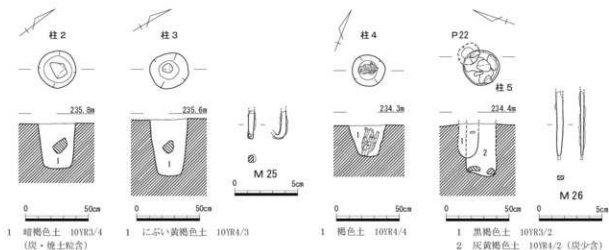
第49図 窪み出土遺物 (1/4・1/3)



第50図 鉄分沈着面(1/30)・出土遺物(1/4)



第51図 柱穴1(1/30)・
出土遺物(1/4・1/3)



第52図 柱穴2~5(1/30)・出土遺物(1/3)

柱穴1~5(第51・52図)

ここでは特徴のある柱穴を説明する。柱穴1は2区1に位置する。柱を抜いた穴に破片の土師器皿84や小石を投入したものと考えられる。土師器皿は内外に指オサエが見られ、内面の表面に薄く粘土を貼り付けている。瓦質土器羽釜85や鉄片M24が混入していた。土器の特徴から12世紀を中心とする時期が推定される。

2区8で検出された柱穴2・3は、柱を抜いた穴に石を入れて埋

めたと考えられるものである。時期は検出層位から中世である。

柱穴4は4区4西側で検出された。径約26cmの円形で、検出面からの深さは約25cmである。柱材が一部残存しており、直径約10~15cmである。本木材で放射性炭素年代測定(AMS)を行い、15世紀前葉という年代が得られた。検出レベルも同地区内では比較的高位であった。

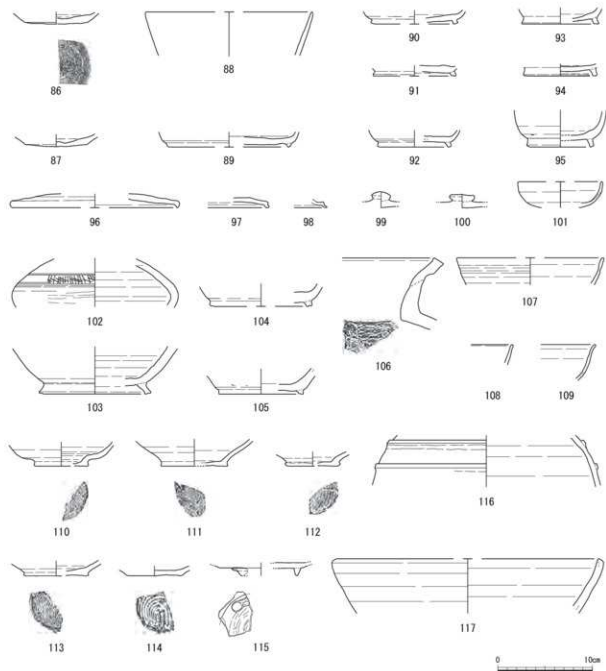
柱穴5は4区4西側で検出された。P22と共に土坑19を切っている。土坑19底面には扁平な円礫が3点敷かれている。被熱痕がある点や石の様子から土坑19の石を二次的に使用している可能性が高い。(物部・西村)

遺構に伴わない遺物[1区~2区4](第53~57図)

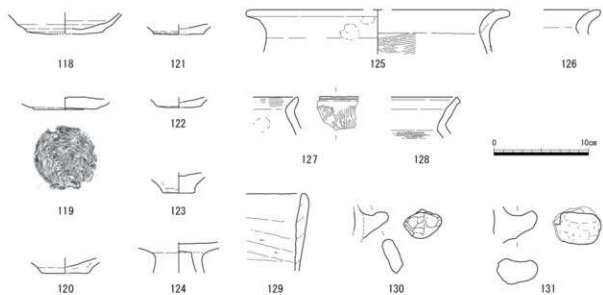
長い調査区のため、1~4区をおよそ3等分し、その地

区ごとに出土遺物を概観したい。まず、調査区の東部にあたる1区～2区4の地区からは須恵器（第53図）、土師器（第54図）、陶磁器ほか（第55図）、鉄製品・鉄滓（第56・57図）などが出土した。その中でも鉄滓の出土量が相対的に多く、全体188点の内159点（約85%）がこの地区の古代包含層から現代水田耕作土までの土層に混入した状態で出土した（一覧表参照）。金属学的分析（第4章第1節参照）の結果、大半が鍛錬および精錬鍛冶滓と推定できる。極僅かに製錬滓状の特徴をもつものもあるが、詳細は不明である。鍛冶が行われた時期については、鍛冶炉の可能性のある炉1・2と同じ平安～鎌倉時代と考えられる。ただ、炉の基盤である古代包含層に比定している茶褐色土層（第5図D層）からも僅かに出土していることから、それ以前にも鍛冶が行われていた可能性がある。

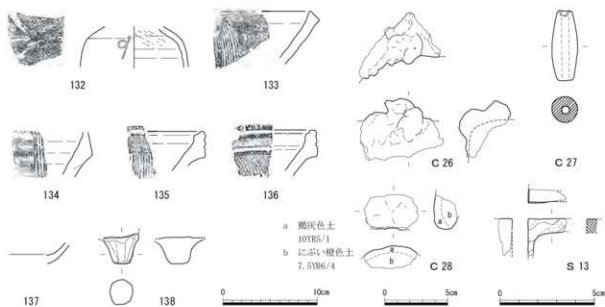
(物部)



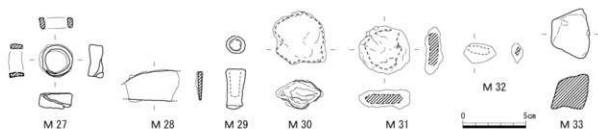
第53図 遺構に伴わない遺物⑥ [1区～2区4] (1/4)



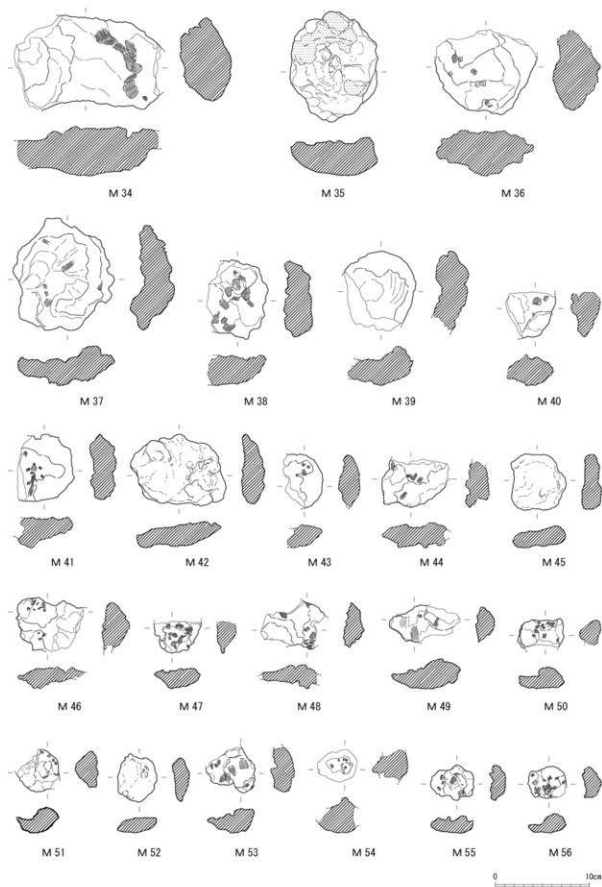
第54図 遺構に伴わない遺物⑦ [1区~2区4] (1/4)



第55図 遺構に伴わない遺物⑧ [1区~2区4] (1/4・1/3・1/2)



第56図 遺構に伴わない遺物⑨ [1区~2区4] (1/3)



第57図 遺構に伴わない遺物⑩ [1区～2区4] (1/4)

遺構に伴わない遺物〔2区-5~3区〕(第58~61図)

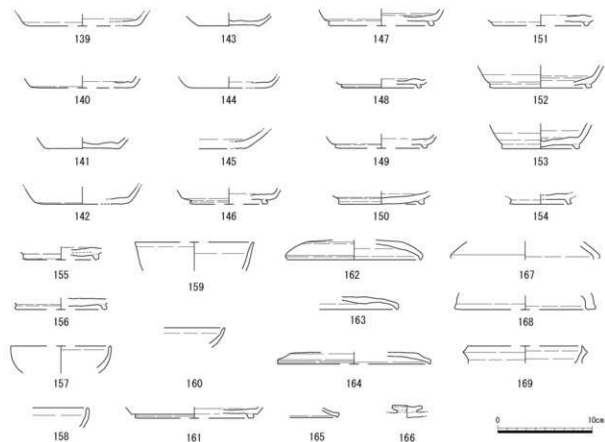
第58図の139~159は須恵器の杯である。無高台の139~145は8~10世紀前葉、有高台の146~156は8世紀中葉~9世紀のものである。157・158は口縁にかけて内湾する小形の杯であり、7世紀後葉~8世紀前葉と考えられる。159は口縁が外反する杯で、8世紀中葉である。160・161は皿であり、前者は7世紀末~8世紀前葉、後者は9世紀前葉まで下る可能性がある。162~166は須恵器の杯蓋であり、概ね7世紀末~8世紀のものである。167は須恵器の長頸壺の肩部で、外面に軸葉がかかる、8世紀代。168は須恵器の壺に伴う蓋の可能性があり、11~12世紀代か。169は器種不明であるが、須恵器の甕の口縁か。

第59図170~182は土師質土器、183~194は須恵質土器である。171は黒色土器の杯で、9世紀前半。174~176は杯で底部糸切調整が確認できる。175・176は器形から12世紀後半から13世紀か。177は甕で表面には煤が多く付着している。このような鉄かぶと形で表面にタタキ目を残す鍋は、播磨地域や大阪湾沿岸域で認められる、15世紀中葉。183~192は碗で、9~11世紀代である。183・188は播磨地域で生産されたものと考えられる。194は13世紀前半に東播磨地域で生産された捏ね鉢である。

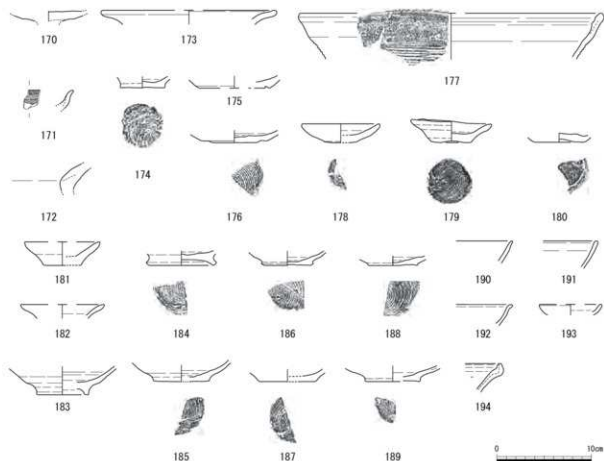
第60図の195~203は備前焼で、195の壺以外は播鉢である。195~201は14世紀後半~15世紀のものと考えられる。204は龍泉窯系青磁の碗である。206・207は瓦質土器で、それぞれ13世紀の鍋と14世紀後半の羽釜である。C 29・30は管状の土錘である。

第61図M 57は鉄鍋である。M 59・60は碗形鍛治滓である。

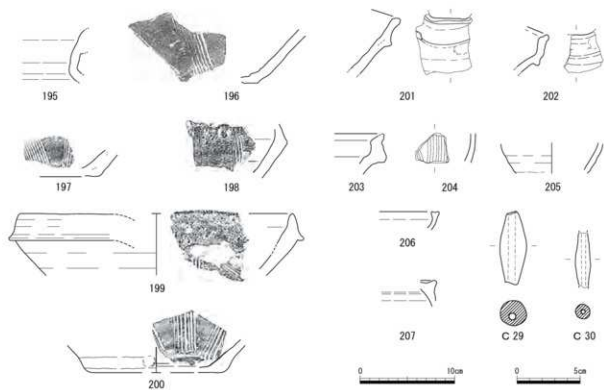
(西村)



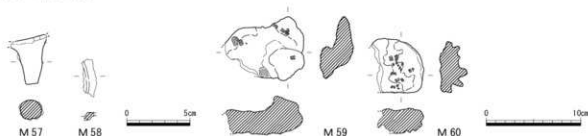
第58図 遺構に伴わない遺物①〔2区5~3区〕(1/4)



第59図 遺構に伴わない遺物⑩ [2区5~3区] (1/4)



第60図 遺構に伴わない遺物⑪ [2区5~3区] (1/4・1/3)



第61図 遺構に伴わない遺物④ [2区5～3区] (1/4・1/3)

遺構に伴わない遺物 [4区・立会調査区] (第62～72図)

第62図は須恵器である。208～215は杯で、概ね8世紀中葉～10世紀初頭のものがある。216～218は杯蓋で、7世紀後葉～8世紀前葉に属する。219は直口壺で7世紀中葉、220～222は壺で12世紀頃のもの为主である。227の甕は胎土の特徴から播磨地域で生産された可能性が考えられる。

第63・64図と第65図の290～298は土師器である。229～232は杯で、232は口縁が外反する。233～279は皿であり、いずれもC層以上から出土した。235は内面のナデ調整が器壁を一周した後斜めに抜ける、12～14世紀前半か。皿の中でも多く比率を占めるのは236～279のような小形の皿である。底部の最終調整が糸切り、ヘラ切り、ナデによるものの各種が存在するが、割合としてはナデによるものが多い。262は口縁に油煙が付着しており、灯明皿としての使用が推定される。281は甕、282～285は鍋である。鍋は胴部破片で外面にタタキ目を残し、煤が全体に付着している。これら一群は播磨や大阪湾沿岸域での出土が認められており、13世紀末～15世紀前半に属する。290～295は焼塩土器である。いずれも内面に布目は認められず、深鉢形になると考えられる。293は他より小形である。296は甕、297は甕や鍋の把手と考えられる。

第65図299～330と第66図は平安時代後期以降を中心とした須恵器で、299～320は碗である。300は底部糸切調整の後に輪高台を取り付けており、11世紀頃に播磨地域で製作されたと考えられる。301・304・313は見込み部が稜線を伴って深く落ち込み、同様に播磨地域での製作が推定される。その他は11世紀～13世紀まで幅広い年代のものがある。321～330は鉢で、口縁部の形態から東播磨地域に特有の捏ね鉢であることがわかる。12世紀頃、13世紀以降のものがある。第66図は小皿である。底部の最終調整は糸切りとヘラ切りによるもの両者が存在する。

第67図の345～349は備前焼である。347～349は播鉢で、14世紀中頃～15世紀前葉と考えられる。350～362は輸入陶磁器である。350～352は同安窯系青磁の碗と皿で、12世紀中葉～後葉と考えられる。354は青磁の碗で外面に鎬蓮弁文が施される。12～13世紀中頃か。355も青磁の碗で14世紀頃と考えられる。358・359は青白磁の合子である。360・361は白磁の碗で、12世紀頃か。362は白磁の皿で、内面に草花文の凹印刻が施される。14世紀頃と考えられる。363は16世紀の青花か。365～369は瓦質土器の羽釜で、12世紀～13世紀頃と考えられる。

第68図の370～381は瓦質土器の鍋で、13世紀頃のもの为主である。382・383は平瓦で、上・下面にそれぞれ布目とタタキ目が残る。W1は漆膜で、形状から割った竹の節の内面に付着していたことが分かる。竹製容器の内面に塗布されたものの可能性が高く、広島県福山市草戸千軒町遺跡出土資料が類似している。

第69図のC31～52は土錘である。S14～16は形状と色調から基石として使用された可能性がある。S17・18は火打石としての使用が考えられ、前者が瑪瑙製、後者が石英製である。

第70図は鉄製品である。M 61～78は釘で、79は楔である。M 80・81は鍋の胴部で铸造されている。M 83は締め金具で、断面形状が楕円形の長柄に取り付けられていたことが推定される。

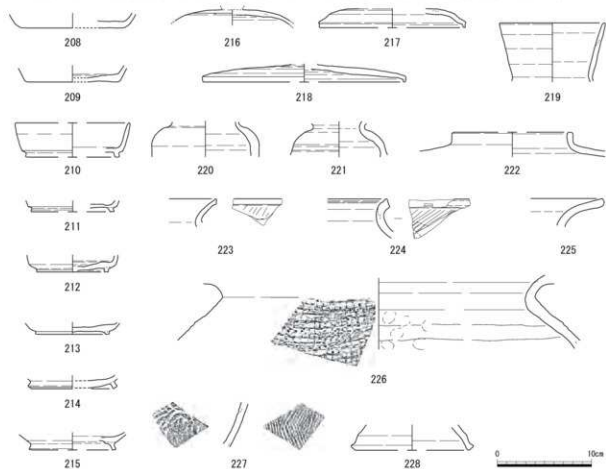
第71図は鉄滓で、M 89～91は楕円形鍛冶滓。その他は製錬滓と考えられる。

第72図は工事立会調査範囲（第3図）で出土した。384は播磨地域に特有の須恵器の突帯碗、11世紀頃と考えられる。385は青磁の稜花皿で14世紀頃、386は瓦質土器の羽釜で13世紀頃か。（西村）

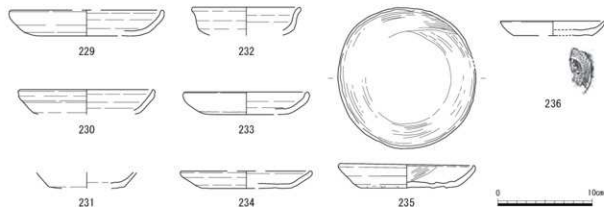
註

(1) 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1978・1981 『草戸千軒町遺跡—第24～26・30次発掘調査概要—』

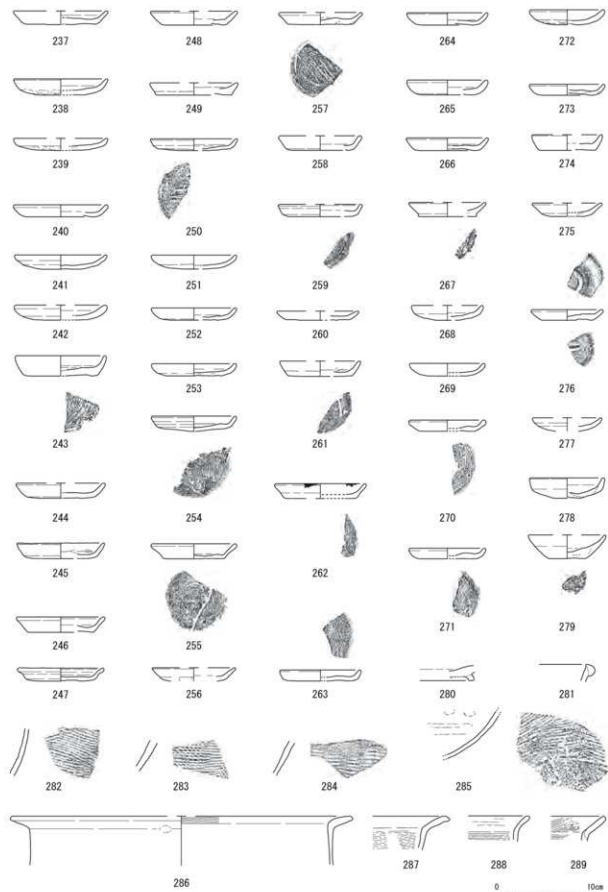
(2) 鉄滓の鑑定には県文化財課の上格武氏に、備前徳の鑑定には県立博物館の重根弘氏に有益な御教示を賜った。



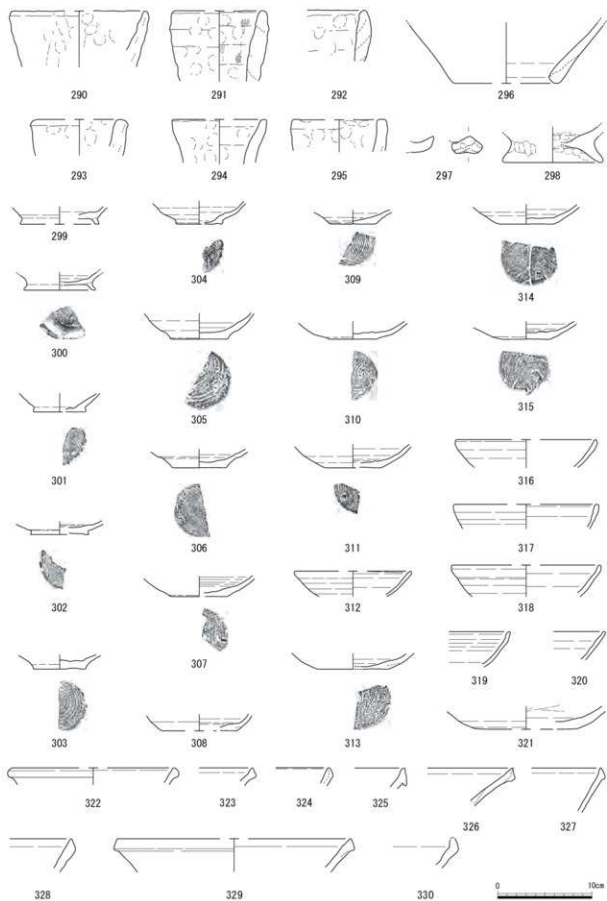
第62図 遺構に伴わない遺物⑮ [4区] (1/4)



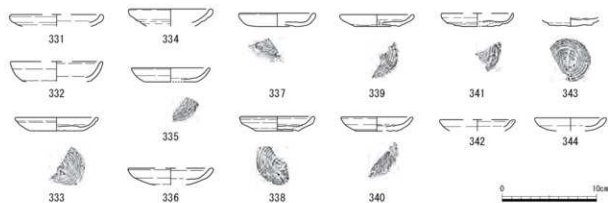
第63図 遺構に伴わない遺物⑯ [4区] (1/4)



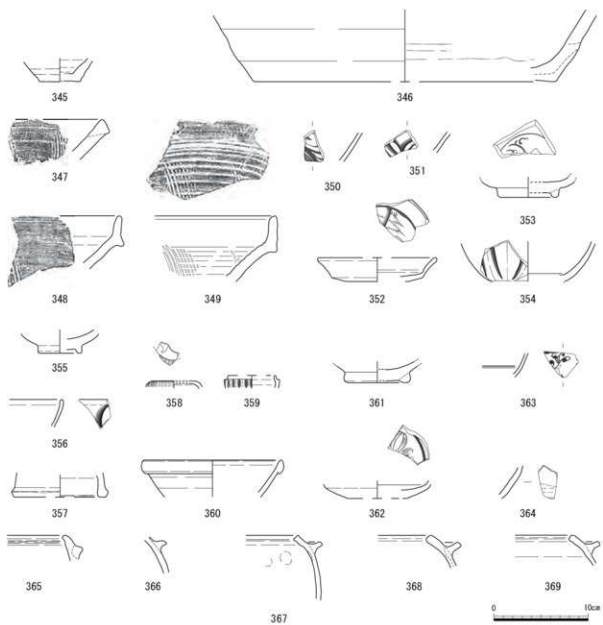
第64図 遺構に伴わない遺物① [4区] (1/4)



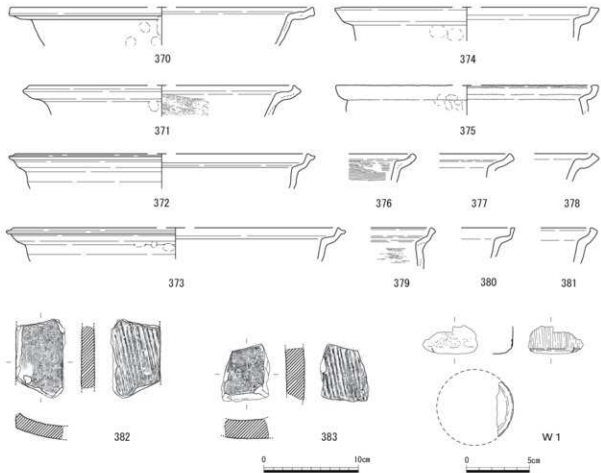
第65図 遺構に伴わない遺物⑩ [4区] (1/4)



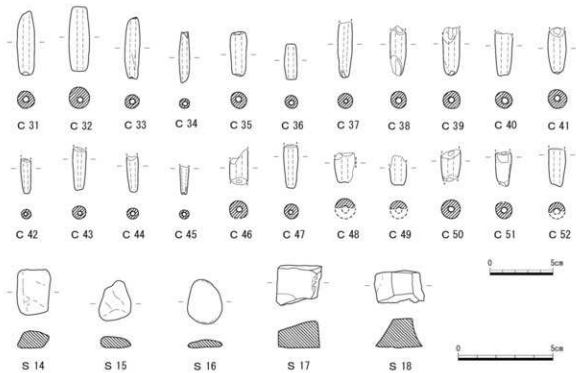
第 66 図 遺構に伴わない遺物⑱ [4区] (1/4)



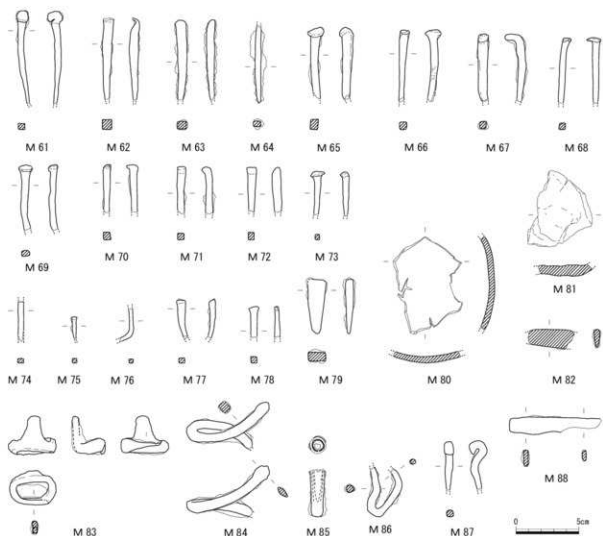
第 67 図 遺構に伴わない遺物⑳ [4区] (1/4)



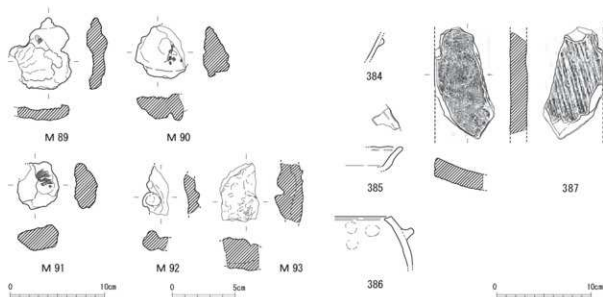
第68図 遺構に伴わない遺物② [4区] (1/4・1/3)



第69図 遺構に伴わない遺物③ [4区] (1/3・1/2)



第70図 遺構に伴わない遺物㉔ [4区] (1/3)



第71図 遺構に伴わない遺物㉔ [4区]
(1/4・1/3)

第72図 遺構に伴わない遺物㉔
[立会調査範囲] (1/4)

第4章 自然科学的分析

第1節 尾崎遺跡出土鍛冶関連遺物の調査

日鉄テクノロジー株式会社 九州事務所

鈴木 瑞穂

1 調査対象

尾崎遺跡は岡山県美作市に所在する。発掘調査地区からは古代以降の鍛冶炉跡が検出された。これに伴い鉄滓等の鍛冶関連遺物も出土している。そこで、遺跡内での鉄器生産の実態を検討するため、表2の鍛冶関連遺物5点を調査した。

2 調査方法

(1) 外視観察

調査前の観察所見を記載した。

(2) マクロ組織

調査する位置から試料を採取した後、その断面をエメリー研磨紙の#150、#320、#600、#1000、およびダイヤモンド粒子の3 μ mと1 μ mで順を追って研磨して、全体像を撮影した。

(3) 顕微鏡組織

光学顕微鏡を用いて断面観察後、代表的・特徴的な視野を撮影した。また金属鉄部の組織観察には、腐食に3%ナイトル（硝酸アルコール液）を用いた。

(4) EPMA調査

EPMA（日本電子製機 JXA-8230）を用い、鉄滓や鉄中非金属介在物の組成を調査した。測定条件は以下の通りである。加速電圧：15kV、照射電流（分析電流）：2.00E-8A。

(5) 化学組成分析

測定方法は以下の通りである。

全鉄分（Total Fe）、金属鉄（Metallic Fe）、酸化第一鉄（FeO）：容量法。

炭素（C）：燃焼容量法、硫黄（S）：燃焼赤外吸収法。

二酸化硅素（SiO₂）、酸化アルミニウム（Al₂O₃）、酸化カルシウム（CaO）、酸化マグネシウム（MgO）、酸化カリウム（K₂O）、酸化ナトリウム（Na₂O）、酸化マンガン（MnO）、二酸化チタン（TiO₂）、酸化クロム（Cr₂O₃）、五酸化燐（P₂O₅）、バナジウム（V）、二酸化ジルコニウム（ZrO₂）、銅（Cu）：ICP（Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer）：誘導結合プラズマ発光分光分析法。

3 調査結果

OSK-1：ガラス質滓

(1) 外観観察：ごく小形で不定形の黒色ガラス質滓(10.3g)である。滓中には熱影響を受けた石英・長石類などの砂粒が混在する。羽口などの粘土溶融物と推測される。また表層に茶褐色の錆鉄がごく少量付着する。金属探知器反応はなく、着磁性もほとんどない。全体に軽い質感の滓である。

(2) 顕微鏡組織：写真6①～③に示す。①の明灰色部はガラス質滓で、②はその拡大である。ガラス滓中の微小白白色粒は金属鉄である。ほとんど炭素を含まないフェライト(Ferrite: α 鉄)と推定される。また①の暗灰色は被熱した粘土部分で、③はその拡大である。

(3) ピッカース断面硬度：写真6②の微小金属鉄粒の硬度を測定した。硬度値は121Hvであった。フェライトとしてはやや硬質である。金属鉄粒が非常に小さく、周囲のガラス質滓の影響を受けた可能性が考えられる。

(4) 化学組成分析：表3に示す。全鉄分(Total Fe)の割合は5.54%と低い。このうち金属鉄(Metallic Fe)は0.21%、酸化第1鉄(FeO)が1.89%、酸化第2鉄(Fe₂O₃)5.52%であった。造滓成分(SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O)の割合は90.22%と高いが、このうち塩基性成分(CaO+MgO)2.60%と低値であった。また二酸化チタン(TiO₂)は0.66%、バナジウム(V)が<0.01%、酸化マンガン(MnO)0.09%と低値であった。銅(Cu)も<0.01%と低値である。

当試料は珪長質成分(SiO₂, Al₂O₃)主体で、羽口先端などの粘土溶融物と推定される。滓中には複数の微小金属鉄粒が確認された。鉄素材の加熱・加工時の反応副生物と判断される。

OSK-2：椀形鍛冶滓

(1) 外観観察：やや小形の椀形鍛冶滓(51.7g)と推測される。上下面とも細かい木炭痕による凹凸が著しい。表層に広い範囲で黄褐色の土砂や茶褐色の錆鉄が付着するが、金属探知器反応はなくまとまった鉄部はみられない。滓の地の色調は暗灰色で着磁性がある。表面の気孔は少なく緻密で、重量感のある滓である。

(2) 顕微鏡組織：写真6④～⑥に示す。滓中には、発達した白色粒状結晶ウスタイト(Wustite: FeO)、淡灰色柱状結晶ファヤライト(Fayalite: 2FeO·SiO₂)が晶出する。またウスタイト粒内に多数点在する微小淡茶褐色結晶は、ウルボスピネル(Ulvöspinel: 2FeO·TiO₂)またはマグネタイト(Magnetite: FeO·Fe₂O₃)との中間組成のチタン磁鉄鉱(Tiniano-magnetite)と推測される。さらにヘルシナイト(Hercynite: FeO·Al₂O₃)成分を含む固溶体の可能性も考えられる。いずれにしても、製鉄原料の砂鉄(含チタン鉄鉱(註1))に由来の化合物と推定される。

(3) ピッカース断面硬度：写真6⑥の白色粒状結晶の硬度を測定した。硬度値は443、454、455Hvであった。ウスタイトの文献硬度値(註2)(約450～500Hv)と近似する値であった。結晶の形状や色調等からもウスタイトと推測される。

(4) 化学組成分析：表3に示す。全鉄分(Total Fe)の割合は63.15%と高値であった。このうち金属鉄(Metallic Fe)は0.10%、酸化第1鉄(FeO)が52.77%、酸化第2鉄(Fe₂O₃)31.50%であった。造滓成分(SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O)の割合は8.87%と低く、このうち塩基性成分(CaO+MgO)も1.89%と低値である。製鉄原料の砂鉄(含チタン鉄鉱)起源の二酸化チタン(TiO₂)は1.14%、バナジウム(V)が0.15%、酸化マンガン(MnO)は0.23%であった。また銅(Cu)は<0.01%と低値である。

当試料は砂鉄製錬時の不純物の影響が残ることから、精錬鍛冶滓に分類される。滓中には製鉄原料の砂鉄に由来する、鉄チタン酸化物が確認された。

OSK-3：未製品（鍛造）

(1) 外観観察：やや小形で厚板状の未製品（84.0g）と推測される。表層は黄褐色の土砂で覆われており、本来の遺物外観の観察は困難な状態であった。全体に強い金属探知器反応がみられ重量感があることから、内部には金属鉄が良好に残存すると考えられる。

(2) マクロ組織：写真7①に示す。内部の明白色～明褐色部は金属鉄である。内部には鍛打によって細長く伸ばした非金属介在物が層状に分布する。熱間で鍛打加工された遺物と判断される。その一方で、下面表層には暗灰色の鉄滓が付着している。これらの特徴から、当試料は荒く鍛打加工された未製品（鉄素材またはその切片）と推定される。

(3) 顕微鏡組織：写真7②③に示す。ともに金属鉄部の拡大である。②の下側や③の上側のように、鍛錬時に折り返された箇所は脱炭して炭素量がやや低くなっている。特に②の下側は白色針状のフェライトの割合が高い組織となっている。一方その内側は、ほぼ全面パーライト（Pearlite）組織であった。この金属組織から、炭素量は0.4～0.8%程度と推測される。

(4) ピッカース断面硬度：写真7②③の金属鉄部の硬度を測定した。②のやや低炭素域の硬度値は129～166Hvであった。③の高炭素域の硬度値は193～313Hvであった。炭素量の高い箇所ほど硬質で、組織に見合った値といえる。

(5) EPMA調査：写真7④に鉄中非金属介在物の反射電子像（COMP）を示す。微小淡褐色結晶は、特性X線像ではチタン（Ti）に強い反応がある。定量分析値は11.2% FeO - 66.2% TiO₂ - 6.6% MgO - 4.8% Al₂O₃ - 2.4% V₂O₅ - 1.8% ZrO₂（分析点1）であった。チタニア（TiO₂）主体の化合物で、砂鉄を高温製錬した時の反応副生物と推定される（註3）。また素地の暗灰色部の定量分析値は55.4% SiO₂ - 14.3% Al₂O₃ - 8.7% CaO - 4.6% MgO - 2.2% K₂O - 3.3% FeO - 7.0% TiO₂ - 1.1% ZrO₂（分析点2）であった。非晶質珪酸塩である。

さらにもう1箇所、下面表層付着滓の組成を調査した。写真7⑤に反射電子像（COMP）を示す。淡茶褐色多角形結晶は特性X線像では鉄（Fe）、チタン（Ti）に強い反応がある。定量分析値は56.2% FeO - 23.2% TiO₂ - 7.9% V₂O₅ - 7.1% Al₂O₃ - 1.7% Cr₂O₃ - 1.1% MgO（分析点3）であった。ウルボスピネル（Ulvöspinel：2FeO・TiO₂）に近い組成で、酸化バナジウム（V₂O₅）なども含有する。淡灰色結晶の定量分析値は58.1% FeO - 2.7% MgO - 1.6% CaO - 28.7% SiO₂（分析点4）であった。ファヤライト（Fayalite：2FeO・SiO₂）で、マグネシア（MgO）、ライム（CaO）を少量固溶する。素地の暗灰色部の定量分析値は40.2% SiO₂ - 15.3% Al₂O₃ - 9.8% CaO - 4.1% K₂O - 22.6% FeO - 1.2% TiO₂（分析点5）であった。非晶質珪酸塩である。

当試料は厚板状に粗く鍛打加工された未製品（鋼）と推定される。炭素量は部位によりややばらつきがある。折り返し鍛錬に伴い部分的に脱炭したと考えられる。また鉄中非金属介在物や付着滓中には鉄チタン酸化物が確認された。この特徴から砂鉄（含チタン鉄鉱）が始発原料であったことが明らかとなった。

OSK-4：椀形鍛冶滓（破片）

(1) 外観観察：小形でやや厚手の椀形鍛冶滓中央部の破片（63.4g）と推定される。色調は暗灰色で着磁性はごく弱い。側面は全面破面で、細かい気孔が散在するが緻密で重量感が滓である。

(2) 顕微鏡組織：写真8①～③に示す。淡茶褐色多角形結晶はウルボスピネル、またはマグネタイ

トとの中間組成のチタン磁鉄鉱と推測される。ヘルシナイト成分を含む固溶体の可能性も考えられる。さらに滓中には白色樹枝状結晶ウスタイト、淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。砂鉄を始発原料とする精錬鍛冶滓の晶癖といえる。

(3) ピッカース断面硬度：写真8②の白色樹枝状結晶の硬度を測定した。硬度値は448、472Hvであった。ウスタイトと推定される。さらに淡灰色柱状結晶の硬度値は661、691Hvであった。ファヤライトの文献硬度値（約600～700Hv）の範囲内で、ファヤライトと推定される。

(4) 化学組成分析：表2に示す。全鉄分(Total Fe)56.66%に対して、金属鉄(Metallic Fe)は0.51%、酸化第1鉄(FeO)が55.97%、酸化第2鉄(Fe₂O₃)18.08%の割合であった。造滓成分(SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O)は22.89%で、このうち塩基性成分(CaO+MgO)は2.43%であった。製鉄原料の砂鉄(含チタン鉄鉱)起源の二酸化チタン(TiO₂)は2.45%、バナジウム(V)が0.17%とやや高めであった。酸化マンガン(MnO)も0.27%とやや高めである。銅(Cu)は<0.01%と低値であった。

当試料は椀形鍛冶滓(OSK-2)と同様、砂鉄製錬時の不純物の影響が残ることから、精錬鍛冶滓に分類される。

OSK-5：椀形鍛冶滓

(1) 外観観察：大形で厚手の椀形鍛冶滓(622.8g)である。表層には黄褐色の土砂や茶褐色の錆化鉄が付着するが、金属探知器反応はなくまとまった鉄部はみられない。滓の地の色調は暗灰色で着磁性がある。上面には10mm前後の木炭痕が多数散在する。下面はきれいな椀状で、細かい気孔が少量点在する。緻密で重量感のある滓である。

(2) 顕微鏡組織：写真8④～⑥に示す。滓中には白色樹枝状結晶ウスタイト、淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。鉄チタン酸化物は確認されず、鍛錬鍛冶滓の晶癖といえる。

(3) ピッカース断面硬度：写真8⑤の白色樹枝状の硬度を測定した。硬度値は451、492Hvであった。ウスタイトの文献硬度値の範囲内で、ウスタイトと推定される。また淡灰色柱状結晶の硬度値は621、681Hvであった。ファヤライトの文献硬度値の範囲内で、ファヤライトと推定される。

(4) 化学組成分析：表2に示す。全鉄分(Total Fe)49.79%に対して、金属鉄(Metallic Fe)は0.10%、酸化第1鉄(FeO)が26.12%、酸化第2鉄(Fe₂O₃)42.02%の割合であった。造滓成分(SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O)の割合は24.51%で、このうち塩基性成分(CaO+MgO)1.17%と低値である。製鉄原料の砂鉄(含チタン鉄鉱)起源の二酸化チタン(TiO₂)は0.70%、バナジウム(V)0.04%と低値であった。また酸化マンガン(MnO)は0.14%、銅(Cu)も<0.01%と低値である。

当試料は鍛錬鍛冶滓と推定される。主に鉄酸化物と粘土溶融物(SiO₂、Al₂O₃主成分)からなり、製鉄原料の砂鉄(含チタン鉄鉱)起源の鉄チタン酸化物はみられなかった。

4 まとめ

尾崎遺跡から出土した鍛冶関連遺物を調査した結果、砂鉄(含チタン鉄鉱)を製錬してつくられた鉄が鍛冶原料であったことが明らかとなった。また遺跡内では、精錬鍛冶～鍛錬鍛冶作業が連続して行われたと推定される。詳細は以下の通りである。

(1) 未製品 (OSK-3) は、厚板状に粗く鍛打加工された鋼と推定される。折り返し鍛錬に伴い部分的に脱炭しており、炭素量は0.4～0.8%程度のばらつきがある。折り返し鍛錬が進むと全体の炭素量はさらに下がると考えられる。しかし製品の段階で、刃部先端の炭素量が0.6%前後あれば、水冷(焼入れ)によって著しい硬さが得られる。当試料は鍛造鉄器の刃部先端の製作に適した「刃金」材料といえる。

また鉄中非金属介在物や付着滓中には鉄チタン酸化物が確認された。この結果から始発原料が砂鉄(含チタン鉄鉱)であったことが明らかとなった。

(2) 梶形鍛冶滓2点(OSK-2, 4)は精錬鍛冶滓に分類される。砂鉄(含チタン鉄鉱)に由来する、チタニア(TiO_2)は2.45%、1.14%であった。精錬鍛冶滓としては、チタニアの含有割合は高くはないが、始発原料の砂鉄(含チタン鉄鉱)起原の不純物が残る滓であった。遺跡内で鍛打加工前の鍛冶原料の不純物(金属鉄と未分離の砂鉄製錬滓)の除去作業も行われていた可能性が考えられる。

(3) 梶形鍛冶滓1点(OSK-5)は鍛錬鍛冶滓に分類される。滓中に鉄チタン酸化物の結晶が確認されず、チタニア(TiO_2)も0.70%と低値であった。熱間での鍛打加工に伴う反応副生物である。

またガラス質滓(OSK-1)は、微小金属鉄を多数含む粘土溶融物であった。やはり熱間での鍛打加工時に、羽口先端が溶融して生じたものと推測される。

註

(1) 木下亀城・小川留太郎 1995『岩石鉱物』保育社

チタン鉄鉱は赤鉄鉱とあらゆる割合に混じりあった固溶体をつくる。(中略)チタン鉄鉱と赤鉄鉱の固溶体には、チタン鉄鉱あるいは赤鉄鉱の結晶をなし、全体が完全に均質なものと、チタン鉄鉱と赤鉄鉱が平行にならんで規則正しい縞状構造を示すものがある。

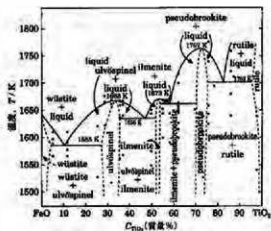
チタン鉄鉱は磁鉄鉱とも固溶体をつくり、これにも均質なものと、縞状のものがある。(中略)このようなチタン鉄鉱と赤鉄鉱、または磁鉄鉱との固溶体を含チタン鉄鉱 Titaniferous iron ore という。

(2) 日刊工業新聞社 1968『焼結組織写真および識別法』

ウスタイトは約450～500Hv、マグネタイトは約500～600Hv、ファイヤライトは約600～700Hvの範囲が提示されている。ウルボスピネル($Ulvöspinel: 2FeO \cdot TiO_2$)の硬度値範囲の明記はないが、マグネタイト(Magnetite: $FeO \cdot Fe_2O_3$)と同じスピネル類の化合物で、チタニアを固溶するためマグネタイトよりも硬質である。ウルボスピネル組成であれば通常600Hv以上の値を示す。ヘルシナイト(Hercynite: $FeO \cdot Al_2O_3$)はさらに硬質で1000Hvを超える。

(3) J. B. MacChesney and A. Mian, (1961). *American Mineralogist* 46, pp. 72.

【イルメナイト(Imenite: $FeO \cdot TiO_2$)、シュードブルッカイト(Pseudobrookite: $Fe_2O_3 \cdot TiO_2$)の晶出は $FeO-TiO_2$ 二元平衡状態図から高温化換算が推定される。】



第73図 $FeO-TiO_2$ 二元平衡状態図

第2表 供試材の履歴と調査項目

符号	出土位置	遺物名称	推定年代	計測値		金属探知器反応		調査項目		備考
				大きさ(mm)	重量(g)	マクロ顕微鏡用	反応	マクロ顕微鏡用	EPMA化学分析	
OSK-1	2区2 炉2	ガラス製薄		37×20×22	10.3	なし	○	○	○	
OSK-2	2区2 炉1	銅形鋳造薄		54×37×25	51.7	なし	○	○	○	
OSK-3	2区3 D層	未製品(鋳造)	古代~中世	41×40×24	84.0	L(●)	○	○	○	
OSK-4	2区2 B~C層	銅形鋳造薄		37×25×30	63.4	なし	○	○	○	
OSK-5	2区2 C層	銅形鋳造薄		115×92×38	622.8	なし	○	○	○	

第3表 供試材の化学組成

符号	出土位置	遺物名称	推定年代	全成分 Total (Fe)	金属鉄 (Metallic Fe)	酸化 第1鉄 (FeO)	酸化 第2鉄 (Fe ₂ O ₃)	一酸化 珪素 (SiO ₂)	一酸化 アルミニウム (Al ₂ O ₃)	酸化 カルシウム (CaO)	酸化 マグネシウム (MgO)	酸化 ナトリウム (Na ₂ O)	酸化 マンガン (MnO)	一酸化 チタン (TiO ₂)	酸化 ケイ素 (Si)	五酸化 リン (P ₂ O ₅)	砒素 (As)	バトリウム (V)	銅 (Cu)	二酸化 ジルコニウム (ZrO ₂)	遺棄成分	
																						55.4
OSK-1	2区2 炉2	ガラス製薄		63.15	0.10	52.77	31.50	4.13	2.75	0.68	1.21	0.05	0.23	1.14	0.07	0.02	0.41	0.0002	0.15	<0.01	<0.01	8.87
OSK-2	2区2 炉1	銅形鋳造薄		56.66	0.51	55.97	18.08	14.88	4.30	1.66	0.77	0.95	0.33	2.45	0.07	0.02	0.20	0.0001	0.17	<0.01	<0.01	22.89
OSK-4	2区2 B~C層	銅形鋳造薄	古代~中世	49.79	0.10	26.12	42.02	17.48	5.39	0.67	0.50	0.34	0.13	0.70	0.03	0.09	0.17	0.0005	0.04	<0.01	<0.01	24.51
OSK-5	2区2 C層	銅形鋳造薄																				

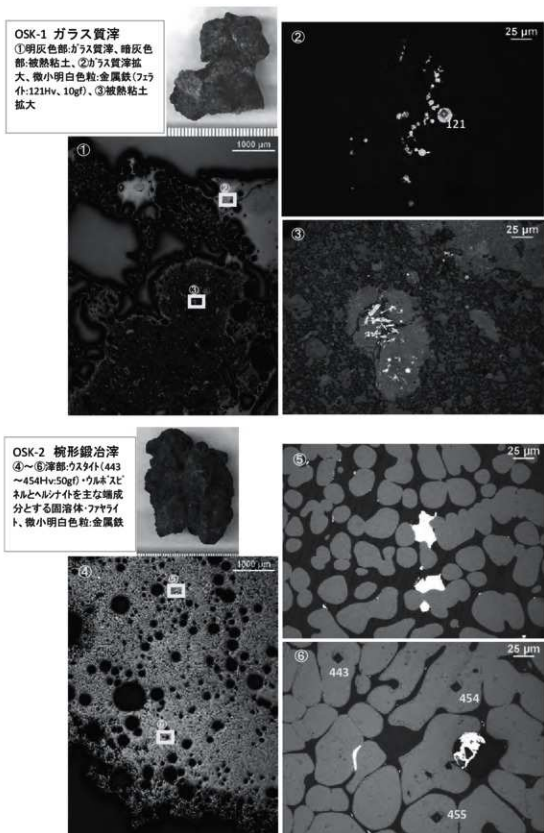


写真6 ガラス質滓・椀形鍛冶滓の顕微鏡写真

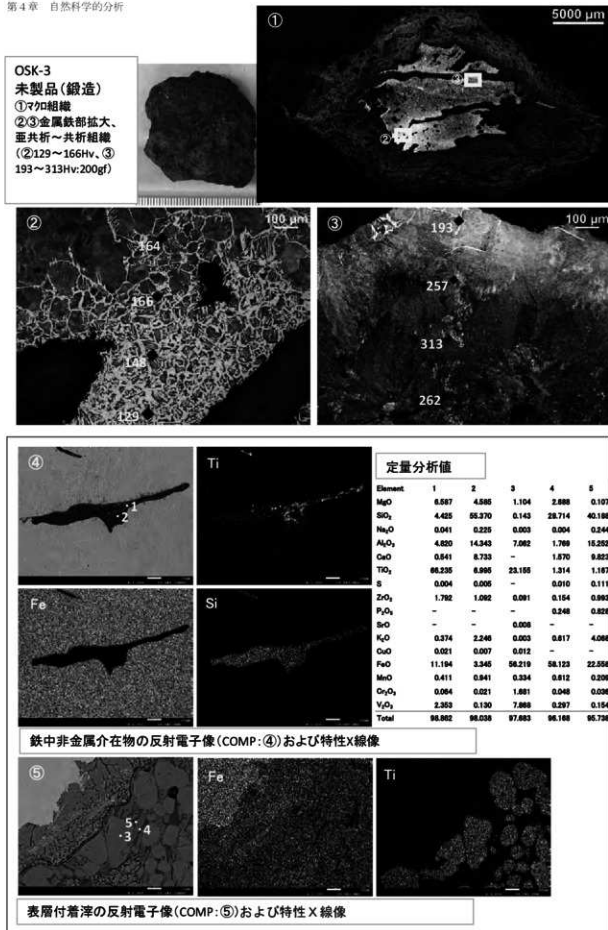
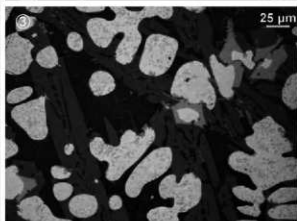
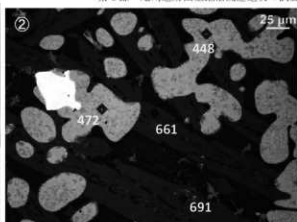


写真7 未製品(鍛造)の顕微鏡写真・EPMA調査

OSK-4 梲形鍛冶滓(破片)

①~③滓部:ウスタイト(448・472Hv:50gf)・ウルホスピネルとヘルシナイトを主な端成分とする固溶体・フヤヤイト(661・691Hv:50gf)



OSK-5

梲形鍛冶滓

④~⑥滓部:ウスタイト(451・492Hv:50gf)・フヤヤイト(621・681Hv:50gf)
⑥微小明白色粒:金属鉄

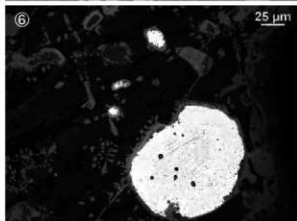
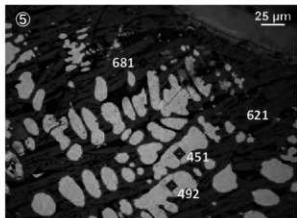
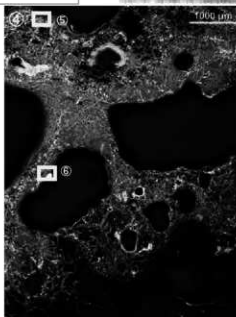


写真8 梲形鍛冶滓の顕微鏡写真

第2節 放射性炭素年代測定

株式会社パレオ・ラボAMS年代測定グループ

1 はじめに

岡山県美作市古町の尾崎遺跡より検出された試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

2 試料と方法

測定試料の情報、調製データは第4表のとおりである。測定試料を写真9～13に示す。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS: NEC製 1.5 SDH）を用いて測定した。得られた14C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、14C年代、暦年代を算出した。

第4表 測定試料および処理

測定番号	造跡データ	試料データ	前処理
PLD-48426	試料 No. 1 調査区：2区2 遺構：伊2	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム: 1.0 mol/L, 塩酸:1.2 mol/L)
PLD-48427	試料 No. 2 調査区：2区2 遺構：伊1 備考：炭サンプル	種類：土塊（炭屑片が多量に混じる） 状態：dry	湿式篩分：106 μm 超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム: 1.0 mol/L, 塩酸:1.2 mol/L) 処理備考：篩の上の残渣（炭化物）を使用
PLD-48428	試料 No. 3 調査区：4区2 遺構：土坑12	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム: 1.0 mol/L, 塩酸:1.2 mol/L)
PLD-48429	試料 No. 4 調査区：4区4 遺構：19土坑 層位：セクシオン階 層土	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム: 1.0 mol/L, 塩酸:1.2 mol/L)
PLD-48430	試料 No. 5 調査区：4区4 遺構：柱穴4 備考：柱材	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム: 1.0 mol/L, 塩酸:1.2 mol/L)

3 結果

第5表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}C$ ）、同位体分別効果の補正を行った暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した14C年代を、第74図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。



写真9 試料No.1 (PLD-48426)



写真10 試料No.2 (PLD-48427)



写真11 試料No.3 (PLD-48428)



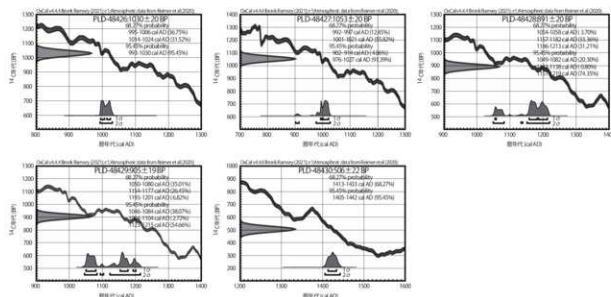
写真12 試料No.4 (PLD-48429)



写真13 試料No.5 (PLD-48430)

第5表 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

	δ ‰	暦年較正暦年代	^{14}C 年代	^{14}C 年代を暦年に較正した年代	
	(%)	(yr BP \pm 1 σ)	(yr BP \pm 1 σ)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-48426 試料 No. 1	-29.14 \pm 0.12	1030 \pm 20	1030 \pm 20	995-1906 cal AD (38.75%) 1014-1024 cal AD (31.52%)	993-1030 cal AD (85.43%)
PLD-48427 試料 No. 2	-24.65 \pm 0.13	1053 \pm 20	1055 \pm 20	992-997 cal AD (12.45%) 1001-1021 cal AD (55.82%)	902-914 cal AD (4.06%) 976-1027 cal AD (91.39%)
PLD-48428 試料 No. 3	-28.62 \pm 0.12	891 \pm 20	890 \pm 20	1054-1058 cal AD (3.70%) 1157-1182 cal AD (33.36%) 1186-1213 cal AD (31.21%)	1049-1082 cal AD (20.30%) 1133-1138 cal AD (0.80%) 1151-1219 cal AD (74.35%)
PLD-48429 試料 No. 4	-27.44 \pm 0.12	905 \pm 19	905 \pm 20	1050-1080 cal AD (35.01%) 1154-1177 cal AD (26.45%) 1193-1201 cal AD (6.82%)	1046-1084 cal AD (28.07%) 1094-1104 cal AD (2.72%) 1123-1215 cal AD (54.66%)
PLD-48430 試料 No. 5	-28.50 \pm 0.20	506 \pm 22	505 \pm 20	1413-1433 cal AD (88.27%)	1405-1442 cal AD (95.45%)



第74図 暦年較正結果

14 C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。14 C年代 (yrBP) の算出には、14 Cの半減期として Libby の半減期 5568年を使用した。また、付記した14 C年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の14 C年代がその14 C年代誤差内に入る確率が68.27%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の14 C濃度が一定で半減期が5568年として算出された14 C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の14 C濃度の変動、および半減期の違い (14 Cの半減期 5730 ± 40 年) を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

14 C年代の暦年較正には OxCal4.4 (較正曲線データ: IntCal20) を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された14 C年代誤差に相当する68.27%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は95.45%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は14 C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

4 考察

測定の結果 (以下の較正年代は 2σ の値) は、以下のとおりである。

2区2の29炉の試料 No. 1 (PLD-48426) は、14 C年代が 1030 ± 20 BP、較正年代が993-1030 cal AD (95.45%) で、10世紀末～11世紀前半の暦年代を示す。2区2の30炉の試料 No. 2 (PLD-48427) は、14 C年代が 1055 ± 20 BP、較正年代が902-914 cal AD (4.06%) および976-1027 cal AD (91.39%) で、10世紀初頭～11世紀前半の暦年代を示す。4区2の36土坑の試料 No. 3 (PLD-48428) は、14 C年代が 890 ± 20 BP、較正年代が1049-1082 cal AD (20.30%)、1133-1138 cal AD (0.80%)、1151-1219 cal AD (74.35%) で、11世紀中頃～13世紀前半の暦年代を示す。4区4の20土坑の試料 No. 4 (PLD-48429) は、14 C年代が 905 ± 20 BP、較正年代が1046-1084 cal AD (38.07%)、1094-1104 cal AD (2.72%)、1123-1215 cal AD (54.66%) で、11世紀中頃～13世紀前半の暦年代を示す。4区4の Pit5 の試料 No. 5 (PLD-48430) は、14 C年代が 505 ± 20 BP、較正年代が1405-1442 cal AD (95.45%) で、15世紀初頭～中頃の暦年代を示す。

今回の測定結果は、児玉編 (2018) の飛鳥時代以降の時期区分に従うと、試料 No. 1 (PLD-48548) が平安時代中期、試料 No. 2 (PLD-48549) が平安時代中期～後期、試料 No. 3 (PLD-48550) と試料 No. 4 (PLD-48429) が平安時代中期～鎌倉時代、試料 No. 5 (PLD-48430) が室町時代前期に相当する。

なお、木材の場合、最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると、最終形成年輪から内側であるほど古い年代が得られる (古木効果)。今回の試料は、試料 No. 3～No. 5 が最終形成年輪を確認できない部位不明の木片である。したがって、測定結果は古木効果の影響を受けている可能性があり、その場合、木が実際に枯死もしくは伐採されたのは測定結果よりもやや新しい年代と考えられる。最終形成年輪が残っていた試料 No. 1 の測定結果は、枯死もしくは伐採年代を示している。

引用・参考文献

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.

児玉幸多編 (2018) 標準日本史年表. 66p. 吉川弘文館.

中村俊夫(2000)放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の14C年代編集委員会編「日本先史時代の14C年代」: 3-20, 日本第四紀学会.

Reimer, P. J., Austin, W. E. N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P. G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R. L., Friedrich, M., Grootes, P. M., Guilderson, T. P., Hajdas, I., Heaton, T. J., Hogg, A. G., Hughen, K. A., Kromer, B., Manning, S. W., Muscheler, R., Palmer, J. G., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R. W., Richards, D. A., Scott, E. M., Southon, J. R., Turney, C. S. M., Wacker, L., Adolphi, F., Böniggen, U., Capano, M., Fahrni, S. M., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A. and Talamo, S. (2020) The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). *Radiocarbon*, 62(4), 725-757. doi:10.1017/RDC.2020.41. <https://doi.org/10.1017/RDC.2020.41> (cited 12 August 2020)

第3節 尾崎遺跡出土土器の胎土分析

岡山理科大学
白石 純

1 分析目的

この分析では、尾崎遺跡出土の中世須恵器の椀、小皿、捏ね鉢、壺の胎土分析を実施し、器種の違いで胎土に差異があるかどうか。また、型式学的分類で生産地が示されている須恵器が分析でも同じ生産地なのか検討した。比較した生産地遺跡は、勝間田焼（戸岩窯・進上谷窯）、東播系（神出窯跡群・魚住窯跡群）、西播系（大陣原窯・乳母ヶ懐窯・緑ヶ岡落矢ヶ谷窯）の各遺跡である。

2 分析方法・試料

蛍光X線分析法は、胎土中の元素濃度を測定し、その元素濃度から分析した須恵器の差異について検討する方法である。測定した元素は、 SiO_2 、 TiO_2 、 Al_2O_3 、 Fe_2O_3 、 MnO 、 MgO 、 CaO 、 Na_2O 、 K_2O 、 P_2O_5 、 Rb_2O 、 SrO 、 Y_2O_3 、 ZrO_2 の14元素である。

なお測定装置・条件・試料は以下の通りである。

測定装置：エレメントアナライザー JSX-3203EV（日本電子）を使用した。

測定条件：X線照射径3mm、電流1.00mA、電圧30kV、測定時間300秒、測定室は真空の条件で測定した。

定量値は、ファンダメンタル・パラメーター法により算出した。毎回の定量値の再現性があることを確認するため、地質調査所の標準試料JA-1（安山岩）、JG-1a（花崗岩）、JB-1a（玄武岩）の3試料の定量値を求めて、装置の安定性を確認している。

測定試料：分析試料は、試料表面の汚れを除去後、乾燥した試料を乳鉢（タングステンカーバイト製）で粉末（100～200メッシュ）にしたものを加圧成形機で約10トンの圧力をかけ、コイン状に成形したものを測定試料とした。したがって、一部破壊分析である。

分析結果の比較（差異）は、有意な差がみられる元素を横軸と縦軸にとり、散布図を作成し、胎土の違いについて検討した。

また、実体顕微鏡による胎土中の砂粒観察もおこなった。これは2008年に実施した尾崎遺跡出土の中世須恵器（勝間田、相生）の砂粒観察で、勝間田産には、火山ガラスが相生産には石英（透明・白色）が多く観察されたことから、産地推定に有効と考えられることによる（白石2008）。

分析試料は、第6表に示した尾崎遺跡出土の10世紀～14世紀にかけての椀、小皿、捏ね鉢、壺の30点である。また、生産地推定の比較資料としては、勝間田焼（戸岩窯・進上谷窯）、東播系（神出窯跡群・魚住窯跡群）、西播系（大陣原窯・乳母ヶ懐窯・緑ヶ岡落矢ヶ谷窯）の各遺跡である。

なお、この分析ではCaO（酸化カルシウム）、 K_2O （酸化カリウム）、 Rb_2O （酸化ルビジウム）、SrO（酸化ストロンチウム）の4元素の胎土に差異がみられたことから、これらの元素を用いて散布図を作成し検討した。

3 分析結果

蛍光X線分析法

・生産地遺跡の比較

第75図 (K_2O-CaO 散布図)、第76図 (Rb_2O-SrO 散布図) は、各生産地を比較したものである。この散布図から東播系が勝間田・西播系と半分ほど分布領域が重なり、勝間田と西播系(相生)の領域はほぼ重なり、識別ができないことがわかった。

・尾崎遺跡内出土須恵器の比較

第77・78図は、尾崎遺跡内出土の須恵器(椀・小皿・捏ね鉢・壺)を比較した散布図である。第77図では大きく3つに分類できる。それは、試料番号1~4(捏ね鉢)と11(椀)・14(椀)・30(椀)とそれ以外のものにわかるようである。なお、23(椀)は単独で分布した。また、第78図でも1~4(捏ね鉢)と11(椀)・14(椀)・30(椀)と8(椀)・20(椀)・25(椀)・29(椀)とそれ以外のものに分類できる。つまり、第78図では第77図でそれ以外としたものが2つにわかれた。このように、遺跡内出土の須恵器でも3ないし4つに分類できるようである。

・尾崎遺跡出土須恵器の産地推定

第79・80図は尾崎遺跡出土須恵器の生産地を推定した散布図である。この両散布図から推定すると、試料番号1~4(捏ね鉢)は東播系に推定される。

第77・78図でほぼ一つにまとまった一群(5~10・12・13・15~22・24~29)は、第79・80図では勝間田と西播系(相生)が重複する領域に分布する。特に勝間田領域の範囲内にまとまる傾向がみられた。なお、11・14・30と23は、産地がはっきりしなかった。

実顕微鏡による胎土観察

中世須恵器の肉眼による胎土観察では、東播系にはチャートなどの堆積物が、勝間田焼には、火山ガラスが、西播系(相生窯)には、石英(透明・白色)などの鉱物や岩石が顕著にみられることがわかっている(白石2008)。この分析では、胎土中の砂粒を観察し、産地の推定を試みた。なお、砂粒観察では非破壊を前提としているため須恵器表面をナゲ等で調整した試料には、砂粒観察が困難なものもあった。したがって、大まかな観察になっていることを断っておく。以下、観察結果について報告する。

- ①試料番号1~4には1mm以上のチャートが含まれていた。
- ②試料番号6・7・16・19・20・24・27・28・29には0.5mm以下の火山ガラスが観察された。
- ③試料番号5・8・9・10・12・13・15・17・18・21・22・25・26は1mm以下の透明および白色の石英が含まれていた。
- ④試料番号11・14・30には1mm以下の石英(白色)と黒色粒が含まれていた。
- ⑤試料番号23には1mm以下の石英(白色)と黒色の粒状から柱状の鉱物(角閃石?)が少し含まれていた。

以上、5つに分類でき、①は東播系、②は勝間田、③は西播系(相生)の各産地に推定される。また、④⑤は産地がはっきりしない。

このように第6表で試料提供者が示した産地分類と整合性がないものがみられた。

4 まとめ

尾崎遺跡出土須恵器の産地推定を実施したが、考古学的な検討で西播系（相生）、勝間田焼に推定されている須恵器が、蛍光X線分析ではどちらの生産地に想定されるか判別できなかった。その原因として、西播系（相生）と勝間田焼の両生産地須恵器の胎土が非常に類似しており、散布図では生産地の分布域が重複して判別ができなかったことによる。

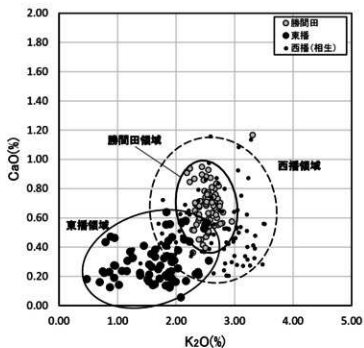
また、実体顕微鏡による胎土中の砂粒観察では、捏ね鉢（1～4）は東播系に推定できた。しかし、西播系（相生）と勝間田に関しては、すべてではないがある程度、産地が識別できた。なお、11・14・30と23の4点は、生産地がはっきりしなかった。

引用文献

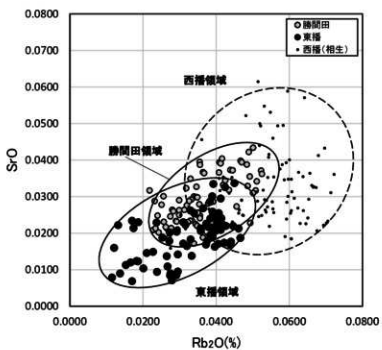
白石 純 2008 「中国横断自動車道姫路鳥取線関連遺跡出土土器の胎土分析」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 213
岡山県教育委員会

第6表 尾崎遺跡出土須恵器の胎土分析結果（%）

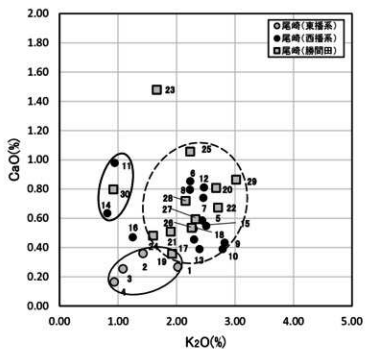
分析番号	器種	SiO ₂	TiO ₂	Al ₂ O ₃	Fe ₂ O ₃	MgO	MgO	CaO	Na ₂ O	K ₂ O	P ₂ O ₅	焼石	SrO	ZnO	ZrO ₂	胎土中の特徴観察	考古学的観察による産地推定	胎土分析による産地推定
1	捏ね鉢	66.04	1.29	17.14	10.40	0.02	0.00	0.27	0.44	2.02	0.25	0.0298	0.0122	0.0052	0.0057	チャート等を含む	尾崎（東播系）	東播系
2	捏ね鉢	66.03	1.40	18.67	10.26	0.02	0.00	0.26	0.26	1.43	0.19	0.0237	0.0202	0.0081	0.1236	チャート等を含む	尾崎（東播系）	東播系
3	捏ね鉢	66.75	1.82	14.48	13.02	0.05	0.00	0.25	0.00	1.08	0.32	0.0256	0.0120	0.0064	0.1668	チャート等を含む	尾崎（東播系）	東播系
4	捏ね鉢	66.55	1.96	16.38	13.36	0.04	0.05	0.18	0.11	0.92	0.28	0.0132	0.0133	0.0115	0.1380	チャート等を含む	尾崎（東播系）	東播系
5	瓶	64.14	2.10	20.11	9.31	0.04	0.45	0.59	0.29	2.44	0.27	0.0363	0.0231	0.0086	0.0981	石英（白色）を多く含む	尾崎（西播系）	西播系
6	瓶	65.69	1.40	19.67	9.26	0.20	0.00	0.85	0.09	2.23	0.28	0.0410	0.0290	0.0138	0.1219	火山ガラス、黒色砂粒を含む	尾崎（西播系）	勝間田
7	瓶	62.32	2.57	19.46	11.15	0.03	0.28	0.74	0.58	2.48	0.22	0.0284	0.0259	0.0078	0.1029	火山ガラス、黒色砂粒を含む	尾崎（西播系）	勝間田
8	瓶	51.53	1.74	27.08	15.67	0.06	0.09	0.60	0.28	2.23	0.29	0.0546	0.0481	0.0127	0.1196	石英（白色）、黒色砂粒を含む	尾崎（西播系）	西播系
9	瓶	62.20	1.84	20.63	10.92	0.07	0.29	0.43	0.31	2.82	0.25	0.0463	0.0256	0.0259	0.1202	石英（白色）、黒色砂粒を含む	尾崎（西播系）	西播系
10	瓶	61.67	1.84	20.84	11.14	0.06	0.34	0.39	0.41	2.79	0.22	0.0436	0.0246	0.0252	0.1183	石英（白色）、黒色砂粒を含む	尾崎（西播系）	西播系
11	瓶	60.35	2.03	21.57	12.62	0.06	0.31	0.98	0.71	0.94	0.21	0.0123	0.0281	0.0120	0.0738	石英（白色）、黒色砂粒を含む	尾崎（西播系）	？
12	瓶	55.63	2.08	26.27	11.86	0.14	0.13	0.81	0.30	2.47	0.21	0.0481	0.0296	0.0176	0.0817	石英（白色、透明）、黒色砂粒を含む	尾崎（西播系）	西播系
13	瓶	61.63	1.70	21.76	10.77	0.09	0.22	0.29	0.33	2.39	0.30	0.0420	0.0281	0.0215	0.1222	石英（白色、透明）、黒色砂粒を含む	尾崎（西播系）	西播系
14	瓶	56.34	2.21	23.26	15.24	0.06	0.32	0.63	0.17	0.82	0.29	0.0150	0.0182	0.0114	0.0918	石英（白色）、黒色砂粒を含む	尾崎（西播系）	？
15	瓶	61.08	2.25	20.71	11.16	0.05	0.41	0.55	0.79	2.51	0.34	0.0450	0.0257	0.0010	0.1089	石英（白色）を含む	尾崎（西播系）	西播系
16	瓶	57.29	2.03	25.79	12.17	0.07	0.00	0.47	0.27	1.25	0.34	0.0314	0.0322	0.0084	0.1425	火山ガラスを含む	尾崎（西播系）	勝間田
17	小皿	68.22	1.81	16.96	9.97	0.04	0.36	0.46	0.19	2.30	0.36	0.0285	0.0214	0.0123	0.1404	石英（透明）を含む	尾崎（西播系）	西播系
18	小皿	63.94	1.91	20.47	10.68	0.17	0.18	0.53	0.12	2.29	0.29	0.0284	0.0291	0.0126	0.1319	石英（白色）、黒色砂粒を含む	尾崎（西播系）	西播系
19	壺	62.25	1.64	24.32	8.69	0.05	0.00	0.26	0.18	1.83	0.33	0.0457	0.0172	0.0110	0.0995	火山ガラス、白色砂粒を含む	尾崎（勝間田）	勝間田
20	瓶	62.84	1.27	20.48	10.72	0.07	0.00	0.81	0.52	2.68	0.30	0.0499	0.0489	0.0152	0.1107	火山ガラス、白色砂粒を含む	尾崎（勝間田）	勝間田
21	瓶	55.89	1.88	22.24	16.86	0.06	0.00	0.51	0.11	1.90	0.20	0.0484	0.0269	0.0077	0.1218	石英（白色）、黒色砂粒、黒銅石を含む	尾崎（勝間田）	西播系
22	瓶	61.90	2.19	21.94	9.25	0.06	0.33	0.67	0.77	2.71	0.35	0.0458	0.0334	0.0096	0.1223	石英（白色）を含む	尾崎（勝間田）	西播系
23	瓶	60.48	2.33	20.42	12.26	0.15	0.45	1.48	0.24	1.66	0.38	0.0258	0.0500	0.0013	0.0654	石英（白色）、黒色砂粒、黒銅石を含む	尾崎（勝間田）	？
24	瓶	56.56	1.99	24.80	13.56	0.12	0.12	0.48	0.21	1.60	0.23	0.0271	0.0290	0.0197	0.1534	火山ガラス、白色砂粒を含む	尾崎（勝間田）	勝間田
25	瓶	56.44	1.72	25.33	12.34	0.10	0.00	1.06	0.20	2.23	0.24	0.0555	0.0606	0.0124	0.1108	石英（白色）を含む	尾崎（勝間田）	西播系
26	瓶	64.85	1.82	17.69	11.83	0.05	0.11	0.52	0.39	2.26	0.24	0.0678	0.0316	0.0106	0.1319	石英（白色）を含む	尾崎（勝間田）	西播系
27	捏ね鉢	65.89	1.66	19.53	8.81	0.07	0.19	0.59	0.25	2.32	0.28	0.0387	0.0321	0.0127	0.1312	火山ガラス、白色砂粒を含む	尾崎（勝間田）	勝間田
28	瓶	66.71	1.77	16.64	10.70	0.16	0.12	0.72	0.42	2.15	0.28	0.0289	0.0284	0.0051	0.1259	火山ガラス、白色砂粒を含む	尾崎（勝間田）	勝間田
29	瓶	59.49	1.73	22.91	18.21	0.10	0.12	0.82	0.03	3.02	0.28	0.0612	0.0394	0.0170	0.1161	火山ガラス、白色砂粒を含む	尾崎（勝間田）	勝間田
30	瓶	58.12	1.99	22.50	14.47	0.08	0.27	0.80	0.29	0.92	0.32	0.0186	0.0251	0.0082	0.0873	石英（白色、透明）、黒色砂粒（透明）を含む	尾崎（勝間田）	？



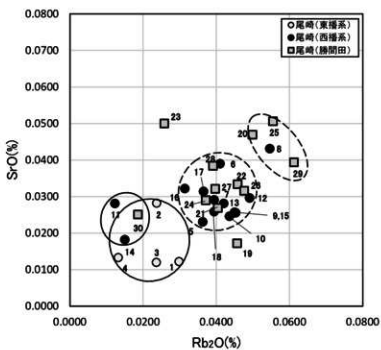
第 75 図 各生産地の比較 (K₂O-CaO 散布図)



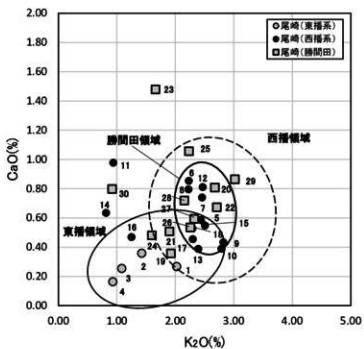
第 76 図 各生産地の比較 (Rb₂O-SrO 散布図)



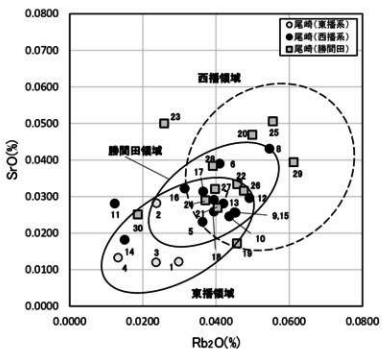
第 77 図 尾崎遺跡内出土須恵器の比較 (K₂O-CaO 散布図)



第 78 図 尾崎遺跡内出土須恵器の比較 (Rb₂O-SrO 散布図)



第 79 図 尾崎遺跡内出土須恵器の産地推定 (K₂O-CaO 散布図)



第 80 図 尾崎遺跡内出土須恵器の産地推定 (Rb₂O-SrO 散布図)

第5章 総括

第1節 尾崎遺跡の変遷

1 概要

尾崎遺跡は山王山の丘陵下端斜面から後山川に至る平野部までの約250m×400mの範囲に広がっている。尾崎遺跡では、本調査と平成17・18年度調査によって、縄文時代から室町時代までの各時期の遺構・遺物が見つかり、遺跡の広がり的一端が明らかになった。

本調査区は遺跡範囲の北辺にあたり、限られた調査範囲ではあるが、各時期のピットや遺構、遺物が見つかった。しかし、調査面積の制約上、柱穴の組み合わせ関係の検討や遺構検出に限界があり、その数は多いとは言えない。また遺構に伴う遺物も少なく、時期検討の手がかりは埋土の特徴や検出層位が主であった。第3章では「古墳時代以前」と「古代以降」に分類したが、平成17・18年度と本年度の調査成果を総合的に検討し、遺跡全体の変遷を追いたい(第81図)。

2 縄文時代～古墳時代

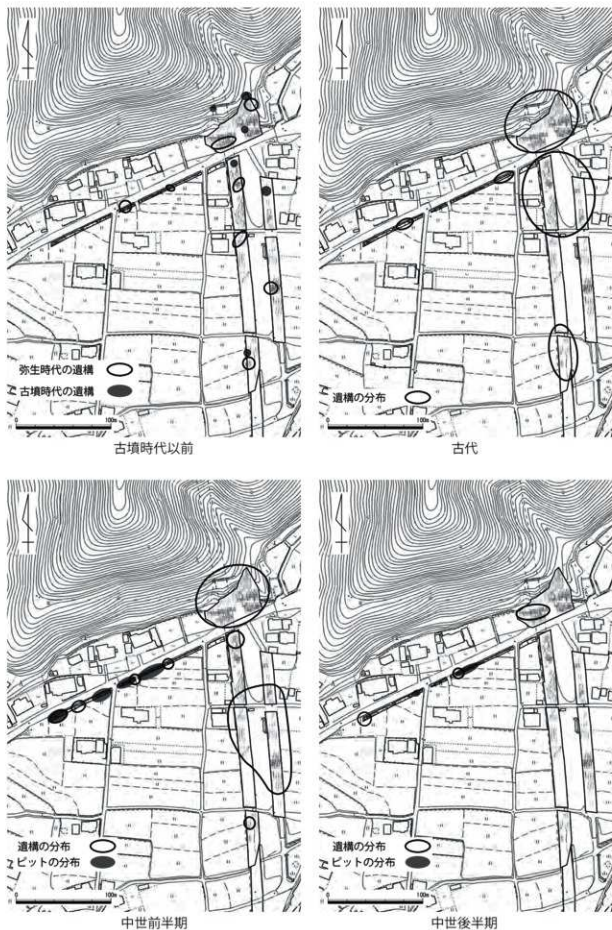
縄文時代の遺構は確認されていない。遺物は草創期の石器、前期、後期、晩期の土器が見つっている。沢田式に代表される突帯文土器の総出土点数が今回の調査で増え、稲作の可能性も含めた当該期の人為的活動について考えさせられる結果となった。

弥生時代中期中葉から後期前葉にかけての遺構には、竪穴住居4軒、土坑1基、溝3条がある。住居同士の距離は80m以上離れており、現状では散在的な印象を受ける。大原地域における弥生時代の集落は、丘陵上を中心に発掘調査が行われたこともあり、丘陵部に多く、低位部には少ないとされている⁽¹⁾。調査区の制約上遺跡全体での遺構の広がりや予測し得ないが、他の丘陵部に位置する八幡山遺跡等の事例と比較すると過疎的である。出土遺物は遺構と同様に中期中葉と後期前葉のものが主である。平成17・18年度調査ではタタキ目が外面に施される甕や山陰系の複合口縁甕等の後期後葉に属する土器が見つかり、当該地域の流通を考える上で注目される。

古墳時代の遺構は竪穴住居4軒と土坑1基、土器溜まり1か所が確認されており、全て後期に属する。丘陵部調査区で見つかった同時期の古墳や、近接する築出し古墳との関連が考えられる。

3 古代

古代の遺構はその分布にいくつかのまとまりがあり、北側丘陵部、国道南側約100mの範囲、平成17・18年度調査区南端の範囲、本調査区4区2の4か所に分けられる。北側丘陵部では掘立柱建物6棟、柱穴列、土器棺墓2基、溝2条、土坑2基、炉5基、焼土面4面、炭溜まり2基等が見つかった。一部の掘立柱建物と柱穴列は出土遺物に占める焼土土器の割合が大きい。国道南側の範囲では、掘立柱建物16棟、柱穴列3列、土坑4基等が見つかった。本調査区の1区1で見つかった柱穴列も



第81図 遺構分布の変遷

この一群に含まれる。掘立柱建物の一部は「L」字状の配列で規則的に並び、丹塗り土師器や円面硯といった特異な遺物を伴うことから官衙的性格をもつ一群と言える。以上主要な2つの遺構群のほか、平成17・18年度調査区南端では掘立柱建物3棟、土坑、炭溜まりが確認され、本調査区4区2では溝3条が見つかった。溝は遺物を伴わないが、この周囲で焼塩土器が複数出土したことから古代の範疇に含まれると考えられる。このような遺構の広がり様子から、掘立柱建物が規則的に建ち並ぶ官衙的性格を持つ範囲を中心とし、北側に焼塩に関連するような遺構や炉などの生産的な性格を持つ範囲が存在することが窺える。

本調査で見つかった2基の炉は、鍛冶炉としての使用が推測される。前述の主要な2つのまともに平面的には近接しているが、これらの炉はAMS年代測定結果から10世紀末～11世紀前葉という年代が得られた。平成17・18年度調査区で見つかった炉や焼土面は、多量の焼塩土器をはじめ、この年代より古相の土器を伴うものが多い。よって多量の鉄滓を伴う本調査区の炉とは時期が異なると考えられる。

4 中世

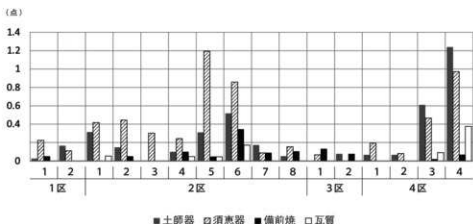
中世の遺構は、掘立柱建物20棟、柱穴列15列、土坑墓、土坑20基、溝8条、炭溜り、窪み、鉄分沈着面、石組2基が見つかった。しかし中世の遺構は伴う遺物が限られている上、全形の不明な破片資料が多く、形態に基づく遺物検討に十分とは言えない。そこで、調査区ごとの1㎡あたりの土器の平均出土点数をそれぞれの地区ごとにグラフで表した⁽¹²⁾。その結果、各種別の最頻値は、土師器が4区3・4、須恵器が2区5・6、備前焼が2区6、瓦質土器が4区4に見られることが示された。

中世須恵器の産地

平成17・18年度調査と本調査で明らかになったのは、古代末～中世前半期の範囲に含まれる須恵器は、勝間田焼の他に、西播地域や東播地域で製作されたものが含まれるということである。本報告では筆者が考古学的観察から製作地域を推定したものについて、蛍光X線分析と胎土中の砂粒観察による胎土分析を依頼し、3手法による産地の検討を試みた。砂粒観察による産地推定の有効性については平成17・18年度調査の際に示されており⁽¹³⁾、今回も砂粒観察と蛍光X線分析との結果に齟齬はなかった。

東播地域と考古学的に推定したものは自然科学分析でも同様の結果を示し、整合性があると考えられる。加えて東播地域の須恵器は捏ね鉢のみであるということが分かった。同時期の勝間田焼や西播地域の須恵器が認められることから、器種ごとに産地を選択していたと考えられる。西播地域の須恵器と勝間田焼の形態的な差異については、工人の移動などの可能性も踏まえ、特徴的な器種を除いてその判別の難しさが指摘されている。今回の分析でも、考古学的検討と自然科学分析の結果が一致しないものがいくつか認められた。資料のほとんどが全形を復元し得ない破片資料であったこともあり、正当に検討できなかった可能性がある。また蛍光X線分析の数値が勝間田領域、西播領域、東播領域の3領域から大きく外れるものもいくつか認められた。これらの資料についてはまだ未調査の窯跡で焼成された可能性も残る。尾崎遺跡の北側丘陵上には、字名に「陶」とつく場所がある。須恵器を焼成する窯があったのか、またいつの時代なのか知り得ないが、近隣で須恵器の生産が行われていた可能性も考えなければならない。

中世前半期

第82図 土器種別ごとの平均出土点数（出土点数/m²）

中世の遺構の多くが中世前半期に含まれると考えられる。本調査区は幅狭で遺構に含めることができなかったピットが多数あるが、建物として南北に広がる可能性が高い。第82図に示されるように、前半期と考えられるピットが2区4～4区4にかけて比較的高密度で分布している。

2区5・6の須恵器は、第3章でも示されているように、9世紀以前の古代の須恵器が主である。一方、次に出土量の多い4区4の須恵器は中世のものが比較的多い。また、4区4の瓦質土器は13世紀前半以前の羽釜や鍋が主を占めている。このような遺構・遺物の様子から、複数の掘立柱建物が建ち並ぶ平成17・18年度調査区や4区4を中心として中世前半期の遺構が密に広がる可能性がある。

中世の大原地域には、大原保が存在したことが分かっている。立保についての記録はないが、嘉禎4（1238）年の足利義氏から高野山金剛三昧院大仏殿への大原保の寄進の旨を初めとして15世紀前半まで管理権をめぐるやり取りについての記載が度々登場する。後山川と吉野川の合流地点の北側と尾崎遺跡の所在する東側は旧大原町域でも平野部が最も広くなる地域のひとつである。保の中心地がどこにあったのかは不明であるが、大原保に関する遺構・遺物であった可能性は高い。同時期に存在したとされる大野荘は、13世紀中頃には文献上に登場する。大野荘に比定されている美土路遺跡の出土物は、本遺跡出土の中世前半期の土器様相と大きな差異は認められない。

中世後半期

中世の遺構の中で、丘陵部の柱穴列7列と鉄分沈着面は中世後半期に下ると考えられる。また2区7では検出レベルがB層直下で、浅いピットが多く確認された。C層に含まれる土器は13世紀前半以前のものがほとんどで、遺構検出レベルもC層以下であることから、中世後半期以降に大規模な造成が行われ、後半期の遺構の多くが削平された可能性が考えられる。前項で遺構やピットの多くを中世前半期に含めるとしたが、後半期まで下る可能性は残る。その可能性を踏まえても、第82図に示されるように、前半期から後半期にかけて遺構の分布が著しく縮小するのは明確である。

遺構分布の縮小に伴うように、中世後半期に含まれる遺物の割合は前半期と比較すると少ないが、4区3・4における土師器の量の多さは注目される。内容としては小皿と呼ばれるような規格のものが最も多くを占める。中世の土師質小皿についての研究は進められているが、所謂「京都系土師器」に研究の主眼を置いたものが多く、本遺跡で主として見られるようなクロコ成形の土師質小皿を対象としたものは多いとは言えない。一方で各地の城館関連遺跡の発掘調査成果に目を向けると兵庫県赤穂郡に所在する赤松遺跡¹¹⁾や、山口県山口市に所在する大内氏館跡¹²⁾をはじめとして土師質小皿の一

括廃棄が認められるものがある。これらは溝や土坑などでの事例が多く、B層以上の包含層出土が主を占める本遺跡の土師質小皿では廃棄直後の様子を知ることはできない。しかし前述の造成の可能性を考えると、本来一括廃棄されたものであったのかもしれない。

尾崎遺跡の北側丘陵上には14世紀前半～15世紀末に機能していた小原山王山城が所在する。丘陵部で見つかった柱穴列7列が関連する防御施設である可能性を指摘された程度で、城館管理に関係するような遺構は見つかっていない。しかし本報告の土坑9と、「鉄分沈着面」としたものは現在残る方形の区画の外側に近接し、調査区外に延びている。大内氏館跡などの地域の城館関連遺跡では区画に沿う溝や土塁、櫓列が確認されている例があり、両遺構がこのような施設の存在を示唆する可能性も捨てきれない。本調査区の4区に相当するこの区画を含む、120m四方の方形の範囲の字名が「土居ノ内」であることもこの可能性を高めている要素の一つである。また前述の土師質小皿一括廃棄の可能性に加え、天目茶碗や碁石と考えられる扁平な二色の円礫が出土している。以上のことを踏まえ、4区を中心に城館関連遺構が存在した可能性も考えられる。(西村)

註

- (1) 福田正雄 2008『弥生時代の集落』『八幡山遺跡 八幡山南遺跡 八幡山円明寺遺跡 尾崎遺跡 中町B遺跡 穴が谷遺跡 穴が谷古墳 今岡D遺跡 今岡中山遺跡 今岡古墳群 高岡遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告213
- (2) 製作したグラフは報告書掲載資料に基づくものであり、図化し得なかった非掲載の細片資料は考慮していないが、本報告では土器の分類・集計基準を統一しているため、土器様相の実態にある程度近づいた結果が得られるのではないかと考えている。
- (3) 白石純 2008『中国横断自動車道姫路鳥取線関連遺跡出土土器の胎土分析』『八幡山遺跡 八幡山南遺跡 八幡山円明寺遺跡 尾崎遺跡 中町B遺跡 穴が谷遺跡 穴が谷古墳 今岡D遺跡 今岡中山遺跡 今岡古墳群 高岡遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告213
- (4) 上郡町教育委員会 2022『赤松遺跡1 確認調査報告書』上郡町埋蔵文化財発掘調査報告書4
- (5) 山口市教育委員会 2012『大内氏館跡13-史跡北部の発掘調査-』山口市埋蔵文化財調査報告第103集

第2節 尾崎遺跡出土中世調理具・煮炊具について

尾崎遺跡では平成17・18年度調査と本調査を合わせ、破片資料が多いながらも調理具及び煮炊具が出土した。材質は土師質、須恵質、陶質、瓦質、鉄製と多様で、その形態や製作技術からはある程度の地域性が認められる。また、供給地域の移り変わりも読み取れる。(第83図)

出土調理具で最も時期が遡ると考えられるのは、勝間田焼の捏ね鉢117である。一点のみの出土であるが11世紀後半～12世紀前半と考えられる。また広域流通品であった東播系須恵器の片口捏ね鉢が出土しており、12世紀中頃～14世紀前半の範疇に含まれる資料である。14世紀頃からは同じく広域流通品であった備前焼鉢の使用が認められる。東播系須恵器が衰退し、備前焼が盛行していく瀬戸内地域に見られる物流の様子が本遺跡出土遺物にも表れている。

出土煮炊具の主を占めるのは瓦質の鍋と羽釜である。鍋は口縁部が「L」字状に屈曲し、外面には指頭瓦痕、体部内面にハケ目が認められる。本製品は鉄製鍋の模倣品とされており、「京都型瓦質焼成土器」に類似する土製煮炊具⁽¹⁾であると考えられる。13世紀後半～14世紀前半頃の西日本各地で出土が認められ、兵庫県神戸市兵庫津遺跡や広島県福山市草戸千間町遺跡出土資料のほか、因幡・東伯耆地域を中心に分布している⁽²⁾。本製品の口縁部の屈曲の度合に基づいて鍋A～Cに分類が行われており⁽³⁾、概ね新旧を表していると考えられる。屈曲の度合が最も強いとされた鍋Aは各地で認めら

	11世紀	12世紀	13世紀	14世紀	15世紀
勝間田焼	■	■			
東播系須恵器			■	■	■
備前焼				■	■

○煮炊具（鍋・羽釜）

	11世紀	12世紀	13世紀	14世紀	15世紀
瓦質土器		■	■	■	■
土師器（タタキ鍋）					■

第83図 出土調理具・煮炊具の変遷

れるが、同じ鍋Aでも山陰地域出土の資料は特にその屈曲度合が強い。尾崎遺跡出土資料にも鍋A～Cの各種が含まれるが、山陰地域出土資料に見られるような屈曲度合の強い鍋Aも認められる。瓦質土器の生産地については未だ不明瞭な点が多く、筆者も他県の出土資料の胎土について十分な観察を行ったとは言えないが、距離的にも近い山陰地域出土資料との関連を考えた。瓦質鍋370は口縁部が「く」の字に外反し、県北部で見られる瓦・鍋1-a類として報告⁽⁴⁾されたものに類似する。本資料は口縁全体の形態としては「く」の字状を呈するが、内外面の表面の起伏の様子から、「L」字口縁鍋の退化した型式であると考えられる。羽釜は鏝が口縁部に極めて近いところに取りつき、突出度が小さく、体部は口縁部にかけて大きく内湾する。羽釜も山陰地域に見られる資料は口縁部の内湾度合いが強く、調理具は総じて山陰地域の影響を受けていることが推察される。

煮炊具で目を引くのは土師質で表面にタタキ目を有する鍋である。表面は煤により茶褐色を呈し、目の粗い平行タタキ目が体部に施される。大原地域では尾崎遺跡のほか、八幡山南遺跡出土資料にも認められる。13世紀頃に広域流通した東播系須恵器が衰退していく14世紀頃から播磨地域を中心にみられ、須恵器の成形技法の伝統を引くタタキ技法を継承する形で成立すると考えられている⁽⁵⁾。

以上のように、調理具は広域流通品を使用し、その盛衰に応じて供給先を変えていることが分かった。煮炊具については生産地は不明であるが14世紀頃まで山陰地域の影響が考えられる瓦質鍋・羽釜を使用し、15世紀頃からは播磨地域土師質タタキ鍋を取り入れている。これら土製調理具・煮炊具のほか、本調査では鉄製鍋と考えられる破片が出土している。胴部破片M80と足の部分の破片M57であり、後者は五十川氏による分類⁽⁶⁾の短い足が底部につく鍋Bにあたる。本製品は14～16世紀に盛行するとされるが、鉄製鍋の目立った出土は山陰の伯耆地域、中国山地山間部など、鉄生産に関わりのある地域で目立つ⁽⁷⁾。資料数が限られるため今後の検討を要するが、本地域の当時の産業について示している資料の一つかもしれない。

(西村)

註

- 橋本俊夫1995「各地の瓦質土器」『概説 中世の土器・陶磁器』日本中世土器研究会
- 八峠博1998「山陰における中世土器の変遷について—供膳具・煮炊具を中心として」『中近世土器の基礎研究XIII』日本中世土器研究会
- 橋本久和・福田正雄2011「中国地方における瓦質土器の模倣—岡山県勝央町大河内遺跡を中心に—」『中近世土器の基礎的研究』23 日本中世土器研究会
- 時實奈歩2002「岡山県における中世前半期の煮炊具の様相」『瀬戸内海の考古学—平井勝氏追悼論文集—』下巻 古代吉備研究会
- 長谷川真2008「土製煮炊具からみた中世兵庫津遺跡」『兵庫津の総合的研究』大手前大学史学研究所
- 五十川伸久1992「古代・中世の鉄鉢・鉄物」『国立歴史民俗博物館研究報告』第46集 国立歴史民俗博物館
- 土師質鍋については思曲口縁部直下から欠損している資料が主であり、形態や部位ごとの表面調整が復元可能なものが少ないため、今回の分析対象からは除外する。

遺物一覽表・新旧遺構対照表

土器一覽

発掘 番号	地区	出土遺構、 出土位置	種別	器種	計測値 (cm)			色調	構成	表面調整、形態等特徴
					口径 (最大値)	底径 (最小値)	器高 (最大値)			
1	3区1	惣穴住居	弥生土器	高杯	—	—	66.0	橙2.5YR6/6	良好	透かし孔貫通せず 外面：黒塗、磨地沈線文
2	3区2	惣穴住居	弥生土器	高杯	—	(13.2)	23.2	明赤焼 5YR5/6	良好	透かし孔貫通せず 内面：ヘラケズリ
3	2区4	溝1	弥生土器	壺?	—	—	44.0	灰 5YR7/6	良好	外面：磨地刻目、磨地沈線文、磨地斜格子文
4	2区4	溝1	弥生土器	壺?	—	—	33.0	浅黄焼 10YR8/3	良好	外面：沈線文、波状文 内面：指オサエ
5	2区4	溝1	弥生土器	壺?	—	—	32.0	浅黄焼 7.5YR8/3	良好	口縁上面：斜格子文 口縁側面：磨地斜格子文
6	2区4	溝1	弥生土器	壺	—	—	11.80	じぶい黄焼 10YR7/4	良好	口縁側面：波状文
7	1区1	F層	縄文土器	深鉢	—	—	66.0	灰黄焼 10YR5/2	良好	外面：条痕文、刺雲文 内面：条痕 口唇部刻目
8	4区1	F層	縄文土器	鉢	—	—	35.0	じぶい黄焼 7.5YR7/4	良好	外・内面：ミガキ
9	3区2	F層	縄文土器	鉢	—	—	32.0	じぶい黄焼 10YR7/2	良好	口縁部：沈線1条
10	4区1	F層	縄文土器	深鉢	—	—	33.80	じぶい黄焼 10YR5/4	良好	外面：刻目
11	4区1	F層	縄文土器	深鉢	—	—	33.70	じぶい黄焼 10YR7/3	良好	外面：刻目
12	4区1-2	F層	縄文土器	深鉢	—	—	44.00	じぶい黄焼 7.5YR7/3	良好	外面：刻目
13	2区4	F層	縄文土器	深鉢	—	—	42.00	じぶい黄焼 10YR7/3	良好	外面：ミガキ
14	1区1	F層	縄文土器	鉢	—	—	44.00	じぶい黄焼 10YR4/3	良好	外・内面：条痕、ナデ
15	1区1	F層	縄文土器	鉢	—	—	35.50	じぶい黄焼 10YR4/3	良好	外・内面：条痕
16	4区4	F層	縄文土器	鉢?	—	—	35.20	じぶい黄焼 7.5YR5/3	良好	外面：条痕文 内面：ケズリ
17	4区4	F層	縄文土器	鉢?	—	—	33.00	黒焼 7.5YR3/2	良好	外面：条痕文
18	4区4	F層	縄文土器	鉢	—	—	33.00	じぶい黄焼 7.5YR6/4	良好	外面：条痕文 内面：指オサエ
19	4区4	F層	縄文土器	鉢?	—	08.00	11.60	橙 7.5YR6/6	良好	
20	3区2	F層	弥生土器	壺	—	—	11.70	浅黄焼 10YR8/3	良好	黒塗 口縁部：刻目 側部：沈線
21	3区2	F層	弥生土器	壺	—	8.7	33.20	じぶい黄焼 7.5YR6/4	良好	外面：ヘラミガキ 内面：指オサエ
22	4区3	C層	弥生土器	壺	—	—	32.00	じぶい黄焼 10YR7/4	良好	口縁部：凹点文
23	2区4	C～E層	弥生土器	壺	—	—	32.00	浅黄焼 10YR8/3	良好	口縁上面：斜格子文 口縁側面：磨地斜格子文
24	4区3	D層	弥生土器	壺	—	—	11.90	橙 7.5YR6/6	良好	外面：磨地刻目 内面：斜格子文
25	3区2	F層	弥生土器	壺	—	—	44.20	浅黄焼 7.5YR8/4	良好	口縁部：刻目 外面：貼付雲母、刻目
26	3区2	F層	弥生土器	壺	—	—	66.20	明赤焼 5YR5/6	良好	外・内面：ハケ
27	3区2	F層	弥生土器	壺	—	—	33.70	じぶい黄焼 10YR6/3	良好	外面：貼付雲母、刻目、波状文
28	2区2	F層	弥生土器	壺	(13.00)	—	44.00	浅黄焼 10YR8/3	良好	口縁部：凹線3条 外面：ハケ
29	3区1-2	惣穴住居	弥生土器	壺	(15.20)	—	66.00	じぶい黄焼 7.5YR6/4	良好	口縁部：凹線3条 外面：ヘラケズリ、黒塗
30	2区6	C～D層	弥生土器	壺	(17.50)	—	33.00	橙 7.5YR6/6	良好	口縁部：凹線2条 内面：ヘラケズリ
31	4区1	D層	弥生土器	壺	(15.2)	—	33.80	じぶい黄焼 7.5YR7/4	良好	口縁部：凹線2条 外面：ミガキ 内面：ミガキ、ケズリ
32	3区1	F層	弥生土器	壺	—	—	33.90	じぶい黄焼 7.5YR7/4	良好	穿かし孔貫通 内面：ヘラケズリ
33	4区2	D～E層	弥生土器	鉢	—	44.90	33.10	明赤焼 5YR5/6	良好	外面：指オサエ 内面：ミガキ
34	1区2	D～E層	弥生土器	壺	(16.7)	—	37.10	明赤焼 2.5YR5/6	良好	外面：指オサエ 内面：ミガキ
35	3区2	F層	弥生土器	壺	—	—	42.00	じぶい黄焼 10YR5/4	良好	外面：ハケ 内面：ヘラケズリ、ハケ
36	4区2	D層	土師器	高杯	—	—	11.40	じぶい黄焼 10YR7/3	良好	
37	4区3	D層	土師器	高杯	—	—	14.80	橙 2.5YR6/6	良好	穿かし孔
38	2区5	D層	土師器	高杯	(16.7)	—	33.60	浅黄焼 10YR8/3	良好	赤色顔料
39	2区2	D層	須恵器	高杯	—	—	32.30	灰 NS/5	弊焼	
40	4区1-2	D層	須恵器	杯蓋	—	—	32.00	黄灰 2.5Y6/1	良好	自然焼
41	2区2	A～C層	須恵器	杯身	—	—	11.80	灰 7.5Y6/1	良好	
42	2区1	D層	須恵器	杯身	—	—	32.10	黄灰 2.5Y5/1	弊焼	
43	4区4	C～D層	須恵器	杯身	—	—	11.50	黄灰 2.5Y6/1	良好	
44	4区4	懸立柱礎物	須恵器	柱礎鉢	—	—	32.80	灰 NS/5	良好	
45	1区1	柱穴内	土師器	壺	—	—	32.00	橙 7.5YR7/6	良好	外面：ハケ
46	1区1	柱穴内	須恵器	杯蓋	—	10.6	33.00	灰黄 2.5Y6/2	良好	
47	2区4	土坑3	須恵器	壺	—	44.90	11.30	灰 10Y6/1	良好	底面：未焼
48	2区4	土坑4	土師器	瓶	(8.4)	(5.0)	11.80	じぶい黄焼 10YR7/4	良好	底面：未焼
49	4区1	土坑19	須恵器	小壺	—	—	35.00	黄灰 10YR6/2	良好	
50	4区2	土坑12	土師器	瓶	7.8	5.9	1.4	じぶい黄焼 10YR7/4	良好	ほぼ完成 内面：産
51	4区2	土坑14	土師器	瓶	8.6	7.1	1.1	浅黄焼 10YR8/3	良好	成形 外面：指オサエ 内面：磨地
52	4区2	土坑15	土師器	杯?	—	—	39.90	明赤焼 5YR5/6	良好	底面：未焼
53	4区2	土坑16	須恵器	壺	—	—	44.70	浅黄 2.5YR3/3	良好	外面：格子目タタキ 内面：ハケ目
54	4区4	土坑17	土師器	瓶	14.0	9.0	2.6	橙 7.5YR6/6	良好	内面：指オサエ、ナデ
55	4区4	土坑17	土師器	瓶	8.6	6.5	1.8	橙 7.5YR6/6	良好	底面：ヘラ切
56	4区4	土坑18	土師器	瓶	7.8	5.2	1.4	明焼 7.5YR5/6	良好	外面：輪文
57	4区4	土坑18	須恵器	餅付鉢	—	—	35.90	灰白 NS/7	良好	(粘土分析試料4)
58	4区4	C層	須恵器	壺	(8.4)	(4.9)	11.50	灰白 10YR8/1	良好	内面：磨地
59	4区4	土坑19	須恵器	壺	—	—	11.50	灰白 NS/7	良好	底面：未焼
60	4区4	土坑19	須恵土器	壺	—	—	11.60	増灰 NS/7	良好	
61	2区2	跡1	須恵器	壺	—	—	33.60	灰 NS/5/1	良好	外面：半行タタキ 内面：青黄皮
62	2区1	跡2	須恵器	杯蓋	—	—	10.60	じぶい黄焼 10YR7/2	良好	
63	4区3	跡3	須恵器	壺	—	5.8	32.60	灰 NS/7	良好	(粘土分析試料13) 底面：未焼
64	4区3	跡3	須恵器	壺	(5.9)	—	11.10	灰 NS/7	良好	
65	4区3	跡3	土師器	壺	(13.0)	—	32.90	浅黄焼 7.5YR8/4	良好	
66	4区3	跡3	土師器	壺	(11.6)	(8.6)	12.30	橙 7.5YR7/6	良好	

機軸 番号	地区	出土遺構・ 出土台名	種別	器種	計測値 (cm)			色調	焼成	表面調整・形態等特長	
					口径 (標準値)	底径 (標準値)	器高 (標準値)				
67	4区3	部5	土師器	碗?	—	—	(1.9)	黄緑	良好		
68	4区3	部5	土師器	皿	(8.9)	(7.4)	(1.2)	黄5B6.6	良好	底部：回転ヘラ切	
69	4区3	部5	土師器	皿	(8.8)	(8.6)	1.6	黄7.5B7.6	良好		
70	4区3	部5	土師器	皿	8.2	6.7	1.7	2.5黄1.黄緑 10YB6.3	良好		
71	4区3	部5	土師器	皿	8.1	4.4	1.9	2.5黄1.黄7.5B7.4	良好	底部：糸切	
72	4区3	部5	土師器	皿	8.1	7.0	1.5~ 1.7	2.5黄1.黄7.5B7.4	良好	底部：指オサエ	
73	4区3	部5	土師器	皿	(7.8)	(6.6)	(1.1)	黄7.5B7.6	良好	底部：回転ヘラ切	
74	4区3	部5	土師器	皿	7.6	6.6	1.3	2.5黄1.黄緑 10YB7.4	良好		
75	4区3	部5	土師器	皿	(7.5)	—	1.3	2.5黄1.黄7.5B7.4	良好		
76	4区3	部5	土師器	皿	—	—	(1.1)	2.5黄1.黄7.5B7.4	良好	底部：糸切	
77	4区3	部5	土師器	鉢	—	—	(3.1)	2.5黄1.黄緑 10YB7.4	良好	外・内面：ハケ	
78	4区3	部5	土師器	鉢	—	—	(2.3)	2.5黄1.黄7.5B7.4	良好	外・内面：ハケ	
79	4区3	部5	土師器	付付蓋	—	—	(4.3)	黄5B6.6	良好		
80	4区3	部5	土師器	付付蓋	—	—	(2.0)	黄緑 10YB6.4	良好		
81	4区3	部5	瓦質土器	罐	33.0	—	(4.0)	灰5B5.1	良好	内面：ハケ	
82	4区3	部5	瓦質土器	羽釜	—	—	(4.3)	2.5黄1.黄緑 10YB6.3	良好	外面：スス	
83	4区4	群分沈着面	土師器	皿	8.9	8.6	1.6	2.5黄1.黄7.5B7.4	良好	底部：ヘラ切	
84	2区1	柱穴1	土師器	皿	11.8	7.7	2.7	2.5黄1.黄7.5B7.4	良好	外・内面：指オサエ	
85	2区1	柱穴1	瓦質土器	羽釜	—	—	(2.0)	2.5黄1.黄緑 10YB5.6	不良		
86	2区2	D層	灰土器	杯	—	—	(6.6)	(1.3)	灰5B6.1	良好	底部：回転ヘラクスリ
87	2区4	D層	灰土器	杯	—	—	(6.1)	(1.4)	灰白 10YB8.1	良好	底部：回転ヘラ切
88	1区2	A層	灰土器	杯	17.6	—	—	(4.6)	灰白 10Y7.1	良好	
89	2区2	A~C層	灰土器	杯	—	—	(13.0)	(1.6)	灰白 2.5Y7.1	良好	
90	2区4	D層	灰土器	杯	—	—	(9.0)	(1.3)	灰白 8Y7	良好	
91	2区1	D層	灰土器	杯	—	—	(8.6)	(1.2)	灰白 10Y7.1	良好	
92	2区3	D層	灰土器	杯	—	—	7.8	(1.8)	灰白 8Y7	良好	
93	2区3	D層	灰土器	杯	—	—	8.1	(1.8)	灰白 8Y7	良好	
94	2区1	D層	灰土器	杯	—	—	7.6	(1.1)	灰 8Y6?	良好	
95	1区2	D層	灰土器	杯?	—	—	6.6	(3.9)	黄緑? 灰白 2.5Y7.1	良好	自然焼 内面：ハケ
96	1区2	D~E層	灰土器	杯蓋 (17.4)	—	—	(1.5)	灰 8Y6?	良好	外面：自然焼	
97	1区2	D層	灰土器	杯蓋	—	—	(1.1)	灰白 2.5Y7.1	良好	外面：自然焼	
98	2区1	D層	灰土器	杯蓋	—	—	(8.7)	灰 10YB1.1	良好		
99	2区2	A~C層	灰土器	杯蓋	—	—	(1.7)	灰白 2.5Y7.1	良好		
100	2区3	D層	灰土器	杯蓋	—	—	(1.5)	灰白 2.5Y7.1	良好		
101	2区4	D層	灰土器	杯	(8.7)	—	(2.8)	灰 8Y7	良好		
102	2区1	D層	灰土器	蓋口蓋	—	—	(5.2)	灰白 8Y7	良好	自然焼	
103	1区2	D層	土師器	蓋口蓋?	—	—	(11.7)	(5.1)	灰白 2.5Y7.1	良好	
104	2区1	D層	灰土器	蓋	—	—	(16.5)	(2.4)	灰白 2.5Y7.1	良好	
105	1区1	C層	灰土器	蓋?	—	—	9.0	(2.8)	灰白 8Y7	良好	
106	1区1	B層	灰土器	蓋?	—	—	(7.0)	灰 8Y6?	良好	外面：平行タタキ 内面：青黄緑	
107	2区4	P2	灰土器	碗 (15.4)	—	—	(2.8)	灰白 8Y7	良好	(新土分析試料7) 重ね焼	
108	2区2	P1	灰土器	碗	—	—	(2.2)	灰 10YB5.1	良好		
109	1区1	C~D層	灰土器	碗	—	—	(3.7)	灰白 5Y7.1	良好	重ね焼	
110	1区1	B層	灰土器	碗	—	—	5.6	(2.6)	灰白 10YB6.2	良好	(新土分析試料 16) 底部：糸切
111	2区3	D層	灰土器	碗	—	—	7.1	(2.9)	灰白 10Y7.1	良好	(新土分析試料 5) 底部：糸切
112	1区1	C~D層	灰土器	碗	—	—	5.5	(1.5)	灰 7.5B6.1	良好	(新土分析試料 15) 底部：糸切
113	2区2	A~C層	灰土器	碗	—	—	6.8	(1.6)	灰白 10Y7.1	良好	(新土分析試料 20) 底部：糸切
114	2区3	D層	灰土器	碗	—	—	6.0	(1.1)	灰白 5Y7.1	良好	(新土分析試料 6) 底部：糸切
115	1区1	B層	灰土器	高台付杯	—	—	(1.4)	灰白 2.5Y7.1	良好	自然焼 底部：回転ヘラクスリ	
116	2区1	A層	灰土器	壺	—	—	(5.5)	灰 8Y6?	良好	(新土分析試料 19)	
117	1区1	C層	灰土器	鉢 (27.6)	—	—	(5.8)	灰白 5Y7.1	良好	(新土分析試料 27)	
118	2区1	D層	土師器	鉢 (11.9)	(8.1)	(2.3)	黄緑 2.5Y7.4	良好	底部：回転ヘラクスリ		
119	2区1	B層	土師器	鉢	—	—	6.7	(1.3)	2.5黄1.黄7.5B7.4	良好	底部：糸切・指切
120	2区2	C層	土師器	皿	—	—	5.0	(1.7)	黄 5YB6.6	良好	
121	2区2	C層	土師器	皿	—	—	5.4	(1.1)	黄 5YB6.6	良好	底部：回転ヘラ切
122	2区2	A~C層	土師器	皿	—	—	4.2	(1.1)	2.5黄1.黄緑 10YB6.4	良好	底部：回転ヘラ切
123	2区4	B層	土師器	付付蓋	—	—	3.1	(2.2)	黄7.5B7.6	良好	
124	1区2	C~D層	土師器	高杯	—	—	(3.2)	2.5黄1.黄緑 10YB7.3	良好	内面：しぼり?	
125	2区1	D層	土師器	甕 (26.3)	—	—	(4.7)	2.5黄1.黄7.5B7.4	良好	内面：ハケ・指オサエ	
126	1区2	D層	土師器	甕	—	—	(2.4)	黄7.5B6.6	良好		
127	1区2	D層	土師器	甕	—	—	(4.0)	明赤焼 5YB5.6	良好	外面：ハケ 内面：指オサエ・ハケ	
128	2区1	D層	土師器	甕	—	—	(4.4)	黄7.5B6.6	良好	内面：ハケ	
129	1区2	D層	土師器	甕	—	—	(8.2)	黄7.5B6.6	良好	内面：ヘラタタキ	
130	2区1	D層	土師器	甕	—	—	(3.1)	明赤焼 5YB5.6	良好	指オサエ	
131	1区2	D層	土師器	甕	—	—	(3.9)	明赤焼 5YB5.8	良好	外面：指オサエ 内面：ハケ?	
132	2区2	A~C層	黄銅焼	壺	—	—	(4.3)	2.5黄1.黄緑 2.5YB5.4	良好	ヘラタタキ・自然焼	
133	2区4	B層	黄銅焼	鉢鉢	—	—	(5.4)	灰白 2.5Y7.1	良好	指上目・自然焼	
134	2区4	B層	黄銅焼	鉢鉢	—	—	(4.9)	灰焼 2.5YB6.2	良好	指上目・自然焼	
135	1区1	B~C層	黄銅焼	鉢鉢	—	—	(4.2)	灰黄焼 10YB5.2	良好	指上目・重ね焼	
136	1区1	A層	黄銅焼	鉢鉢	—	—	(4.9)	灰焼 2.5YB5.2	良好	指上目・自然焼	
137	2区2	B層	青銅	甕	—	—	(2.3)	灰オリーブ 2.5YB5.2	良好	無輪	
138	2区4	B層	瓦質土器	大鉢	—	—	(13.2)	2.5黄1.黄緑 10YB7.3	不良		

掲載 番号	地区	出土遺構・ 出土包含層	種別	器種	計測値 (cm)			色調	構成	表面調整・形態等特長
					口径 (最大値)	底径 (最大値)	器高 (最大値)			
139	2区5	C層	須恵器	杯	(11.9)	—	(1.2)	黄赤 2.5YR/3	不良	底面：回転ヘラケズリ
140	2区5	P 9	須恵器	杯	—	(11.0)	(1.2)	灰黒	良好	底面：ヘラ削
141	2区8	B層	須恵器	杯?	—	8.0	(1.2)	にじみ黄緑 10YR6/4	良好	底面：回転ヘラ削
142	2区5	C層	須恵器	杯	—	9.80	(1.9)	灰白 5Y7/1	良好	底面：回転ヘラケズリ
143	2区2	B層	須恵器	杯	—	6.60	(1.2)	灰白 N7	良好	底面：回転ヘラケズリ
144	2区5	C層	須恵器	杯	—	8.60	(1.2)	灰黄 2.5Y7/2	不良	底面：ヘラ削
145	2区5	C層	須恵器	杯	—	—	(1.8)	灰白 2.5Y7/1	良好	底面：回転ヘラケズリ
146	2区5	C層	須恵器	杯	—	8.00	(1.7)	灰黒	良好	
147	2区5	C層	須恵器	杯	—	(11.1)	(1.8)	灰白 5Y7/1	良好	
148	2区6-7	C～D層	須恵器	杯	—	8.4	(1.0)	灰白 N7	良好	
149	2区5	C～D層	須恵器	杯	—	9.0	(1.4)	灰 10Y6/1	良好	底面：回転ヘラケズリ
150	2区5	C～D層	須恵器	杯	—	9.4	(1.4)	灰黒	良好	
151	2区5	D層	須恵器	杯	—	9.7	(1.1)	灰黄緑 10YR4/2	不良	
152	2区5	C～D層	須恵器	杯	—	(10.0)	(2.5)	灰黒	良好	自然釉
153	3区1	B層	須恵器	杯	—	8.2	(2.7)	灰白 10Y7/1	良好	
154	2区5	P 8	須恵器	杯	—	6.50	(1.1)	灰 10Y6/1	良好	
155	2区5	D層	須恵器	杯	—	8.0	(1.9)	灰白 N7	良好	
156	2区5	C～D層	須恵器	杯	—	9.60	(1.2)	灰 7.5Y6/1	不良	
157	2区6	C層	土師器	杯	—	—	(2.8)	黄赤緑 10YR8/4	良好	
158	2区5	C層	須恵器	杯	—	—	(2.1)	黄赤 2.5Y6/1	良好	
159	2区5	C層	須恵器	杯	(12.5)	—	(3.1)	灰黒	良好	
160	2区5	P 6	須恵器	皿	—	—	(2.1)	灰白 N7	彫線	
161	2区5	C層	須恵器	皿	—	(12.6)	(1.2)	灰黒	良好	
162	2区5	C層	須恵器	杯蓋	(14.0)	—	(2.1)	灰 7.5Y5/1	良好	底面：回転ヘラケズリ
163	2区6	D層	須恵器	杯蓋	—	—	(1.8)	灰 N5	良好	
164	2区6	D層	須恵器	杯蓋	(16.0)	—	(1.2)	灰白 5Y7/1	良好	
165	2区5	D層	須恵器	杯蓋	(13.0)	—	(1.0)	灰白 N7	良好	
166	2区5	C層	須恵器	杯蓋	—	—	(1.4)	灰 7.5Y5/1	良好	
167	2区5	C層	須恵器	長柄蓋	—	—	(1.8)	灰白 2.5YR/1	劣劣 不良	自然釉
168	2区5	C層	須恵器	蓋?	(15.0)	—	(1.6)	灰 10Y6/1	良好	
169	2区5	C層	須恵器	—	(12.1)	—	(1.8)	灰白 7.5Y7/1	不良	
170	2区5	D層	土師器	高杯	—	—	(1.1)	明黄緑 10YR7/6	良好	
171	2区7	P 21	黒色土師	杯	—	—	(2.0)	橙 7.5YR7/6	良好	内面：ミナギ
172	2区5	C層	土師器	壺	—	—	(2.9)	灰黄 2.5Y6/2	良好	
173	2区5	D層	土師器	壺	(18.0)	—	(1.6)	橙 5YR6/6	良好	
174	2区7	C層	土師器	杯	—	4.7	(1.2)	橙 2.5YR6/6	良好	底面：糸削
175	2区6	P 10	土師器	杯	—	(8.2)	(1.3)	にじみ橙 7.5YR7/3	良好	底面：糸削
176	3区2	B層	土師器	杯	—	4.6	(1.5)	黄赤 2.5Y6/1	良好	底面：糸削
177	2区7	C層	土師器	壺	(32.1)	—	(4.9)	明赤橙 5YR5/6	良好	外面：タタキ・スス
178	2区8	B層	土師器	皿	(8.1)	(3.6)	(2.0)	にじみ橙 7.5YR6/4	良好	底面：糸削
179	2区5	P 3	土師器	皿	8.6	4.1	1.9 2.5	明黄緑 10YR7/6	良好	外形：糸削
180	2区6	P 9	土師器	皿	—	(5.0)	(1.0)	にじみ黄緑 10YR6/4	良好	底面：糸削
181	2区5	P 4	土師器	皿	(7.9)	(4.3)	(2.5)	橙 5YR7/6	良好	
182	2区5	P 8	土師器	皿	(8.8)	—	(1.5)	橙 7.5YR7/6	良好	
183	2区6	C層	須恵器	碗	—	(5.5)	(3.0)	灰白 N7	良好	(粘土分析試料 10)
184	2区7	A～B層	須恵器	碗	—	6.7	(1.6)	—	良好	(粘土分析試料 11) 底面：糸削
185	2区8	C層	須恵器	碗	—	6.0	(2.3)	灰白 10Y7/1	良好	(粘土分析試料 20) 底面：糸削
186	2区6-7	C～D層	須恵器	碗	—	(5.0)	(1.5)	灰白 N7	良好	(粘土分析試料 9) 底面：糸削
187	2区8	—	須恵器	碗	—	(3.0)	(1.4)	灰白 7.5Y7/1	良好	底面：糸削
188	2区6-7	C～D層	須恵器	碗	—	(5.1)	(1.0)	灰白 2.5Y7/1	良好	(粘土分析試料 8) 底面：糸削
189	2区6	D層	須恵器	碗	—	5.6	(1.7)	灰 5Y6/1	良好	(粘土分析試料 22) 底面：糸削
190	2区5	D層	須恵器	碗	—	—	(2.4)	灰 10Y6/1	良好	
191	2区5	C層	須恵器	碗	—	—	(2.9)	緑灰 7.5Y5/1	良好	
192	2区6-7	C～D層	須恵器	碗	—	—	(2.2)	灰黒	良好	(粘土分析試料 21) 重丸地
193	2区5	P 7	須恵器	皿	6.30	—	(1.2)	灰白 5Y7/1	良好	重丸地
194	2区5	P 5	須恵器	腹立鉢	(11.2)	—	(3.1)	灰 5Y6/1	良好	重丸地
195	2区6	P 10	備前焼	盃	—	—	(5.8)	にじみ赤橙 5YR5/3	良好	玉縁・自然釉
196	2区5	P 8	備前焼	椀鉢	—	—	(5.7)	明赤橙 2.5YR5/6	良好	指オキエ・自然釉
197	2区6	B層	備前焼	椀鉢	—	—	(2.8)	灰黄緑 10YR5/2	良好	割し目・自然釉
198	3区2	B層	備前焼	椀鉢	—	—	(5.7)	にじみ赤橙 5YR4/3	良好	
199	2区7	P 11	備前焼	椀鉢	(28.8)	—	(6.6)	にじみ赤橙 5YR5/3	良好	片目・割し目
200	3区1	B層	備前焼	椀鉢	—	(14.2)	(3.5)	にじみ橙 7.5YR5/3	良好	外周：指オキエ 内面：割し目
201	2区8	B層	備前焼	椀鉢	—	—	(5.8)	赤橙 10R5/3	良好	
202	3区1	B層	備前焼	椀鉢	—	—	(4.0)	灰橙 7.5YR5/2	良好	片目
203	2区8	A層	備前焼	椀鉢	—	—	(4.3)	にじみ橙 2.5YR6/4	良好	
204	2区5	B層	青磁	碗	—	—	(3.2)	釉薬：灰赤の黄赤を帯びた緑 8YR7/3 薬種：灰白 5YR7/1	彫線 彫線	
205	3区2	B層	天目茶碗	碗	—	—	(3.3)	釉薬：黒 7.0YR2/1 薬種：灰白 10YR8/2	彫線 彫線 彫線	
206	2区8	P 28	瓦質土師	碗	—	—	(1.7)	にじみ黄緑 10YR6/4	良好	
207	2区5	A層	瓦質土師	羽釜	(13.0)	—	(2.8)	灰白 5YR7/2	良好	
208	4区1	A～C層	須恵器	杯	—	(11.0)	(1.6)	にじみ黄緑 10YR7/2	良好	底面：回転ヘラ削
209	4区1	B層	須恵器	杯	—	(9.0)	(1.8)	灰 10Y6/1	良好	
210	4区2	P 14	須恵器	杯	(12.8)	(10.7)	(3.8)	灰白 2.5Y7/1	良好	

掲載 番号	地区	出土遺構・ 出土台倉等	種別	器種	計測値 (cm)			色調	構成	表面調整・形態等特長
					口径 (標準)	底径 (標準)	高さ (標準)			
211	4区3	B層	煎煮器	杯	—	(8.8)	(1.2)	灰M6/	良好	
212	4区3	C層	煎煮器	杯	—	7.5	(1.8)	灰M6/	良好	
213	4区3	C層	煎煮器	杯	—	7.8	(1.3)	褐色 10YR6/3	良好	底部：凹陥ヘラ切
214	4区3	C→D層	煎煮器	杯	—	8.6	(1.4)	灰7.5Y5/1	良好	
215	4区3	B層	煎煮器	杯	—	(9.1)	(1.9)	灰M6/	良好	
216	4区2	D層	煎煮器	杯蓋	—	(1.5)	1.5-1.5黄緑 10YR7/2	良好		
217	4区2	C→D層	煎煮器	杯蓋 (1.5,2)	—	(2.0)	灰白N7/	良好		
218	4区4	C層	煎煮器	杯蓋 (21.6)	—	(2.0)	灰白2.5Y7/1	良好		
219	4区4	D層	煎煮器	深口皿 11.1	—	(6.8)	灰白2.5Y7/1	良好		
220	4区4	C層	煎煮器	小皿	—	(4.7)	灰白N7/	良好		
221	4区4	C層	煎煮器	小皿	—	(3.8)	灰M6/	良好		
222	4区3	C層	煎煮器	短形皿 (12.2)	—	(2.6)	灰白2.5Y7/1	良好	重ね地	
223	4区3	C→D層	煎煮器	磁ウツモノ	—	(3.0)	灰M6/	良好		
224	4区3	B層	煎煮器	壺?	—	(4.1)	黒褐色 7.5YR3/1	不良	外面：平行タタキ	
225	4区3	C→D層	煎煮器	壺	—	(2.3)	灰M6/	良好		
226	4区3	C層	煎煮器	壺	—	(7.7)	浅黄緑 10YR6/2	良好	外面：格子タタキ	
227	4区4	P 20	煎煮器	壺	—	(4.8)	灰白2.5Y7/1	良好	外面：平行タタキ目 内面：青黄緑	
228	4区1	D層	煎煮器	壺	—	(12.0)	(2.7)	黄緑2.5YR3/1	良好	自然釉
229	4区4	C層	土師器	杯 (15.8)	(13.1)	(2.8)	1.5-1.5黄緑 7.5YR6/4	良好	黒泥	
230	4区3	B層	土師器	杯 14.1	—	(2.6)	1.5-1.5黄緑 7.5YR6/4	良好		
231	4区1	B層	土師器	杯	(8.0)	(2.0)	浅黄緑 10YR8/4	良好	底部：凹陥ヘラケズリ	
232	4区3	B層	土師器	杯 13.7	—	(2.5)	1.5-1.5黄緑 7.5YR7/4	良好	薬鉢付	
233	4区4	C層	土師器	皿 14.0	9.0	1.4	橙 5YR6/6	良好	内面：スス	
234	4区4	B層	土師器	皿 (14.0)	(9.4)	(1.9)	明赤帯 5YR5/6	良好	指オサユ・ナデ	
235	4区3	C層	土師器	皿 14.0	(8.2)	2.6	明赤帯 5YR5/6	良好	完形 底部：指オサユ・飯目	
236	4区4	C層	土師器	皿 19.8	8.2	1.6	1.5-1.5黄緑 10YR7/4	良好	底部：ヘラ切	
237	4区3	P 16	土師器	皿 (9.8)	(7.1)	(1.5)	1.5-1.5黄緑 10YR7/4	良好	底部：飯目	
238	4区3	A層	土師器	皿 9.7	8.5	1.7	1.5-1.5黄緑 7.5YR7/4	良好	内面：スス	
239	4区3	B層	土師器	皿 (9.7)	—	(1.3)	1.5-1.5黄緑 7.5YR7/4	良好		
240	4区4	C層	土師器	皿 9.7	7.8	1.3	橙 7.5YR6/6	良好		
241	4区4	B層	土師器	皿 9.5	8.0	—	橙 5YR6/8	良好	指オサユ・ナデ	
242	4区3	B層	土師器	皿 (9.5)	(5.3)	(1.6)	橙 7.5YR6/6	良好		
243	4区1	P 7	土師器	皿 (9.4)	(7.5)	(2.2)	橙 7.5YR6/6	良好	底部：糸切	
244	4区3	B層	土師器	皿 (9.3)	(8.8)	(1.6)	明赤帯 5YR5/6	良好		
245	4区3	C層	土師器	皿 9.2	7.8	1.7	1.5-1.5黄緑 7.5YR7/4	良好		
246	4区3	B層	土師器	皿 9.0	6.9	1.7	橙 5YR6/8	良好		
247	4区4	C層	土師器	皿 9.0	7.1	1.4	橙 5YR6/6	良好		
248	4区4	B層	土師器	皿 (9.0)	(7.0)	1.5	1.5-1.5黄緑 10YR7/2	良好	ナデ	
249	4区3	C層	土師器	皿 (9.0)	(7.0)	(1.3)	1.5-1.5黄緑 7.5YR7/4	良好		
250	4区4	C層	土師器	皿 (9.0)	7.7	1.3	明赤帯 5YR5/6	良好	底部：糸切・飯目	
251	4区4	C層	土師器	皿 8.8	7.4	1.5	明帯 7.5Y5/6	良好		
252	4区4	B層	土師器	皿 8.8	5.0	1.3	明赤帯 5YR5/8	良好	指オサユ・ナデ	
253	4区4	B層	土師器	皿 8.8	7.7	1.3	1.5-1.5黄緑 7.5YR6/4	良好	底部：指オサユ・ナデ	
254	4区3	P 26	土師器	皿 8.8	7.7	(1.7)	1.5-1.5黄緑 7.5YR7/4	良好	底部：糸切	
255	4区4	P 19	土師器	皿 8.8	6.3	1.6	1.5-1.5黄緑 10YR6/3	良好	底部：飯目	
256	4区3・4	C層	土師器	皿 (8.6)	(5.8)	(1.4)	浅黄緑 7.5YR8/4	良好		
257	4区3	C層	土師器	皿 (8.6)	7.0	(1.4)	1.5-1.5黄緑 7.5YR7/4	良好	底部：糸切・飯目	
258	4区4	P 19	土師器	皿 (8.6)	(5.9)	(1.6)	1.5-1.5黄緑 7.5YR3/4	良好		
259	4区3	C層	土師器	皿 (8.6)	(8.0)	(1.3)	1.5-1.5黄緑 7.5YR6/4	良好	底部：糸切	
260	4区4	B層	土師器	皿 (8.5)	(6.9)	1.0	1.5-1.5黄緑 7.5YR7/4	良好	指オサユ・ナデ	
261	4区3	C層	土師器	皿 (8.5)	(6.8)	(1.6)	浅黄緑 7.5YR8/4	良好	底部：ヘラ切	
262	4区4	C層	土師器	皿 8.4	7.2	1.6	橙 7.5YR7/6	良好	納俵 底部：糸切	
263	4区4	C層	土師器	皿 8.4	6.6	1.2	赤褐色 5YR4/8	良好	内面：ナデ 底部：糸切	
264	4区4	B層	土師器	皿 8.4	6.8	1.3	橙 5YR6/6	良好	指オサユ・ナデ	
265	4区4	C層	土師器	皿 8.3	5.8	1.6	明赤帯 5YR5/6	良好		
266	4区4	C層	土師器	皿 8.3	6.6	1.4	明赤帯 5YR5/6	良好		
267	4区4	C層	土師器	皿 (8.0)	(6.1)	1.5	1.5-1.5黄緑 10YR7/3	良好	底部：糸切	
268	4区4	B層	土師器	皿 7.6	7.6	1.6	黄緑 7.5YR4/2	良好	ナデ	
269	4区4	C層	土師器	皿 7.8	4.4	1.3	1.5-1.5黄緑 10YR7/4	良好		
270	4区4	C層	土師器	皿 7.6	5.8	1.2	浅黄緑 10YR8/4	良好	底部：糸切	
271	4区4	C層	土師器	皿 7.8	6.0	1.1	明帯 7.5YR5/6	良好	内面：ナデ 底部：糸切	
272	4区4	B層	土師器	皿 7.5	6.6	1.6	1.5-1.5黄緑 7.5YR7/4	良好	指オサユ・ナデ	
273	4区4	C層	土師器	皿 (7.5)	(6.4)	(1.2)	明赤帯 5YR5/6	良好		
274	4区4	B層	土師器	皿 (7.3)	(6.0)	(1.7)	1.5-1.5黄緑 7.5YR6/4	良好		
275	4区4	C層	土師器	皿 (7.3)	(3.5)	(1.4)	橙 5YR6/6	良好		
276	4区4	C層	土師器	皿 7.2	5.4	1.2	明帯 7.5YR5/6	良好	内面：ナデ 底部：飯目	
277	4区3・4	C層	土師器	皿 (7.1)	—	(1.4)	明赤帯 5YR5/6	良好		
278	4区4	C層	土師器	皿 (7.7)	(2.6)	(2.2)	橙 5YR7/6	良好		
279	4区4	C層	土師器	皿 (8.0)	(4.4)	2.5	橙 7.5YR7/6	良好	底部：糸切	
280	4区3	D層	煎煮器	壺?	—	(1.6)	灰7.5Y6/1	良好		
281	4区4	A層	土師器	壺	—	(1.9)	橙 7.5YR7/6	良好		
282	4区4	C層	土師器	壺	—	(5.0)	明帯 5YR5/6	良好	外面：タタキ	
283	4区4	C層	土師器	壺	—	(3.2)	黒7.5YR2/1	良好	外面：タタキ	
284	4区4	C層	土師器	壺	—	(3.7)	黒10YR2/1	良好	外面：タタキ	
285	4区4	—	土師器	壺	—	(5.0)	橙 5YR6/6	良好	外面：平行タタキ目 内面：指オサユ	
286	4区4	C層	土師器	壺 (35.9)	—	(5.2)	橙 7.5YR6/6	良好	外面：指オサユ 内面：ハケ	
287	4区4	C層	土師器	壺	—	(3.8)	1.5-1.5黄緑 10YR6/4	良好	外面：指オサユ 内面：ハケ	
288	4区4	B層	土師器	壺	—	(2.7)	1.5-1.5黄緑 10YR7/3	良好	外面：スス 内面：ハケ目	

掲載番号	地区	出土遺構、出土品名	種別	器種	計測値 (cm)	色調	構成	表面調整・形態等特長	
					口径 (標準値)	底径 (標準値)	器高 (標準値)		
289	4区4	A層	土師器	甕	—	—	(2.0)	黄灰 2.577/1	良好 外・内面：ハケ
290	4区1	D層	埴土器	鉢	(14.1)	—	(5.9)	2.554・明7.5787/4	良好 指オケ
291	4区2	D層	埴土器	鉢	(9.7)	—	(7.5)	灰黄緑 10Y85/2	良好 布目肌・指オケ
292	4区4	D層	埴土器	鉢	—	—	(5.5)	2.554・明7.5786/4	良好 外・内面：指オケ
293	4区1・2	D→E層	埴土器	鉢	(9.7)	—	(3.8)	2.554・赤褐 5Y85/4	良好 指オケ
294	4区2	A層	埴土器	鉢	(9.4)	—	(4.7)	2.554・赤褐 5Y85/4	良好 外面・指オケ
295	4区1・2	—	埴土器	鉢	(9.7)	—	(3.4)	明赤褐 2.5785/6	良好 指オケ
296	4区4	C層	土師器	甕	(20.6)	11.0	(6.2)	黄 5Y86/6	良好
297	4区4	C→D層	土師器	甕	—	—	(1.8)	明赤褐 5Y85/6	良好 外面・指オケ
298	4区4	B層	土師器	鉢	(9.6)	10.6	(3.8)	灰黄緑 10Y86/2	良好 指オケ
299	4区3	B層	須恵器	甕	—	(8.1)	(1.9)	灰黄 2.577/2	良好
300	4区3	D層	須恵器	甕	—	(7.3)	(1.9)	灰 5Y86/7	良好 (粘土分析試料14) 底面：赤褐色
301	4区3	C層	須恵器	甕	—	5.2	(2.0)	灰黄 2.577/2	良好 底面：赤褐色
302	4区3	C層	須恵器	甕	—	6.2	(1.5)	灰 5Y86/7	良好 (粘土分析試料25) 底面：赤褐色
303	4区4	C層	須恵器	甕	—	5.4	(1.5)	灰 5Y86/7	良好 (粘土分析試料30) 内面：ナメ 底面：赤褐色
304	4区3	B層	須恵器	甕	—	4.7	(2.4)	灰 5Y86/7	良好 (粘土分析試料12) 底面：赤褐色
305	4区4	C層	須恵器	甕	—	5.9	(2.8)	灰黄 2.576/2	良好 底面：ハケ切
306	4区3	C層	須恵器	甕	—	5.8	(2.0)	灰白 2.577/1	良好 底面：赤褐色
307	4区4	C層	須恵器	甕	—	5.8	(2.2)	灰 5Y85/1	良好 底面：赤褐色
308	4区4	B層	須恵器	甕	—	(8.0)	(1.8)	灰白 2.577/1	良好 底面：ハケ切
309	4区2	B層	須恵器	甕	—	(5.0)	(1.5)	灰白 2.577/1	良好 (粘土分析試料20)
310	4区4	C層	須恵器	甕	—	5.0	(1.9)	2.554・黄緑 10Y87/3	良好 内面：ナメ 底面：赤褐色
311	4区3	B層	須恵器	甕	—	6.0	(2.3)	2.554・黄緑 10Y87/2	良好 底面：赤褐色
312	4区4	P 22	須恵器	甕	(12.2)	—	(2.8)	黄灰 2.576/1	良好
313	4区4	C層	須恵器	甕	—	(7.7)	(1.7)	黄灰 2.576/1	良好 底面：赤褐色
314	4区3	D層	須恵器	甕	—	6.0	(2.1)	灰白 2.578/2	良好 底面：赤褐色
315	4区4	C層	須恵器	甕	—	5.2	(1.9)	灰白 10Y87/1	良好 底面：赤褐色
316	4区4	C層	須恵器	甕	14.8	—	(3.0)	灰白 5Y7/1	良好 外面：重ね地
317	4区4	B層	須恵器	甕	15.1	—	(2.6)	灰白 5Y7/1	良好
318	4区4	C層	須恵器	甕	(15.6)	—	(3.2)	灰白 2.5787/1	良好 (粘土分析試料28) 重ね地・自然釉
319	4区4	C層	須恵器	甕	—	—	(3.8)	灰 5Y86/7	良好 (粘土分析試料29)
320	4区4	C層	須恵器	甕	—	—	(2.0)	灰白 2.578/2	不良
321	4区4	C層	須恵器	鉢	—	(11.6)	(2.5)	灰白 10Y87/1	良好
322	4区3	B層	須恵器	椀鉢	(17.1)	—	(1.8)	2.554・黄 2.5786/4	不良
323	4区4	B層	須恵器	椀鉢	—	—	(1.9)	灰白 5Y7/1	良好
324	4区4	C層	須恵器	椀鉢	—	—	(1.9)	灰 5Y86/7	良好 重ね地・自然釉
325	4区1	B層	須恵器	椀鉢	—	—	(2.0)	灰白 5Y7/1	良好 (粘土分析試料1) 重ね地
326	4区4	P 17	須恵器	椀鉢	—	—	(4.0)	灰 5Y86/1	良好 (粘土分析試料2) 自然釉
327	4区4	B層	須恵器	椀鉢	—	—	(4.7)	黄灰 2.5786/1	良好 重ね地
328	4区4	B層	須恵器	椀鉢	—	—	(3.7)	灰黄 2.576/2	良好 (粘土分析試料2) 重ね地
329	4区1	B層	須恵器	椀鉢	(24.7)	—	(3.6)	灰 5Y86/7	良好
330	4区4	B層	須恵器	椀鉢	—	—	(3.3)	黄灰 2.576/1	良好
331	4区3	C層	須恵器	甕	(9.1)	—	(1.3)	灰白 5Y7/1	良好
332	4区4	C層	須恵器	甕	(8.8)	(6.7)	(2.0)	灰 5Y86/7	良好 重ね地 底面：赤褐色?
333	4区4	C層	須恵器	甕	8.7	5.7	1.4	灰白 5Y7/1	良好 重ね地 底面：ハケ切
334	4区4	C層	須恵器	甕	8.5	8.6	(1.9)	黄灰 2.576/1	良好 内面：赤色顔料
335	4区4	C層	須恵器	甕	8.2	5.7	1.5	灰 5Y86/7	良好 重ね地
336	4区4	C層	須恵器	甕	8.0	(4.0)	(1.6)	灰黄 2.577/2	良好 底面：赤褐色
337	4区4	C層	須恵器	甕	7.8	4.8	1.4	灰白 10Y87/1	良好 重ね地 底面：赤褐色
338	4区4	C層	須恵器	甕	7.8	4.6	1.5	灰白 2.577/1	良好 (粘土分析試料18) 内面：布ナメ
339	4区4	C層	須恵器	甕	7.6	4.6	1.3	灰黄 2.577/2	良好 底面：赤褐色
340	4区3	B層	須恵器	甕	7.6	4.5	1.5	青灰 5Y85/1	良好 内面：布ナメ 底面：赤褐色
341	4区4	C層	須恵器	甕	(7.4)	5.4	1.4	灰白 5Y7/1	良好 重ね地 底面：赤褐色
342	4区4	B層	須恵器	甕	(7.8)	—	(1.2)	灰白 5Y7/1	良好
343	4区4	C層	須恵器	甕	—	4.6	(1.0)	灰白 10Y87/1	良好 (粘土分析試料17) 底面：凹削→ハケ切
344	4区4	B層	須恵器	甕	7.4	—	(1.4)	灰白 2.577/1	良好
345	4区4	A層	須恵器	小皿	—	4.3	(2.3)	灰白 5Y7/1	良好 底面：凹削→ハケ切
346	4区4	B層	須恵器	甕	—	(32.0)	(7.7)	2.554・黄緑 2.5785/4	良好
347	4区3	B層	須恵器	福鉢	—	—	(4.9)	灰 5Y86/7	良好 削じり・自然釉
348	4区4	B層	須恵器	福鉢	—	—	(5.6)	浅黄緑 2.5788/6	良好 削じり・重ね地
349	4区4	B層	須恵器	福鉢	—	—	(7.0)	灰赤 2.5784/2	良好 内面：削じり
350	4区4	C層	青磁	甕	—	—	(3.1)	釉薬：灰白 2.578/2 素地：灰白 5Y7/1 文様：灰 2.576/1	聖徳 施輪 内面：文様
351	4区4	C層	青磁	甕	—	—	(2.3)	釉薬：灰ナメ 素地：灰白 5Y7/1 文様：灰 2.576/1	聖徳 施輪 見込み部：文様
352	4区3	B層	青磁	甕	12.6	6.8	2.5	釉薬：灰白 2.578/2 素地：灰白 5Y7/1	聖徳 施輪・底面外面磨削 内面：観点損文
353	4区3	C層	青磁	甕	—	5.8	(2.2)	釉薬：ナメ 素地：灰黄 2.577/2	良好 施輪・高台部分一底内面磨削 見込み部：文様
354	4区4	B層	青磁	甕	—	(7.7)	(4.1)	釉薬：ナメ 素地：灰白 2.576/1 文様：灰白 5Y8/1	聖徳 施輪 外面：蓮弁文
355	4区4	C層	青磁	甕	—	4.4	(2.5)	釉薬：灰 19Y5/1 素地：灰白 5Y87/1	聖徳 施輪 底内面：磨削跡
356	4区4	A層	青磁	甕	—	—	(3.1)	釉薬：明色 素地：明色 磨び跡 16G7/2.5 素地：灰白 2.578/1	聖徳 施輪 外面：蓮弁文
357	4区4	B層	青磁	甕	—	(9.7)	(2.4)	釉薬：明色 素地：明色 磨び跡 16G7/2.5 素地：灰白 5Y8/1	聖徳
358	4区4	B層	青白磁	合子	—	(4.8)	(0.8)	釉薬：こすり跡 素地：青 2B8.5/2 素地：灰白 5Y8/1	聖徳 施輪 上・側面に文様

掲載 番号	地区	出土遺構・ 出土台吉層	種別	器種	計測値 (cm)			色調	構成	表面調整・形態等特徴
					口径 (標準値)	底径 (標準値)	器高 (標準値)			
339	4区2	B層	青白磁	合子	(4.8)	—	(1.4)	釉薬：灰白 10Y7/1 裏地：灰白 10Y8/2	彫刻 輪縁・口先子	
369	4区4	C層	白磁	碗	14.5	—	(4.0)	釉薬：透明 裏地：灰白 2.5Y7/1 輪縁：灰黄 2.5Y7/2	彫刻 輪縁・玉縁	
361	4区3	C層	白磁	碗	—	6.0	(2.2)	裏地：灰白 2.5Y8/2	良好 輪縁 底面磨削	
362	4区4	C層	白磁	皿	—	(6.4)	(1.9)	釉薬：灰オリーブ 5Y6/2 裏地：灰白 5Y7/1 輪縁：透明	彫刻 輪縁・底面磨削 長込内面：文様	
363	4区2	B層	青花小?	碗	—	—	(2.6)	裏地：灰白 5Y8/1 文様：睡い沢みの青 10B5.5/5.5 輪縁：黒黄 5Y8/2	彫刻 輪縁 内面：磨削 2条	
364	4区4	B層	大目基陶	碗	—	—	(3.5)	裏地：にぶい黄緑 10Y9/2	彫刻	
365	4区4	B層	瓦質土器	羽釜	—	—	(2.6)	灰 5/5	良好 内面：ハケ	
366	4区4	B層	瓦質土器	羽釜	—	—	(3.9)	灰黄褐 10Y8/2	良好	
367	4区4	C層	瓦質土器	羽釜	—	—	(7.0)	黒褐 2.5Y3/1	良好 外・内面：指オサエ	
368	4区4	C層	瓦質土器	羽釜	—	—	(4.3)	黄灰 2.5Y4/1	不心	
369	4区4	C層	瓦質土器	羽釜	—	—	(3.9)	黒 10Y8/2/1	不心	
370	4区4	C層	瓦質土器	鉢	(31.9)	—	(4.0)	灰 5/5	良好 外面：指オサエ・スス	
371	4区4	C層	瓦質土器	鉢	(28.0)	—	(3.3)	黄灰 2.5Y5/1	良好 外面：指オサエ・スス	
372	4区4	C層	瓦質土器	鉢	(29.6)	—	(2.5)	曜灰 5/2	良好 外面：指オサエ	
373	4区4	C層	瓦質土器	鉢	(36.0)	—	(3.0)	灰白 2.5Y6/1	良好 外面：指オサエ・スス	
374	4区4	B層	瓦質土器	鉢	26.4	—	(3.5)	浅黄褐 10Y8/3	良好 外面：指オサエ 内面：ヨコハケ	
375	4区4	B層	瓦質土器	鉢	(27.5)	—	(3.1)	灰 5/5	良好 外面：指オサエ	
376	4区3	B層	瓦質土器	鉢	—	—	(3.0)	にぶい黄緑 10Y9/2	良好 外面：指オサエ・スス 内面：ハケ目	
377	4区4	B層	瓦質土器	鉢	—	—	(2.5)	灰 5Y6/1	良好 内面：ハケ	
378	4区4	C層	瓦質土器	鉢	—	—	(3.0)	灰白 10Y8/2	良好 外面：指オサエ	
379	4区3	B層	瓦質土器	鉢	—	—	(4.4)	灰白 2.5Y7/1	良好	
380	4区3	C層	瓦質土器	鉢	—	—	(3.2)	曜 5Y8/6	良好	
381	4区4	B層	瓦質土器	鉢	—	—	(3.5)	焼 7.5Y8/4	良好	
382	4区4	B層	瓦	平瓦	—	—	—	灰白 2.5Y7/1	良好 凹面：布目 凸面：タタキ目	
383	4区4	C層	瓦	平瓦	—	—	—	灰 5/5	良好 凹面：布目 凸面：タタキ目	
384	立会T2	—	直巻器	碗	—	—	(2.4)	灰 5/5	良好 斜打調整	
385	立会T2	C層	青磁	梅花蓋	—	—	(2.5)	釉薬：灰オリーブ 5Y6/2 裏地：黄灰 10Y5/1	彫刻 輪縁	
386	立会T1	C層	瓦質土器	羽釜	—	—	(5.3)	灰 5/4	良好 外・内面：指オサエ	
387	立会T1	D-E層	瓦	平瓦	—	—	—	灰白 2.5Y7/1	良好 凹面：布目 凸面：タタキ目	

木製品一覽

掲載 番号	地区	出土遺構・ 出土台吉層	種別	器種	計測値 (cm)			色調	備考
					口径 (標準値)	底径 (標準値)	器高 (標準値)		
W1	4区4	P4	漆器	風穴笠筒	—	(6.0)	(2.2)	黄黒 5/2/1	竹製風穴笠筒の内面に塗布された木。黒?

土製品一覽

掲載 番号	地区	出土遺構・ 出土台吉層	種別	計測値 (cm)				重量(g)	色調	備考
				最大長 (標準値)	最大幅 (標準値)	最大厚 (標準値)	孔径			
C1	4区3	土坑 17	土罐	(58.9)	13.1	12.6	4.6~4.4	9.01	灰 5Y4/1	定形
C2	4区3	土坑 17	土罐	57.5	14.7	13.7	5.3~4.9	9.53	灰黄褐 10Y8/2	定形
C3	4区4	土坑 17	土罐	56.2	13.4	13.3	4.8~4.7	9.98	曜灰黄 2.5Y5/2	定形
C4	4区3	土坑 17	土罐	56.8	15.6	14.9	5.1~4.8	11.96	灰黄褐 10Y8/2	定形
C5	4区4	土坑 17	土罐	56.2	14.9	15.2	4.8~4.6	12.10	黄灰 2.5Y5/1	定形
C6	4区3	土坑 17	土罐	52.1	13.6	13.3	4.9~4.5	9.29	黄灰 2.5Y5/1	定形
C7	4区3	土坑 17	土罐	52.0	12.6	13.7	5.8~5.1	7.87	黄灰 2.5Y5/1	定形
C8	4区4	土坑 17	土罐	51.0	14.6	14.3	4.8~4.5	10.02	黄灰 2.5Y5/1	定形
C9	4区4	土坑 17	土罐	51.6	14.0	13.3	4.9	8.87	黄灰 2.5Y5/1	定形
C10	4区4	土坑 17	土罐	47.1	13.6	13.6	4.7~4.6	7.45	曜灰黄 2.5Y5/2	定形
C11	4区4	土坑 17	土罐	(50.6)	13.3	13.2	5.2~5.1	8.00	黄灰 2.5Y4/1	定形
C12	4区3	土坑 17	土罐	(48.1)	13.7	(14.2)	5.2~5.1	7.98	黄灰 2.5Y4/1	
C13	4区3	土坑 17	土罐	(49.4)	13.3	12.8	5.1~4.9	7.40	黄灰 2.5Y5/1	
C14	4区3	土坑 17	土罐	(42.6)	13.8	13.0	4.7~5	7.48	曜灰黄 2.5Y5/2	
C15	4区4	土坑 17	土罐	(42.0)	14.2	14.5	5.1~4.7	(8.03)	曜灰黄 2.5Y5/2	
C16	4区3	土坑 17	土罐	(40.4)	13.4	13.4	5.1~5.5	6.16	黄灰 2.5Y5/1	
C17	4区3	土坑 17	土罐	37.7	14.1	12.8	5.4~5.1	5.81	曜灰 10Y8/5/1	
C18	4区4	土坑 17	土罐	41.0	13.5	13.9	5.2~4.9	6.58	黄灰 2.5Y5/1	
C19	4区4	土坑 17	土罐	(37.5)	13.3	12.7	4.9~4.7	6.01	黄灰 2.5Y5/1	
C20	4区4	土坑 17	土罐	(33.0)	13.5	13.8	5.6~5.0	(5.61)	黄灰 2.5Y5/1	
C21	4区4	土坑 17	土罐	31.0	13.6	12.5	4.9~4.8	4.82	曜灰黄 2.5Y5/2	
C22	4区4	土坑 17	土罐	(25.2)	13.9	13.5	4.8~4.7	4.11	黄灰 2.5Y5/1	
C23	4区4	土坑 17	土罐	(16.5)	(12.0)	(11.9)	4.8~4.4	(1.70)	曜灰黄 2.5Y5/2	
C24	4区4	土坑 19	土罐	(43.5)	24.6	(13.5)	測定 6	(13.77)	にぶい曜 7.5Y8/4	

掲載番号	地区	出土遺構・ 出土品名	器種	重量	磁性	残存状況	還元 重量	備考
2区3	C~D層	ガラス質片	69.0	×	—	—	—	—
2区3	C~D層	数塊系遺物	69.6	◎	—	—	—	—
2区3	C~D層	陶形網治滑	109.7	×	1/2	219.4	—	—
2区3	C~D層	陶形網治滑	114.3	△	2/3	171.5	—	—
2区3	P 26	網治滑	12.8	×	—	—	—	—
2区3	P 26	ガラス質片	26.9	×	—	—	—	—
2区3	P 26	ガラス質片	48.7	×	—	—	—	—
2区3	D層	陶形網治滑	14.8	×	1/4	59.2	—	—
2区3	D層	陶形網治滑	34.0	×	—	—	—	—
2区3	D層	数塊系遺物	46.4	◎	—	—	—	—
2区3	D層	陶形網治滑	107.6	△	ほぼ完全形	107.6	—	—
2区3	A層	数塊系遺物	40.5	◎	—	—	—	—
2区3	D層	陶形網治滑	251.6	△	ほぼ完全形	251.6	—	—
2区4	B層	陶形網治滑	46.8	×	—	—	—	—
2区4	B層	数塊系遺物	25.5	◎	—	—	—	—
2区4	C~D層	数塊系遺物	13.6	◎	—	—	—	—
2区4	P 3	陶形網治滑	39.8	×	—	—	—	—
2区4	C層	陶形網治滑	44.3	×	—	—	—	—
2区4	C層	陶形網治滑	17.2	×	—	—	—	—
2区4	C層	陶形網治滑	101.1	◎	—	—	—	—
2区4	C層	陶形網治滑	6.9	×	—	—	—	—
2区4	C層	陶形網治滑	105.1	×	ほぼ完全形	105.1	—	—
2区4	C層	数塊系遺物	5.2	◎	—	—	—	—
2区4	C層	陶形網治滑	89.2	×	1/2	178.4	—	—
2区4	C層	陶形網治滑	133.5	△	ほぼ完全形	133.5	—	—
2区4	C層	陶形網治滑	168.6	△	ほぼ完全形	168.6	—	—
2区4	C層	陶形網治滑	319.1	△	ほぼ完全形	319.1	—	—
2区4	C層	陶形網治滑	38.0	△	ほぼ完全形	38.0	—	—
2区4	C層	陶形網治滑	45.7	×	ほぼ完全形	45.7	—	—
2区4	C層	陶形網治滑	88.3	×	ほぼ完全形	88.3	—	—

掲載番号	地区	出土遺構・ 出土品名	器種	重量	磁性	残存状況	還元 重量	備考
2区4	C層	陶形網治滑	99.9	△	1/2	199.8	—	—
2区4	C層	陶形網治滑	107.3	○	ほぼ完全形	107.3	—	—
2区4	P 3	貝口?	42.8	×	—	—	—	—
2区4	C~D層	数塊系遺物?	42.3	△	—	—	—	—
2区4	C~D層	陶形網治滑	78.3	○	ほぼ完全形	78.3	—	—
2区4	C~D層	陶形網治滑	95.4	△	ほぼ完全形	95.4	—	—
2区4	C層	数塊系遺物	12.7	◎	—	—	—	—
2区4	C層	数塊系遺物	33.5	◎	—	—	—	—
2区5	C層	数塊系遺物?	21.6	×	—	—	—	—
2区6	C層	数塊系遺物 土口破片	47.5	◎	—	—	—	—
2区7	C層	再結合片	13.1	○	—	—	—	—
3区2	B層	陶形網治滑	192.8	△	ほぼ完全形	192.8	—	—
4区3	D層	再結合片	8.7	○	—	—	—	—
4区3	D層	貝口?	3.1	×	—	—	—	—
4区4	C層	数塊系遺物	169.1	◎	—	—	—	—
4区4	B層	陶形網治滑	16.5	△	—	—	—	—
4区4	B層	陶形網治滑	40.4	○	ほぼ完全形	40.4	—	—
4区4	A層	陶形網治滑	51.7	△	—	—	—	—
4区4	C層	陶形網治滑	27.3	△	—	—	—	—
4区4	C層	数塊系遺物	23.0	△	—	—	—	—
4区4	C層	数塊系遺物?	9.9	◎	—	—	—	—
4区4	C層	陶形網治滑	186.4	△	—	—	—	—
4区4	P 23	数塊系遺物	15.9	◎	—	—	—	—
4区4	数分沈着面	ガラス質片	81.4	×	—	—	—	字線等存在
4区4	数分沈着面	陶形網治滑	93.4	△	ほぼ完全形	93.4	—	—
4区4	土坑 19	網治滑	5.8	×	—	—	—	—
4区4	土坑 19	網治滑	2.7	×	—	—	—	—
4区4	C層	ガラス質片	11.16	○	—	—	—	—

新旧遺構対照表

掲載遺構名	地区	旧遺構名
壁穴住居	3区	34 壁穴住居
窟文柱建物	4区4	12 窟文柱建物
柱穴1	1区	1 柱穴1
土坑 1	2区4	24 土坑
土坑 2	2区4	23 土坑
土坑 3	2区4	22 土坑
土坑 4	2区4	21 土坑
土坑 5	2区8	45 土坑
土坑 6	2区8	26 土坑
土坑 7	2区8	27 土坑
土坑 8	3区1	30 土坑
土坑 9	4区1	32 土坑
土坑 10	4区1	35 土坑
土坑 11	4区2	37 土坑
土坑 12	4区2	36 土坑
土坑 13	4区2	40 土坑
土坑 14	4区2	39 土坑
土坑 15	4区2	38 土坑
土坑 16	4区2	44 土坑
土坑 17	4区3	4 土坑
土坑 18	4区4	16 土坑
土坑 19	4区4	20 土坑

掲載遺構名	地区	旧遺構名
炉 1	2区2	20 炉
炉 2	2区2	29 炉
焼灰層	2区1	18 焼土面
煎餅石	2区3	33 煎餅石
溝 1	2区4	19 溝
溝 2	4区2	43 溝
溝 3	4区2	42 溝
溝 4	4区2	41 溝
溝 5	4区4	10 溝
溝 6	4区4	11 溝
跡み	4区2・3	跡み
数分沈着面	4区4	Fe・Mnの集中
柱穴 1	2区1	P 1
柱穴 2	2区8	P 10
柱穴 3	2区8	—
柱穴 4	4区4	P 5
柱穴 5	4区4	P 56・57
P 1	2区2	P 12
P 2	2区4	P 5
P 3	2区5	P 43
P 4	2区5	P 39
P 5	2区5	P 51

掲載遺構名	地区	旧遺構名
P 6	2区5	P 44
P 7	2区5	P 54
P 8	2区5	P 33
P 9	2区6	P 23
P 10	2区6	P 20
P 11	2区7	P 19
P 12	2区7	P 21
P 13	2区8	P 8
P 14	4区2	P 23
P 15	4区2	P 28
P 16	4区3	P 26
P 17	4区3	P 42
P 18	4区3	P 41
P 19	4区4	P 32
P 20	4区4	P 21
P 21	4区4	P 4
P 22	4区4	P 13
P 23	4区4	P 1



1 柱穴列 (南東から)



2 1区1基盤層砂層と調査区北壁 (南から)



3 被熱面 (南から)



4 被熱面断面 (南東から)



1 炉 1 掘り下げ状況 (南東から)



2 炉 2 検出状況 (南西から)



3 炭溜り (南東から)



4 土坑 1 検出状況 (南から)



5 溝 1 (南西から)



1 2区5完掘状況（北東から）



2 2区4中世土坑・ピット群（南西から）



3 竪穴住居（北東から）



4 土坑8（北東から）



5 土坑9（北西から）



1 溝2~4 (北西から)



2 土坑11~16 (北西から)



3 窪み (北西から)



4 土坑17 (北から)



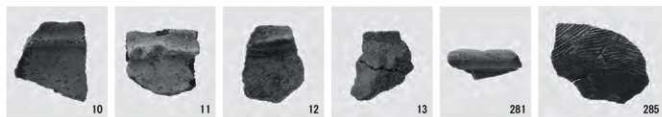
5 土坑18 (北から)



6 掘立柱建物・中世ピット群 (北から)

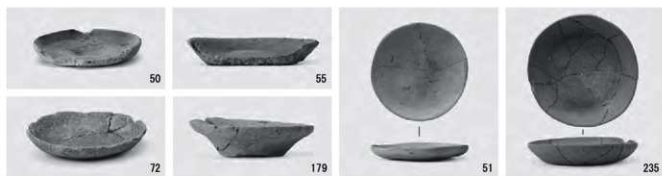


7 4区3・4 (北東から)

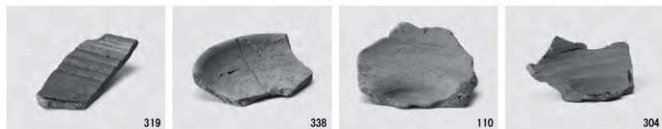


1 縄文土器

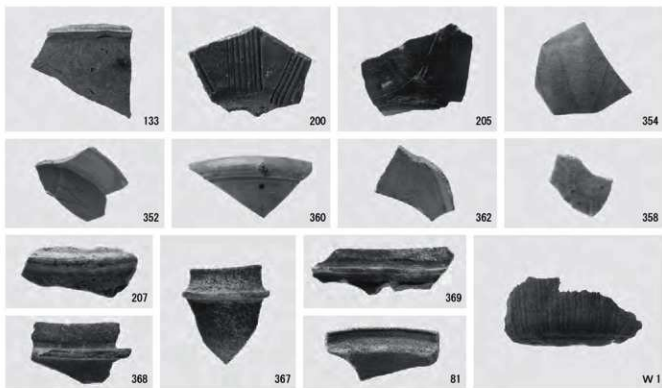
2 土師質煮炊具



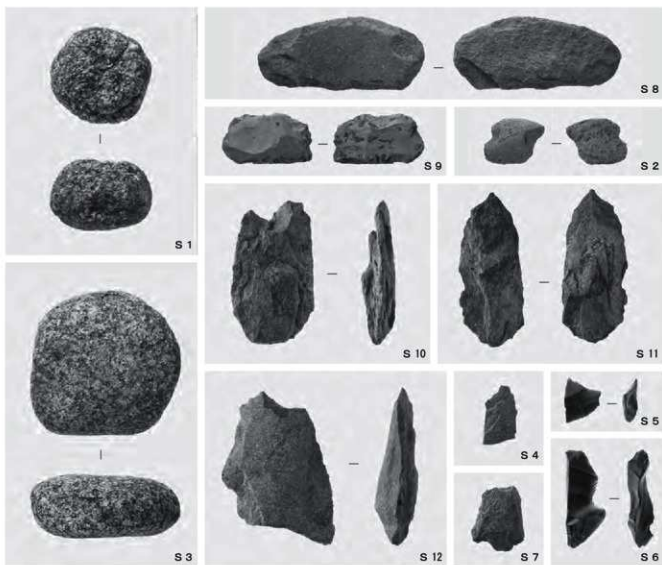
3 土師器皿



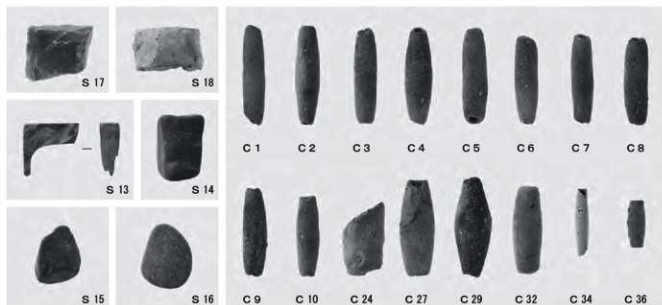
4 須恵器



1 備前焼・陶磁器・瓦質土器・漆膜

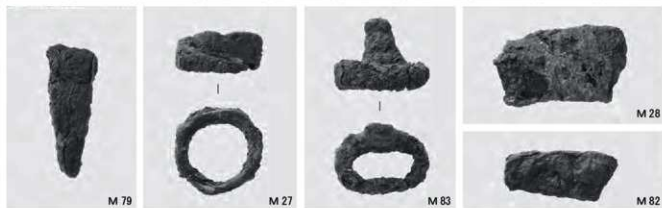
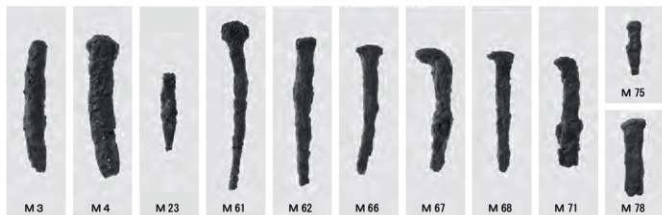
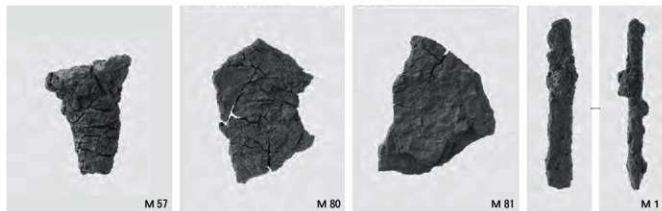


2 石製品①

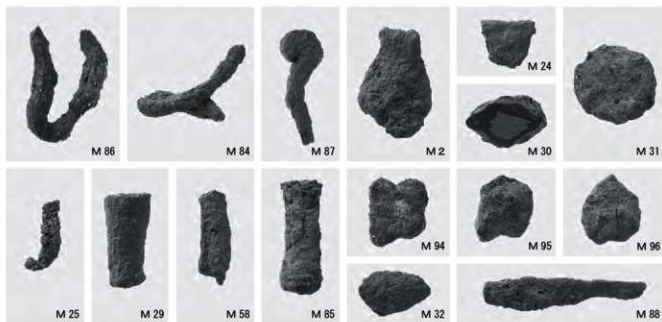


1 石製品②

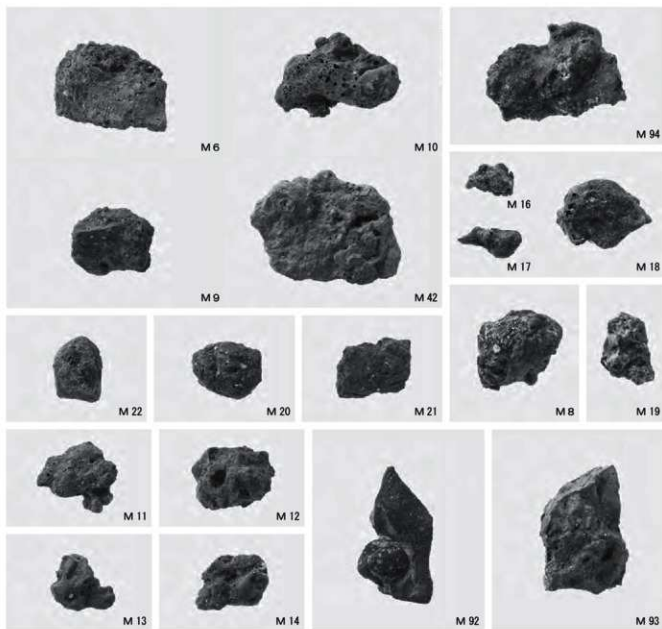
2 土錘



3 鉄製品①



1 鉄製品②



2 鍛冶関連遺物

報告書抄録

ふりがな	おさきいせき							
書名	尾崎道跡							
副書名	一般国道429号改築工事に伴う発掘調査							
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ番号	267							
編著者名	西村奏 物部茂樹 河合忍 白石純 鈴木瑞穂 株式会社パレオ・ラボ							
編集機関	岡山県古代古備文化財センター							
所在地	〒701-0136 岡山県岡山市北区西花尻1325-3 TEL 086-293-3211 FAX 086-293-0142 URL https://www.pref.okayama.jp/site/kodai/							
発行機関	岡山県教育委員会							
所在地	〒700-8570 岡山県岡山市北区内山下2-4-6 TEL086-224-2111							
発行年月日	2024年3月15日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 (㎡)	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
尾崎道跡 <small>岡山県 美作市古町 1869-1ほか</small>	岡山県 美作市古町	33215	336410018	35° 7' 16"	134° 19' 50"	20220509～ 20221031	1,000	記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
尾崎道跡	集落	古墳時代以前	竪穴住居 溝	1軒 1条	縄文土器、弥生土器、須恵器、石包丁・スクレイパー、鉄器			
	集落	古代	柱穴列 炉 被熱面 溝	1列 2基 1面 3条	土師器、須恵器、埴輪土器、伊壁、羽口、鉄片、鉄滓			
	集落	中世	掘立柱建物 土坑 炭溜り 溝 窪み 鉄分沈着層	1棟 19基 1基 2条 1基 1条	土師器、須恵器、備前焼、青磁、白磁、青白磁、天目茶碗、瓦質土器、漆器（竹製容器）、硯、火打石、碁石、土鍾、鉄器			
要約	一般国道429号に沿って長さ約200m、幅約3mの範囲を調査した。幅の限られた調査区であったが、縄文時代から室町時代までの各時代の遺物が見つかり、平成17・18年度調査（中国横断自動車道姫路鳥取線〈鳥取自動車道〉建設に伴う発掘調査）で確認した道跡の広がり的一端が明らかになった。主な遺構は、弥生時代の竪穴住居や溝、古代の柱穴列や炉、中世前半期の掘立柱建物や土坑、柱穴群である。古代の炉とその周辺からは多量の鍛冶関連遺物が出土し、当該期の鍛冶の様子が明らかになった。北側丘陵上に所在する小原山王山城に関連する遺構は見つからなかったが、その存在の可能性を示唆する遺物を確認した。							

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 267

尾崎遺跡

一般国道 429 号改築工事に伴う発掘調査

令和 6 年 3 月 15 日 印刷

令和 6 年 3 月 15 日 発行

編集 岡山県古代吉備文化財センター
岡山県岡山市北区西花尻 1325-3

発行 岡山県教育委員会
岡山県岡山市北区内山下 2-4-6

印刷 株式会社 中野コロタイプ
岡山県岡山市北区玉柏 390